
ライターアースと笑おう

六助

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ライターアースと笑おう

【Nコード】

N3072L

【作者名】

六助

【あらすじ】

ある日、悪魔が俺に言った。

「世界とか救ってみませんか？」

それが全ての始まり。

このちっぽけな田舎町を舞台に、世界の命運とやらをかけて俺が四苦八苦するそんな話だ。

願わくば、【ライターアース】と笑えますように。

木島陽平の独白（前書き）

これはとある物語の幕が上がる前に、主人公たる少年がいたら愚痴をこぼしているものです。

適当に鼻で笑いながら読んでやってください。

木島陽平の独白

俺はいつでも中途半端だった。

昔から、本当にやりたいことなんて見つけれなかったし、何かをやり遂げられたこともほとんど無かった。たまに興味を持ったことがあったとしても、中途半端に努力をし、中途半端に結果を残して、自分の才能の無さを思い知った。

笑えるのが、才能が無いと思い知ったくせに中途半端に諦めきれず、時々、思い出したように努力を繰り返すことだ。

まったく、素直に諦めればいいのにな。

そんな自分の中途半端さに嫌気がさして、荒れた時期もあったけれど、ほんの数年であっさりと更正してしまった。

荒れ方すらも俺は中途半端だった。

あ、よく勘違いされるのだが、俺はこんな風に中途半端なのだが、別にそのこと自体は今そんなに悲観していないし、それなりに青春をエンジョイしている。

実際、自分の愚痴みたいなことを言うのは結構久しぶりだった。

その程度には楽しく毎日を送っている。

ただ、つつい思ってしまうのだ。

こんな中途半端な俺が、本当に世界なんてものを救えるのか？

本当のところ、救えるかどうかなんて言っている場合じゃない。

俺しか世界を救えないのだから、何が何でも救わなければいけないのだけれど、俺はその決意すらも中途半端だった。

出来ることなら、こんな俺でも世界を救えると信じたい。

【ライターアース】と笑える日が来ることを、信じたい。

こんにちは、悪魔です（前書き）

さて、そろそろ幕を上げましょうか。

こんにちわ、悪魔です

「こんにちわ、悪魔です」

目の前の少女がそう言った瞬間、俺はためらう事無くドアを閉めた。

……おかしいな？

いつも通り、俺は普通に学校へ行こうと思ってドアを開けた。なのに、どうして悪魔（自称）が出てくるんだよ？

「春、だからかなあ？」

春になるといろんなモノが出てくるからなあ。悪魔を名乗る少女が出てきてもおかしくはないかもしれない。

いや、落ちつけよ俺。十分おかしいぞ、この状況は。

「あの一、悪魔さん？ 俺のところは新聞と悪魔とは契約を取らないって決めてますんで、悪いんですけどさっさと帰ってください」俺はきっぱりと言うと、嚴重に鍵をかけた。

こういう輩は一度しっかりと拒絶してら、相手にせずに見殺し続けるに限る

「いえいえ、安心してください。今日は契約を取りに来たんじゃないんですよー、木島きじま 陽平ようへいさん？」

は？

俺は啞然と口を開けた。

ちよつと待てよ。なんで、俺が振り返った先にこいつが居るんだよ？

さっきまでドアの外に居ただろ、おい。

「瞬間移動しましたからー」

少女はにつこりとほほ笑んで答えた。

いや、瞬間移動って……っ！か、今、心読まれたし！

「いやだなあ、心なんて読めませんよ」

「読んでるじゃねーか！」

無視を決め込もうとしていたのに、思わず俺はツツコミを入れてしまった。

それほどまでにこの状況に俺は吞まれていた。

正確には、目の前に居る、自称悪魔とやらに。

改めてよく観察してみると、少女の格好は不自然におかしかった。少女自体は、小柄で小動物系のかわいい顔立ちをしているだが、来ている服装が恐ろしくアンバランスなのだ。

禍々しくプリントされた髑髏マークのニット帽に、じゃらじゃらと音が鳴るほどのシルバーアクセサリーを身に付けている。しかも、上から下まで黒を基調としたシャツとデニムで、まさに黒づくめという感じだ。

きれいにズレている。

それが俺が少女の風貌に対して感じた第一印象だった。

「陽平さん、色々と聞きたいことはあると思いますけど。まずは腰を落착かせてからにしませんか？」

「……俺、学校があるんだけど？」

「たまにはサボるのもいいもんじゃないですかー」

こうして俺は、笑顔でサボりを強制されることになった。

「あ、私はコーヒー飲めないの、お茶をお願いします」

とりあえず客間へ通したけれど、図々しいことに少女はお茶を要求してくる。

別に要求を無視をしてもよかったのだけれど、変に騒がれるよりはおとなしくお茶を淹れた方がいいと判断。ついでにせんべいも付けてやることにした。

「おー、気が効いていますねー。さすが陽平さん」

「初対面のくせに名前と呼ぶなよ」

それ以前に、どうやって俺の名前を知ったんだか。

いや、今のご時世だ。俺の個人情報なんてあっさり公開されているのかもしれない。

「初対面、ですかー」

ふふっ、と意味ありげに含み笑うと、少女はばりばりとせんべいを食べ始める。

俺は少女がせんべいを食べ終わるのを待ち、質問をした。

「で、わざわざ茶と菓子まで出してやったんだ。それ相応の説明はしてくれるんだろうな？」

「ずずーっ。いいですよー、なんでも聞いちゃってください」
のんきに茶を啜りながら少女は答える。

「まず第一に……あんた、何者だ？ 悪魔とか名乗っていたが、まさか本物じゃないよな？」

「何を本物と定義するかはわからないけど、少なくとも、私たちは自分を悪魔と呼称しているよ」

「月並みだが、それを証明することはできるか？」

「証明、ですかー」

くすくす、と少女はおかしそうに口元を押さえた。

「悪魔に『悪魔の証明』をさせるだなんて、皮肉が効いていますねー。もつとも、この場合、悪魔が目の前にいるんですけどねー」

「御託はいいから、さっさと証明しろよ」

「ふむー、では聞き返しますけど、どうやって？ どんなことをすれば私が悪魔だと認めてくれるんですかー？ 瞬間移動はさっき見せましたし……目の前に大金でも出せばいいんでしょうか？ それとも、魔法でも使って大量虐殺でもしてみますか？」

「む」

言われて気付いた。

そういえば、俺はどんなことをされたら目の前の少女を悪魔だと認めるのだろうか？

羽が生えていたら悪魔か？

魔法で人を殺せば悪魔か？

人を超えていれば悪魔か？

結局のところ、そんな不確かな存在の証明なんてできないのかも
しれない。

そもそも、何ができれば『悪魔』だとはっきり断言できるのかが
わからないのだ。

だからまあ、なんだ、俺は俺ができないことをやってもらうこと
を証明とすることにした。

「じゃあ、せんべいを音を立てずに食べてくれ」

「ほえ？」

「それが出来たら、俺はあんたを悪魔だと認めるし、尊敬だつて
してやるよ」

少女は俺を奇異のまなざしで見つめ、やがてにつこりと微笑む。

「相変わらず、変な人ですねー、陽平さんは」

「うるせえ。つーか、相変わらずずっとなんだよ」

微笑んだまま少女はせんべいを手に取った。

「では、よく耳を澄ませておいてくださいよ」

少女は大きく口を開けると、そのまませんべいに齧りつく

「あんぐっ」

わけではなくて、そのまま丸ごと口に頼り込み、飲み込んだ。

飲み込んだ？ たとえ口の中に入るサイズだったとしても、のど
に詰まるだろ、普通。

だというのに、少女ののどはまったくを持って異常がないようで、
涼やかな声を俺にかけてくる。

「どうです、これで証明できましたか？」

「ああ、認めるし、尊敬するよ」

俺は軽く両腕を上げて、降参の意思を示した。

「ふふっ、それでは、他に何か聞きたいことはありますか？ 今
のうちに色々と聞いておいた方が今後のためですよー」

今後ってなんだよ？

そう聞こうとしたが、このまま悪魔のペースにはまるのが気に食

わないので、思い切った質問してみることにした。

「じゃあ、悪魔さん。逆に、あんたは俺に何を聞いてほしいんだ？　というか、あんた、何か俺に説明したいこととかあるだろ。質問はそれを聞いてからにする」

「おー、それはこちらとしても助かりますねー」

すう、と笑みを消し、悪魔は真剣なまなざしで俺と向かい合った。

「簡単に言ってしまうえば、陽平さん、貴方に世界を救ってもらおうと思っています」

俺は無言で目を逸らし、自分でも驚くほどの機敏さでこの場から逃げ出した。

世界の危機ってこんな感じ（前書き）

世界の定義は色々ありますが、とりあえずは地球規模のピンチですよ。

世界の危機ってこんな感じ

「はつきり言いますと、このままだと一カ月後には世界は滅んじやいますね。それはもう、文句のつけようが無いほど物理的に」

悪魔はそう笑顔で言葉を続ける。

「そして、それを救えるのは何と、陽平さん、貴方一人だけなのです！」

正直、唐突過ぎて話についていけない。

世界を救えるのが俺だけ？

はあ？ こんな一介の高校生に過ぎない俺が、世界を？

いつから世界はそんな安い物になっちまんたんだか、まったく。

目の前の悪魔へ言いたいことはたくさんあるが、とりあえず一言。

「まず、この縄をほどけ」

「いやです」

「いやですじゃねーよ！ 普通にほどけよコラあ！」

俺は現在、目の前の悪魔に拘束されていた。

どこから出してきたのか、ご丁寧に縄でぐるぐる巻きにされている。

「だって、縄をほどいたら逃げるじゃないですか、陽平さん」

「いきなり世界を救えだなんて言われたら逃げたくもなるわ！」
想像してほしい。

ある日、いきなり現れた少女（悪魔）に、世界を救って欲しいと言われたこの状況を。

引いた。

それはもう、この場に居るのが耐えられなくなるぐらいどん引きだった。

「あれ？ 俺はなんで悪魔なんかと話してるんだろう？ とか、今の状況を冷静に考えちまったじゃねーか」

「まー、この状況で素に戻ったら、やってられないという気持ち

はわかりますけど」

「やめろ。お前が原因なのに、俺を憐れむような目で見るな」

悪魔に憐れまれるなんて、もう最悪だ。

「でも、世界の危機なのは本当ですし、それを救えるのも陽平さんしかいないのも本当ですから、さつさと現実を受け入れてください」

「……三十秒くれ」

俺は深呼吸し、ふと、窓から見える青空を仰いだ。

ああ、今日はいいい天気だなあ。

あはははははははー。

あははは、はあ……。

「わかったよ。受け入れるかどうかは置いておいて、とりあえず話を聞いてやる。だから、さつさとその世界の危機とやらを詳しく説明しやがれ」

「ふふっ、陽平さんならそう言ってくれると信じていましたよ」
にこやかに悪魔は微笑む。

子犬を連想させる可愛い微笑みだったが、その時の俺にとっては、ケルベロスがよだれを垂らして俺を狙っているように感じた。

「始まりは、とある研究所が、うっかり秘密裏に開発していたウイルスをばら撒いてしまったことが原因なのです」

「うっかりで済まねえレベルじゃねーか！　つか、ウイルスってかなりやばいんじゃないのか？」

「いえいえ、そのウイルス自体には殺傷性とかは皆無なんですけどねー」

悪魔はホワイトボードにペンを走らせ、『ウイルス』と書きこむ。
ホワイトボード、どこから出したんだろう？　なんて質問は今更
野暮か。

「問題は、そのウイルスが人間に異能を宿らせるという事です」

「異能？ 手から炎を出したり、電気を操ったり、みたいな奴か？」

「そういう類の物だと考えてもらってオッケーです。要するに、現代科学じゃ、ちよつと説明できないレベルの現象を引き起こせるようになるんですよ」

『ウイルス』から矢印を引き、その先に『異能発生！』と書き足された。

「しかし、それだと矛盾しねえか？ そのウイルスを作ったのはいわゆる、その現代科学って奴なんだろう？」

「別におかしくはありませんよ。その研究所は科学とオカルトの両方を研究していましたから。多少ブラックボックスな部分はあるんですが、オカルトも科学と似た部分がありますし」

「ふん。まあ、そこら辺は素人の俺がいくら聞いても理解できそうにねえな。んで、そのウイルスが原因で、超能力者大量発生ってわけなのか？」

「んー、そういうわけでも無いんですよ」

ひゅんひゅん、と軽やかなペン回しを披露しつつ、悪魔は言葉を続ける。

「そのウイルスっていうのか、かなり感染力、発症力、ともにもの凄く低くて、大抵の人間は、まず異能力を得ることなんてないですね。実際、ウイルスはばら撒かれてから、ほんの数時間で死滅してしまいましたし。その規模も、田舎町一つ程度でしたしね」

しかし、と悪魔は言葉を区切り、ホワイトボードにペンを走らせた。

『ウイルス』と『異能発生！』を丸で囲み、そこから大きな矢印を引き、そこ先には『異能力者×4誕生』とでかでかと書かれている。

「何の因果か、十万人に一人の割合でしか発症しないはずの異能が、その田舎町に四人も発生してしまいました」

「……なあ、もしかしてその田舎町って」

「無論、陽平さんの住んでいるこの町ですよ」

「うっわあ」

俺は思わず 頭を抱えなくなった。

なんでよりにもよって、この町に？ ていうか、この町にそんな大層な研究所あったのか？

苦悩する俺に、追い打ちをかけるように悪魔は言う。

「そして、最悪な事に。その四人の異能力者の中に、この世界を壊しうる力に目覚めた者がいるんですよー」

「さらっと、重要なことを言わないでくれ」

「あ、ちなみにその異能力者は世界を壊す気満々ですから」

「わざとだな。わざと俺を追い込むような言い方をしてるな」

「いえいえ、そんなまさかあ」

その笑顔は肯定と受け取ったぞ、こんちくしょう。

「つーか、なんでそいつが世界壊す気満々だってわかるんだ？

そいつに直接聞いたわけじゃあるまいし」

「それはですね、現にその人が世界を壊しかけたことがあるからですよ」

「は？ どういう事だ？」

悪魔は目を細め、唇の端を釣り上げる。

それはいままでの可愛らしい笑顔とは違い、正真正銘、人を誑かす悪魔の笑顔だった。

「陽平さんは疑問に思いませんでしたか？ なんで悪魔である私が、世界の危機を救えだと言うのかを？」

「いや、そこはつつこんじゃいけないところだと思って。正直、来るなら悪魔じゃなくて天使の方が異和感無いと思ったがよ」

「そうですね、本来なら、天使と呼ばれる存在が来るのが適切です。実際、前回の時には天使が来ていましたし」

前回？

その単語に異和感を覚え、尋ねようとするが、その前に悪魔が答える。

「前回、天使と天使に選ばれた勇者が世界をかけて異能力者と戦い、敗れました。そして、世界が滅んでしまう寸前、勇者が自らの存在と引き換えに私と契約をしたんです。一カ月前まで、時を戻すと」

「で、現在に至るってわけか？」

「ええ、そうですね」

俺は軽く絶望した。

だって、そうだろう？

正式に世界を救う者として選ばれた奴が、ものの見事に失敗してるんだ。一介の高校生である俺がどうにかできるわけがない。

……否、まだまだ、まだ希望はあるはず。

「なあ、悪魔。ひょっとして、漫画やアニメみたいに、俺が異能力とかに目覚めたりするのか？　それで、こう、バトルしたり、相手の異能力を消すことができたり」

「目覚めませんし、できませんけど？」

「絶望した！」

俺が甘かった。

現実には夢も希望もありはしなかったぜ。

俺が頭を抱えていると、慰めるように悪魔が言葉をかけてくる。

「陽平さんには異能力や、そういった後天的な能力に目覚める可能性は皆無です。でも、陽平さんにはそんなもは必要ありませんよ」

「はあ？」

「だって、陽平さんですから」

……満面の笑顔で何を言ってるんですか、この悪魔は。初対面の悪魔にここまで信用される覚えはまったく無いんだけどなあ。

「なあ、ずっと聞きたかったんだが、なんで俺なんだ？　なんで一度失敗したつてのに、その上ただの高校生である俺のところに来たんだ？　俺より世界を救えそうな奴なんて、数え切れないほどいるだろ？」

「そうですね、強いて理由を挙げるなら『彼』が貴方を選んだから、でしょうか？」

「誰だよ、その無責任野郎は」

悪魔は無機質にその名前を口にした。

「赤城^{あかぎ} 時春^{ときはる}、前回の勇者にして、世界を救うはずだった者。そして」

一瞬、悪魔が俺に視線を向ける。

その視線の意味は、憐憫だとすぐにわかってしまった。

「貴方の唯一無二の親友だった人ですよ、陽平さん」

どすん、と鉄球を胃袋に落とされたのかと思った。

そう錯覚するほど、わけのわからない吐き気に襲われていた。

親友がいた。

この、俺にだ。

俺は自慢じゃないが、人間関係も中途半端で、知り合いや友達結構いるけど、親友と呼べる人はいなかったんだ。

だから、いつかはそんな奴と巡り合えることを期待してたわけなのだが、どうやら、前回にはそんな奴がいたらしい。

だが、もういない。

悪魔は、そいつが自分の存在を消して時間を巻き戻したと言った。つまりはもうそいつと俺が会うことはあり得ないという事だ。

なんだ、この気持ち悪さは。

親友だった奴と言われても、正直、今の俺からしたら会ったことも無い他人のはずだ。

なのになんで、こんなに気持ち悪いんだよ！

「陽平さん、貴方は本当に友達思いなんですネー。まさか、存在しなかったはずの親友の死を、そこまで嘆いてくれるとは思いませんでした」

嘆いている？

いや、この気持ち悪さはそうじゃない。

「ちげえよ」

これはきつと『怒り』だ。

「俺は悲しくなんか無い。ただ、むかついてただけだ」

いくら前回、親友だったからといって、今、顔も知らない奴のた
めに泣けるほど俺は人間ができてやいない。

ただ、苛立つんだよ。

「前回、テメエの親友すら救えなかった自分自身にな」

親友だった奴がいたんだろ、前回の俺？

今の俺みたいに、中途半端にじゃなくて、命を懸けてもいいつて
ぐらいの奴がいたんだろ？

なのになんで、俺はそいつを救えなかったんだよ！

「いいぜ、悪魔、上等だ。引き受けてやる」

気づけば、勝手に口が動いていた。

「正直、俺は世界を救えるだなんて微塵も思っちゃいねえ。けど
よ、救えるか救えないかじゃねえんだよな」

犬歯をむき出しに、俺は笑顔で言ってる。

「救わなきゃいけないえ！ 前回、たった一人の親友の親友も救え
なかったくそつたれな俺に、選択肢なんて最初から無かったんだ！
今度こそ、俺は救わなきゃいけないえ！」

中途半端な俺でも、信じてくれた奴がいたんだ。

世界を救えると、そう思ってくれたんだ。

「さすがにここで逃げ出すほど、俺は人間やめていないんでね」

悪魔は俺の言葉にうなずき、にっこりと微笑む。

「陽平さんならそう言うと思いましたよ」

「ふん、勝手に期待しすぎるなよ」

「安心してください。私が勝手に信頼しているだけですから」

悪魔が俺に手を差し伸べた。

俺はそれに答えようと、苦笑する。

「まず、縄をほどけ」

悪魔と始める共同生活（前書き）

共同生活で必要なのはマナーです。

間違っても相手のベットに潜り込んだり、風呂場でばったり遭遇してはいけません。

「作り置きとかも必要だよなあ」

どうせ元々、今日は買出しの予定だったんだし、悪魔に手伝わせて色々買いに行こう。

「と、できたか」

本日の献立は、ワカメの味噌汁とご飯、漬物、アジの塩焼きだ。香ばしい味噌の香りと、ご飯の蒸気が実に食欲を促してくれる。

我ながら、なかなか美味そうにできた。

「……おはようございます」

悪魔がなぜだか暗い顔で台所に顔を出す。

「おう、おはよう。今、飯が出来たところだからテーブルに着いてくれ」

「はい……」

食卓にそれぞれ皿と箸を分け、朝食の準備は整った。

「じゃ、いただきます」

「いただきます」

味噌汁を啜り、目の前の悪魔がしょんぼりと飯を食べている理由を考える。

あれ？ 飯、は美味いよな？

「なあ、悪魔。俺の飯、ひよつとして口に合わないか？」

「いえいえー、とつても美味しいですよ」

悪魔は即座に答えた。

嘘をついている様子は無い。

だとしたらなんだ？ しつかり泊る部屋も用意していたし、布団だってしつかり敷いてやったはずだよなあ……ん？ 布団？

「っていうか、お前！ なんで俺の布団に入って来やがったんだよ！？」

「反応が遅いです！！」

突っ込みをいれた瞬間、悪魔に突っ込まれた。

「陽平さん、反応が遅すぎですよ！ 正直、私は無視されたのかと思って、ちよつと心に傷を負っちゃいましたよ！」

「知らねえよ、つーか、布団に入ってくるな」

「バ力ですか！？ 陽平さん！ 朝起きたら女の子が僕の布団に（以下略）』は同居モノでは欠かせないイベントなんですよ！」

「それこそ知るかよ！」

俺と悪魔は口論しつつ、箸を進めていく。

「そもそもですねえ、陽平さんはこんなに可愛い女の子と一つ屋根の下だっというのに、何も感じないんですか？」

「だっってお前、悪魔だろーが」

「悪魔だっけ見た目は女の子ですよ？ ぶっちゃけ、えっちこともできちゃいますよ？」

「魂取られそうだからいいわー」

「軽い口調で断られたっ！？」

しくしくと泣い真似をする悪魔を無視し、俺はアジに齧りつく。

「つーか、味噌汁が冷める。さっさと食え」

「はいはいっと。もう、相変わらず陽平さんはドライですね」

「相変わらずってなんだよ」

ふふふっ、と意味ありげに悪魔は微笑む。

どうやらこの悪魔と俺は前回に面識があるらしいのだが、あたりまえだが俺はこいつのことなんかさっぱりだ。

一方的に他人と面識があるっていうのは、なんだか気持ち悪い感じられるが、まあ、スルーしておこう。

俺と悪魔は食事を平らげると、共同で食器を片付ける。

以外にも悪魔が手際良く食器を洗うので、いつもより早く片付けることができた。

「さて、飯も食ったし、食器も洗ったし、洗濯は昨日まとめてやっておいたし」

「準備は万全ですか？」

悪魔の問いに俺は頷く。

「それでは、【ライターアース】から世界を救う作戦会議をしましょう」

まず、昨日悪魔が説明したことを簡潔にまとめるところだ。
期限は一ヶ月。

最終目標はこの惑星から危機と取り除くこと。具体的に言えば、この惑星を破壊しうる力を持った異能力者の、『ライターアース』の排除だ。

そして、その『ライターアース』と、それに協力する可能性のある異能力者三人が、このちっぽけな田舎町に存在していること。

「で、合ってるよな？」

「オッケーですよ、陽平さん」

では、と悪魔が言葉を繋げ、

「今日はまず、詳しいルール説明から始めましょう」

悪魔は自前のホワイトボードにペンを走らせていく。

「私はとある四つのルールによって行動を制限されています。」

1・悪魔は【ライターアース】についての情報は持ち越せない。

2・悪魔は三人の異能力者についての情報は持ち越せない。

3・悪魔が異能力者を感知できるのは、異能力が発動した後に限る。

4・悪魔は異能力者に対して、直接的な排除行動をとることを禁じる。

と、まあこんな感じですね」

「つまり、お前はほとんど頼りにできないってことか？」

「ええ、そう思っていた方がいいですね」

この悪魔が前回で経験した記憶はほとんど持ち越せないってわけか。

だが、それでもまだこちらに優位がある。

【ライターアース】というあだ名を持つ異能力者。

世界を壊しうる能力をもつ者が存在しているとあらかじめわかっている。ある程度の準備や覚悟をすることができる。

「質問だ、お前は昨日、世界を破壊しうる異能力者のことを【ライターアース】と呼んでいたが、それはそいつの能力に関係している呼称なのか？」

「回答不可能です。ただ便宜的に付けた呼び名なのか、それとも能力名を指すのかわかりません。その情報については私の記憶に存在していませんから」

「ふん、予想はしていたがやっぱりそうか」

「どうやら呼び名以外の情報は持ち越せていないらしい。」

「だが、もしもその呼び名が能力名だったときの予想はしておいたほうがいい。」

「ライターアース……大地、いや【星の書き手】か？ なんつー

か、これが能力名だとしたら、かなり嫌な予感しかしねえんだけど」

「あははは、万物創造能力とかだったら、嫌ですよねえ」

「軽々しくチートみたいな能力例を言うなよ。絶望したくなる」

「悲しいことに、そんなチートなんてありえないと俺は断言できない。」

「この星を破壊しうるほどの異能なのだ。それくらい力を持っていたとしても不思議ではない。むしろ、そうだと仮定したほうが納得がいく。」

「……はあ、このことはとりあえず保留しておこう。」

「いきなりやる気を失いたくないしな。」

「次の質問だ。異能力者を感知する条件として、その異能が発動するって言うてただけだよ。それは異能が発動した後は継続してその異能力者を感知可能なのか？ それとも、異能が発動したときだけ感知可能なのか？」

「それは前者ですねー。一度異能を感知したら、継続してその異能力者を感知可能です」

「その感知の精度や効果を及ぼす範囲はどれくらいだ？」

「距離は制限されていません。どこにいても感知可能、居場所の特定が可能です」

「ふむ、それはかなり助かるな」

一度異能を感知してしまえば、誰が異能力者が特定できる。

こちらがあちらを一方的に知っているという状況は、かなり有利に働く。

それがどんな異能だとしても、ある程度対策を立てることによって、無力化することもできるかもしれない。

「だが、それは悪く言えば後手に回り続けなきゃいけないってことだよな？」

「その通りです、陽平さん。私の感知だと、どうしても先手を打つことはできませんね。最悪の場合、【ライターアース】が一ヶ月後、正確には30日後になりますが、その時にしか能力を使わないことも考えられます」

「そして、ゲームオーバーか」

悪魔の感知は頼りになる。が、それに頼りすぎれば自滅する。

「できれば異能力者を感知に頼らず発見したいんだが、異能力者に共通する条件、みたいなものは無いのか？」

「んー、そうですねー」

悪魔は腕を組んで思考を開始した。

恐らく、ルールで縛られていない、持ち越せた情報を整理しているのだろう。

「参考になるかわかりませんが、ウイルスを開発した研究所のデータだと、異能を発現しやすいのは十代中盤の中高生に限られるみたいです。そして、精神に何らかの異常を持つているみたいです」

「精神に異常？ うつ病とかそんなのか？」

「うーん、曖昧ですけど、どちらかというと『心の闇』って言うた方がしっくりくる感じです。どうやらウイルスは、悩み多き青少年が大好きらしいので」

「まー、中二病って奴もあるしな」

要するに、何か心に問題を抱えている奴を探せばいいわけか。つつても、どうやって？

「地味な聞き込みしか無いですよー」

「やっぱ、そうか。面倒だな……ていうか、心を読むなよ」

「うふふふー」

悪魔の不敵な笑みを聞きながら、俺は頭を抱えなくなってきた。異能力者と相対するっただけでもきついのに、その上、まず探すところから始めなきゃいけないなんて。

唯一の救いは、ここが田舎町でそれほど人口も学校数も多くないっただけだな。

「と、そっぴや肝心のことを聞き忘れていた」

「ふんふん、なんですか、陽平さん？ 私のスリーサイズなら

」

「異能力者への対処なんだけどよ」

「しくしく、また無視されましたぁ」

泣き真似がうぜえ。

俺が舌打ちすると、悪魔はけろりとした表情で肩をすくめた。

「はぁ、それでな。俺は結局、異能力者をどうすればいいんだ？ 世界を壊すのはいけませんって説得すればいいのかよ？ それとも、バトル展開で一人一人、拳で友情を育めばいいのか？」

「どちらでもいいですよ、三人の異能力者の場合なら」

悪魔は今までのおどけた雰囲気を消し、凄惨に微笑む。

「ただし、【ライターアース】は殺してください。説得、和解なんてしようと思わないでください。無意味ですから」

「おいおい、物騒だな。普通に仲良く手を取り合ってハッピーエンドはできねえのかよ？」

「ええ、できません」

悪魔は笑顔で否定した。

「相手は仮にも世界の壊しうるほどの存在。つまり、それだけの力を得るほどの『心の闇』を抱えた異常者なんです。言葉なんて決して届かないし、存在自体が罪みたいなものなんですよ」

だから、殺してください。

何の感情も感じさせない声で、悪魔は言った。

「安心してください、陽平さん。例えば、貴方が【ライターアース】を殺したとしても、それが貴方の罪にならないようなアフターケアもありますし、貴方が望めば殺人の記憶も消してあげますから」

「まったく、サービスがいいな」

「知らないんですか？ 悪魔って実はサービス業なんですよ」
おどけて笑う悪魔。

だが、その瞳はどこまでも冷たい。

背筋が凍りつきそうな、嫌な威圧感を悪魔は俺に向けてきやがる。強制的に人を従わせるような存在感を、一介の高校生に向けてやりますよ、こんちくしょう。

だが、それとこれとは別だ。

「断る、誰が殺人なんかしてたまるかよ」

こちらら反抗期まっさかりの高校生だ。

悪魔の言うことなんて簡単に聞いてやるものか。

「勝手に俺の不可能をお前が決めるな。俺ができないことは俺が決める。俺がやらなきゃいけないことは俺が決める」

だから、

「俺は【ライターアース】と笑い合える結末を探す。くそつまねえバッドエンドなんて呼びびじゃねーんだよ、悪魔」

俺の答えに、悪魔は冷たい視線を返す。

「驕らないでください、陽平さん。たかが人間ごときが、自分以外の誰かを救えるとも思っているんですか？」

「笑わせるなよ、悪魔。たかが悪魔ごときが俺の価値を決めるんじゃないねえ」

冷たい視線を砕くように、俺は悪魔を睨み返した。

「どうせ世界を救うんだ。ついでに他人の一人や二人、俺が救ってやるよ」

あほらしいほどハッピーエンドで行こうじゃねーか。
誰も死なずに、誰でも笑顔になれるような、飽き飽きとしたハッピーエンドを目指してやる。

中途半端な俺でも、それくらいはできるはずだ。

そう、俺の親友だった奴が信じていたはずだろーが。

「あはっ、あははははは！」

俺の言葉に、悪魔は心底愉快そうに笑い出した。

「あはははははっ！ やっぱり、陽平さんは陽平さんです！ 貴

方はやっぱり最高ですね！」

「ちょ、いきなり笑い出すなよ。驚くっつーの」

悪魔はしばらく俺の隣で笑い続け、

「うん、陽平さんならきつとできますよ」

そう、無責任に俺を信頼しやがった。

「あー、そういうばだけだよ。お前って、名前とかあるのか？
ほら、いつまでも『悪魔』じゃどうかと思ってよ」

「そうですねー、一応、前回使っていた偽名があるんですけど」

「へえ、どんなのだ？」

「聖名せいな 灯あかりっていうんですよー」

「合ってないにもほどがあるじゃねえか！」

そんなこんなで、俺と灯は世界を救うことにした。

ブローグはここまで（前書き）

はい、ここまでがブローグ。
次からがマジで本格始動ね。

プロローグはここまで

「んじゃー、転校生君、ちゃちゃつと挨拶よろしくー」

「はい！」

灯は担任に元気良く返事をし、いきいきとした口調で言う。

「今日から皆さんと同じクラスで生活させてもらうことになりました、聖名灯と言います。まだこっちに来たばかりだから、いろいろわからない事があると思いますので、皆さん、フォローよろしく！」

クラスの面々が、それぞれノリ良く言葉を返していく。

元々、うちのクラスはノリが良くて明るい方だし、灯のテンションには合うのかもしれない。

俺はひそかにほつと安堵する。

「ちなみに、そこに居る木島陽平君とは同じ家に2人つきりで住んでいます」

「てめえっ！」

なんてことを言いやがるんだよ、こいつは。

うちのクラスはこういうことに余計に敏感で、しかも転校生がそんなことを言っただけなら……

「えっ、陽平てめー、一足早く大人の階段をつ！？」

「ちよつと男子、そんなこと言わないんだよ。きつとまだ、キスマでだよ。意外に陽平君はへたれだからね！」

「意義ありい！ だからこそ陽平が押し倒されるといいう状況が生まれるのではっ！」

「いやいや、さすがの陽平でも、そんなエロゲ状況に陥ったら獣になれるさっ！」

「ちよつと男子ー、陽平君は受けに決まってるでしょ！」

こんな力オス空間になるのは必然なんだよ、ちくしょう。

「くす、くすくすくす」

あ、笑ってやがる。

あの悪魔、いい笑顔で笑ってやがりますよ？

「で、結局陽平君、どういう状況なの？」

騒ぐクラスの面々の中、一人の女子が俺に尋ねてくる。

そして、実にタイミングよく騒ぎが沈静化し、俺の答えを決して聞き逃さないためにクラスの面々が聞き耳を立て始めた。

俺は、ため息を吐きつつ答える。

「そいつ、実は男なんだよ」

『マジかつ！？』

「違いますっ！」

即座に否定する灯。

だが、甘い。

この空間（教室）では、より面白そうなことが真実なるのだ！

「そうだな、心は女の子だって言ってたもんな」

「やめてくれませんか？　そういう下手な言いがかりよりも性質が悪い発言」

「ごめん。でも、こういうことは早めにカミングアウトした方がいいと思うて」

「だからやめてください、優しい笑顔で人を貶めるのはっ！」

既にクラス内では、灯の男の娘説が浮上している。

これを覆すのは並大抵の発言じゃできないぜ？

「くっ」

灯は悔しそうに俺を睨む。

ふん、悪く思うなよ？　仕掛けてきたのはそっちからだ。

「そっちがその気なら……」

灯の目が据わり、口元には引きつった笑みが浮かぶ。

こいつ、何をするつもりだ？

「私がいっきとした女の子だということ教えてあげましょう、陽平さん」

灯の目が怪しげに光り、

「うきやー」

奇声を上げて飛び掛ってきた。

「うわ、きもっ」

俺が思わずそう呟いてしまうほどの大ジャンプで、灯は俺の席（ちなみに前から三列目）まで飛翔。

そのままの勢いに任せて俺を押し倒す。

「ほーら、陽平さん、確認してください。ちゃんと胸がありますよねー？ 本物ですよねー？」

「ちょ、やめっ」

俺の腕にやわらかい何かを押し付けてくる灯。

てめえ、自滅覚悟かよ！

「やめろ、やめるんだ灯。こんなことをして何になるっていうんだ！」

「あれー？ 胸だけじゃわかりませんか？ 仕方ないですねー、陽平さんはー」

「落ち着けえええええ！ お前、絶対後で後悔するから！ 自分を殺したくなるから！」

「うふふふー、えっちですねー、陽平さんはー」

「せめて会話を成立させろ！」

いろいろな場所を密着させようとしてくる灯を、俺は必死で押さえ込む。

これは……俺の体力が尽きるのが早いのか、灯が素に戻るのが早いのかの勝負！

「で、結局さ」

俺たちが変なバトルを繰り広げていると、先ほどの女子が冷静に俺たちに尋ねた。

「どういう関係なの？ 君たち」

俺と灯は一瞬で素に戻り、声を揃えて答える。

「ただの同居人」

ふーん、と女子は興味なさげに相槌を打ち、

「とりあえず、仲良いね、君ら」

苦笑いしながらそう言った。

周りを見ると、ノリが いいはずのクラスメイトが、軽く引いていた。

灯の騒動も一通り収まり、そのまま放課後になった。

クラスメイトは灯にこの学校を案内したがっていたが、顔見知りということで俺が率先して案内することにさせてもらった。

とりあえず、これで二人だけで話が出る。

「灯、まずは教室を出るぞ。今後の動きについて相談する」

「……」

「灯、行くぞ」

「……………」

「もしもし、灯さん？」

「私はここに居ません」

灯は現在、机に突っ伏したまま、自分の心を完全に閉ざしていた。
「なあ、俺は別に気にしてないから。ほら、転校初日って、妙にテンションがおかしくなるものだから」

「変な慰めはやめてください。私の暴走のせいで、陽平さん引かれてたじゃないですかー」

「正確には俺たちの仲の良さに、らしい」

不思議なことに、クラスメイトの連中には俺と灯のやり取りがいちやついているように見えたらしいのだ。

確かに、転校生がいきなりクラスの一人といちゃつき始めたら軽く引くが、なぜ俺たちにそれが適応されたのだろう？ まったくをもって理解できない。

「とにかく、私の乙女ハートはもうずたばろです。自ら引き裂いてしまったのです。今日はもう何もする気が起きませんよう」

「いきなり仕事boyコツトすんなよ。つーか、悪魔にも心があつたんだ」

「今の一言にえらく傷つきましたー」

どよーん、と灯は黒いオーラを発生させている。

ああもつめんどくせえ。

なんで俺が悪魔のメンタル面に気を使わなきゃいけないんだ？

「ちつ、わかったよ。俺にも原因の一端はあるからな。ある程度、お前に対して責任を取ってやる」

「具体的には？」

「お前が何か俺にして欲しいことを言え。ある程度だったら、実現させてやる」

「本当ですかっ!？」

がばっ、といきなり灯は起き上がる。

現金な奴め。

「嘘を言っても仕方ねえだろ。いや、そもそも普通逆じゃね？」

悪魔が人間の願いを叶えるもんじゃねーの？」

「まあまあ、たまにはおつなものじゃありませんか」

にこにこ笑顔で答える灯。

なんか、はめられた気分だ。

「ではでは、そうですねー。私が陽平さんにして欲しいことはですー」

しばらく腕を組んで悩むそぶりを見せた後、灯は満面の笑みで俺に言う。

「陽平さん、私の頭を撫でてください」

「……別にいいけど、なんでだ？」

「なんでも、です」

首を傾げつつ、俺は素直に灯の頭を撫でてやった。

「ふにゅー」

灯が気持ちよさそうに、変な鳴き声を漏らす。

あー、そういえば昔、妹にもこんな風に頭を撫でてやったっけ。

「改めて気づいたんだが、お前、寝癖結構あるな」

「はいー、普段はそれを誤魔化すためにニット帽を被っていますから」

生暖かいクラスメイトの視線に耐えつつ、灯が満足するまで俺は撫で続けた。

なんか心が挫けそうになったけどな。

「で、灯がようやく満足したので、さっそく行動を開始するぞ」

「了解ですー」

……まだ、灯の顔がふにやふにやしているが、俺はかまわず話を続ける。

「まずは俺の知り合いに、お前を紹介する。出来るだけ多くの知り合いに紹介するつもりだから、とりあえずは簡単な挨拶程度な」

「ふむ、ということは私は前回の記憶から、陽平さんの知り合いと一致する人物が居ないか確認すればいいわけですねー」

つまりだ、俺の作戦はこうだ。

灯は前回の世界で、少なくとも俺とその周りの人間を知っているような口ぶりだった。

そして、記憶は削除されているが、恐らく、異能力者とも面識があるだろう。

もちろん、異能力者と会った記憶や、ほんのわずかな姿を見かけた程度でも、ルールは忠実に灯の記憶を削除しているかもしれないが、それでも、以前の知り合いと関わっていけば、そいつに会う可能性が見えてくる。

「じゃ、行くぞ。一介の高校生がどこまでできるか、とりあえずあがいてみるぜ」

「その言葉には同意しかねますけどー、まあ、協力は惜しみませんよー。私だって、世界には消えてもらったら困りますし」

「あ？ 悪魔でもやっぱ、そういうこと気にすんのか？」

「はい。ほら、行きつけの本屋が潰れるのは忍びない的感覺で」
世界Ⅱ行きつけの本屋かよ。

まあでも、行きつけの本屋が潰れるのは嫌だよなあ。

ここ田舎だから、一軒ぐらいしか本屋ねーし。

そう考えたら、是非とも世界を救わないといけない気がしてきた。

「庶民的だよなあ、俺」

はい、つー感じで、世界を救う物語スタート。

できりゃー、笑い合える結末でありますよーに。

プロローグはここまで（後書き）

ゆるゆるはここまで。

世界を救う物語は、なかなかシビアになるみたいですよ？

ベイベーボマーの独白（前書き）

まずは一人目。

ベイベーボマーの独白

昔から私は我慢が足りない子供だった。

何か気に食わないことがあると、すぐにだたをこねて、両親を困らせていた。

ひどいときだと、私は椅子で窓ガラスを叩き割ったりもしていた。例えば、小さい頃から私は全部が気に食わなかったのかもしれない。

だからすぐに苛々して、すぐに周りに破壊をばらまいた。要するに、赤ん坊だったのだ、私は。

泣き喚き、暴れ周り、どうしようもないベイベー。

それでも私はなんとか成長して、それなりにこの苛立ちと折り合いをつけるように生きれるようになった。

そのつもりだった。

それが間違いだと気づいたのはいつだっただろう？

助けるつもりが傷つけて、

謝るつもりが誤って、

結局はいつも通りに破壊をばら撒く、どうしようもないベイベー。

それが私、ベイベーボマー。

ゲームスタート

徐々に日も傾き、夕日によって廊下が赤く染まる頃、俺と灯は軽い疲労感を覚え、そろってため息をついた。

なんつーか、俺のダチは良くも悪くも十人十色な連中ばかりで、一度に対応して回るとさすがに疲れる。

つと、いけねえ、いけねえ。こんな程度でテンション下げてちゃ世界を救うだなんて到底無理だろうーが。

俺は気合を入れ直して灯に尋ねる。

「うし、これで大体俺のダチは紹介し終えたけど、どうだ？ 何か成果はあったか？」

「・・・んー、そうですねー」

灯は額に手を当て、瞑想するように瞼を閉じている。

恐らく、前回の記憶と照らし合わせてるんだろう。

しばらくして灯は肩をすくめた。

「まだなんとも言えませんが。確かにある程度前回にも会っている人は居ますけど、あまりにも情報が制限受けていない感じです。つまり、シロが多すぎます。というか、それ以前に陽平さんの友達どんだけいるんですかー？ 前回も多かったけど、今回はちょっと度が越えて多いですよ。リアルに友達百人ぐらい作ってるじゃないですかー」

「良くも悪くも田舎だからな。ある程度社交的だったらそれくらいにもなるぜ」

「いやいや、なりませんって！ どんだけ人望あるんですか、陽平さんはっ！ モテモテですかっ、目指せハーレムですかこのやるー」

「モテてもねーし、ハーレムも目指さねえっつーの」

俺が額にチョップを適度な威力で叩き込むと、あう、と灯は声を漏らす。

その様子は小柄で子犬のような可愛らしさを持つ灯がやると、思わず庇護心をくすぐられそうになるが、忘れてはいけない、こいつは文字通り悪魔だってことを。

灯は世界を救うために必要な相棒で、信頼も必要だが、それ以上に警戒も必要だと思う。

見た目は可愛い女の子だとしても、本質は人外の悪魔なのだから。
「んー、どうしました陽平さん？ 私の顔をじーっと見て？ はっ、ひょっとして私に見惚れていたんですか？ 夕暮れに染まる私の横顔に何かを感じちゃったのですかー？」

「はいはいっと。ところで灯、これからちよつとダチっちゃーダチだけど、かなり特殊なダチを紹介しようと思うんだがよ」

「わかってましたよ、スルーされることぐらい。予想してましたもん、こんなことで挫けてられませよー、私」

虚ろな瞳でガッツポーズをとる灯を見ると、今度からはもうちよつと構ってやらなきゃなあ、と思った。

ともあれ、だ。

「そいつは頼りにな奴だけど、明らかに異常だから気をつけて対応しろよ」

「・・・・・・了解ですー、はふう」

「悪かったって、次からスルーしないで対応するって。だからテンションを戻せ」

灯は無言の上目遣いで俺を見つめてくる。

あー、もしかしてあれか？ また頭を撫でなきゃいけないのか？
周りに人が居ないことを確認しつつ、俺は乱暴に灯の頭を撫でてやった。

「ちっ」

「わーい、舌打ちしつつも頭を撫でてくれる陽平さんってステキー」

「気が済んだならさっさとモードを切り替えやがれ、おらおら」
「やー、乱されるう、私の髪が乱されてるー」

数分間かまってやることによって、やって灯の機嫌が戻った。

次からはマジでスルーはやめようと思う。

灯という悪魔はどうやら、俺が思っていたよりもナイーブな存在らしい。

「はい、テンションが戻りましたので真面目に仕事しますよー。陽平さん、これから紹介してくださる方なのですが、その人はどんな感じに異常なのですか？」

灯が仕事モードに切り替わったことに安堵しつつ、俺は答える。

「明らかに異常なことをしているくせに、それがまるで普通みたいに話してくる。ネタバレすりゃー、これから会ったのは情報屋みたいな存在だ。けど、相手の雰囲気飲まれて余計なことをしゃべるなよ、あつという間に『商品』にされるぜ？」

「へえ、面白いことを言いますねー、陽平さん。悪魔の私に、プライバシーも何も関係ありませんよ？」

不敵に笑う灯の顔は、実に悪魔的で、ある意味で頼りがいがある物だった。

「やはー！ なになに、陽平っ！？ 私に何か用かなっ？ とうかその隣に可愛い可愛い女の子は誰かなあ？ あつ、ひよつとして彼女かなー？ イチャイチャラブラブなのかなー？」

「あ、いや、私はその、陽平さんとはちよつとした知り合いで・・・」

「ほほう！ 陽平とはどこで知り合ったんだい？ まったく、こんな可愛い可愛い女の子とお知り合いになるだなんて、陽平も隅に置けないなあ、このこのう！」

誰も居ない、静まり切った教室。

その静けさをぶち壊すように、サンシャインな笑顔で軽快にトークしているのは、俺のダチで、この学校の情報屋でもある安田 やすだ 猫子 ねここ だ。クラスメイトではないが、同学年ではある。

すらりと伸びた手足に、スレンダーな体型。天然茶髪のショートヘアーと、その名の通りネコ科を連想させる魅力的な笑顔。

まちがいなく猫子は美少女だ……。性格はちよつとアレだな。

「これから色々世話になると思うからな、挨拶回りしてんだよ」

「おおーう、そっかー。その子が噂の転校生って訳だね！なんでも、転校早々からクラスの面々が見ている中で陽平といちゃいちゃしたという」

「ぶっ！？」

俺と灯はそろって噴き出した。

猫子の情報屋としての腕をもつてすれば、今日やってきた転校生のデータなんて既に筒抜けだろうと思っていたが、それにしてもこんな噂が流れているとは思わなかったぜ。

灯も顔を赤くして慌てて否定する。

「あうあうー、あれは違うのですよう」

「へっ、そうなの？ 噂によれば、物凄い勢いで陽平に抱きついてそのままにやんにやんーっといちゃついた感じになってるけど？」

「……………うあ、もうだめです。陽平さん、私の転校デビューは失敗に終わりました」

「心配するなよ。俺たちにその気が無いってわかればあつさり誤解は解けるって」

「ははっ、そうデスネー」

おかしいな？ フォローしたつもりだったんだが、なぜか灯のテンションが落ちている。

とりあえずテンションが下がっている灯は置いておいて、猫子と話を進めることにした。

「噂のことはさておきだ。猫子、俺たちがお前に会いに来たのは、ただ単に挨拶回りってだけじゃない。情報屋としてのお前にも、いろいろと頼みたいことがあって来た」

「ほ、ほーう。私の情報が欲しいと？ いいぜ、陽平の頼みとあ

れば断れないなっ！ 二年二組の佐藤君の恋愛事情から、我らがアイドル、破竜院^{はりゅういん} 剣君^{けん}の情報だって格安で売ってあげるちゃうよー！

にやはー、と猫子は営業スマイル全開で俺に語りかける。

だが、俺は愛想笑いの1つも返さずに、無言で猫子に視線を向けた。

「……ああ、そっちじゃなくて、『こっち』情報が欲しいのかい？」

俺が頷くと、猫子の顔から営業スマイルが消える。

それと同時にまとう雰囲気も一変した。

一介の女子高生から、情報屋としての顔へ。

猫子は優雅に机へ腰掛け、俺に笑みを向ける。

「へえ、嬉しいね、陽平。私の方に戻ってくれるつもりになったのかな？」

代わりに浮かぶ笑みは、捕食者のそれに近い。

残酷で気まぐれな、肉食獣の笑み。

それこそが俺の知っている猫子のもう1つの顔だった。

「残念だがよ、俺は戻るつもりはねえよ。今回はちょっと特例でそっちの事情が絡まりそうってだけだ」

「それは残念。せつかくまたコンビが組めると思ってたのにさ」

「はっ、俺はもう一介の高校生にすぎねーよ」

俺の答えに、猫子の表情が僅かに歪む。

その歪みは悲しみか、はたまた憎しみだろうか？

どっちにしろ、俺には何も言えない。

言える訳がねえ。

「できればそっち方面でお前に頼りたくなかったけどよ。お前以上で頼れる情報屋を知らなかったからな」

「にやはっ、それは嬉しいなあ」

歪みは一瞬で元に戻った。

それこそ、何事もなかったかのように。

ちつ、今はそんなこと考えてもしかたねえだろうが。

「んで、そっちの落ち込んでいる子の前でこっぴどく話を話したってことは、少なくとも、その関係者だね？」

「ああ、そう考えてくれ」

俺はいい加減戻って来い、このボケ！ という気持ちを込めて灯の頭を叩く。

「あう……はい、そうですね。私はとある事情で陽平さんと行動を共にしているのですよ」

叩き所が良かったのか、灯が仕事モードへと切り替わった。

「なるほど、随分可愛らしい相棒だね、陽平。もつとも、中身は見た目ほど可愛らしくなさそうだけど」

「お前と同じように、な」

ふくくつ、と猫子は息を詰まらせるように苦笑する。

「前置きはこしら辺でいいだろ、猫子。俺はお前に情報を買いに来たんだ、皮肉を言いに来たんじゃねーんだよ」

「陽平にだったらいくらでも皮肉を言われても構わないけど、そうだね、君たちは一刻も早く情報が欲しいよね 『ウイルス』についての」

「っ!？」

灯の表情に動揺が走る。

無理も無い、猫子のやり方に慣れている俺だって、驚きを声に出さないで精一杯なんだからな。

「その反応だと、当たりみたりだね。なんでわかったのか？ つて顔してるねえ。そんなの、ただの勘だよ、勘、あてずっぽ。『ウイルス』の情報が流れたのが最近で、その直後にあなたが転校してきたんだ。関連性を疑うな、っていうほうが無理だろう？」

「やは、と猫子は灯に笑いかける。

「さすがは陽平さんが頼りにしている情報屋さんですねー。けれどもいいんですか？ 情報屋さんがそんなに簡単に自分の手札である情報を切って？」

あはっ、と灯は猫子に笑い返す。

「取引には見せ札が必要だよ。それに、私が言ったのは『ウィルス』が流れたということだけ。内情に詳しくなければ反応もしない程度のことさ」

「反応ですかー。確かに驚きましたけど、私はただ驚いただけですよ？ ただ驚いてみせただけで、色々決定付けてしまっているでむぎゅー！？」

「そこまでだ」

俺は灯の口を塞ぐ。

「落ち着けよ、灯。口でこいつと戦おうって考えがまず間違いだ」
もががっ！ と何か灯が抗議してくるが無視して猫子と向き合う。

「猫子、俺たちはおそらくその『ウィルス』についての情報が欲しい。俺たちがわかつているのは、この田舎町になぜだか知らないが人を異能力者へと変える『ウィルス』がばら撒かれたってことだ」
「なんだ、ほとんど知ってるじゃないか。つまらない、せつかく君を焦らして遊ぼうと思っていたのに」

猫子は浅くため息を吐き、呆れたような視線を俺に向けた。

「というか、相変わらず君はストレートだねえ、陽平。そういうのが私たちみたいなのは一番苦手だってわかってやっているのかい？」

「俺だってまるつきりバカじゃねーさ。お前だからこういうやり方をしてんだよ、察しろよ、猫子」

「・・・・・・ほんと、陽平には敵わないなあ」

困ったように猫子は微笑む。

俺もそれに合わせて笑みを作った。

「つーわけで、さくさくつと今わかつてること教えてくれ」

「はあ、まったく、とんだ災難だよ。でもね、私が知っていることは大体君が言ったことと同じだよ。とある研究機関が生み出した試作品が、偶発的に異能力者を生んだから、その異能力者たちをサンプルとして捕まえようとやっきにしている奴らが居る。それが、

私を知っている全てだよ」

サンプルにして捕まえる、か。

まあ、ある程度予測はしといたが、そういうゴミクズみたいな連中が湧いてきてやがったかよ。

めんどくせえ、場合によっては『掃除』もしなきゃならねーじゃねーか。

「わかった、サンキューな、猫子。情報料は………って、灯、掌を齧るのを今すぐやめろ。悪かったから、お前を放っておいて話を進めたのは謝るから。それもう甘噛みのレベル超えてんぞ！？」

俺の掌に灯が原始的な攻撃をしてきやがった。

恨みがましく俺を見る目には、「よくも私を無視して話を進めてくれましたね、こんちくしょう」としつかり書いてある。

しゃーねー、じゃん、お前と猫子が相性悪そうだったんだからよ、と視線で返した。

「にやはははっ」

俺たちのやり取りを見ていたのか、猫子は愉快そうに笑い出す。

「今回の情報料は別にいいよ。たいしたこと話してないし、君たちのコントも見られたしね。サービスってことにしておく」

「ん、わりいな、猫子」

「礼なんて必要ないさ、私と陽平の仲じゃないか。そうだね、強いて言えば最近あまり遊んで無かったから、近々デートでもどうだい？」

「そうだ ぼっ！？」

そうだな、と頷こうとした瞬間、衝撃が俺の顎を貫いた。

「ふふふっ、残念ですねー、猫子さん。陽平さんはただ今、私と付き合うので物凄く忙しいようなので、そのデートはまた今度ということでいただっ！？」

「おい、てめえ。危つく脳を揺さぶられるところだったぞ？」
バスケットボール感覚で猫子の頭を掴み、黙らせる。

「とはいえ、忙しいってのも半分ぐらい本当だからな。デートはお預けってとこだな」

俺のそう答えると、猫子の表情に暗い色が混ざったが、それも一瞬、

「………そつかあ、そりや残念無念っ！ いやあつ、本当に陽平ってば女心を焦らすのがうまいねっ！ 焦らすつもりが焦らされちゃったって感じかなっ？」

にやはははっ、と軽快に笑い、猫子は自分のキャラを一介の女子高生に戻した。

しゅたん、と身軽に机から降り、そのまま軽い足取りで教室の扉まで歩いていく。

「んじゃねー、陽平。それに可愛い彼女さんっ！ またのご利用をお待ちしておりますよんっ」

オーバーな動作で猫子は俺たちに礼をし、そのままくると方向を変えて扉を開けた。

教室から廊下へ一歩踏み出そうとするその前に、俺は猫子の背に声をかける。

「猫子、次は俺がデートに誘ってやるから、楽しみにしとけよ」

猫子はその足をぴたりと止め、深々とため息を吐いて、背を向けたまま、俺に答えを返す。

「ほーんと、陽平には敵わないなあ」

それだけ言っと、猫子は軽快な足取りで廊下へ消えていった。

陽がほとんど沈み切り、空が薄紫に染まる頃、俺と灯は街灯もほとんど無い田舎道を歩いていた。

「ふーん、なあにが『にやはは』ですか！ あんな笑い方リアルにしている人なんて初めて見ましたよ！ というか、ぶっちゃけ私は猫子さんが嫌いですね！」

猫子が去った後、そろそろ下校時刻ということなんで、俺と灯は

共に帰路に着いているのだが、灯の機嫌が恐ろしく悪い。

「あいつは人によってキャラを使い分けるからな。あいつが『にやはは』とか言うのは俺の前だけだぜ、さすがにクラスじゃ普通に話すぞ」

「よーするにぶりっこという奴ですか！」

「微妙にちげーよ。つーか、お前はなんでそんなに猫子を嫌ってんだよ？」

俺の問いに、そっぽを向きながら答える。

「ふーん、人を嫌いになるのに理由なんかありませんよーだ。きつと前世とかで殺しあつた仲なんじゃないですかー？」

「悪魔に前世あるのかよ？」

「あつたらの話です」

なんだ？ 猫子を嫌いなら猫子に対して態度がきつくなるのはわかるが、なんで俺に対しても態度がきつくなってるんだ？

「なあ、さつきから何怒ってんだよ？」

「怒ってなんかいませんよー……陽平さんの石亀」

「お前さりげなく人の悪口言うのやめろよ。てか、石亀ってなんだ、石亀って」

「乙女心に気付かない人は石亀で充分ですう」

「いや、お前乙女以前に悪魔だろーが」

灯の眉がぴくりと動いた。

あ、顔は笑顔だけど絶対キレやがってる。

「ほーほー、陽平さんは私が女の子じゃないと。いいでしょう！そこまで言うならしっかりと確かめてくださいよ！ ほらほらあつ」

「落ち着け、灯。それは朝にやったパターンだろ！ 学習しろ！」
乱心寸前で俺は灯の頭を叩き、なんとか正気へ引き戻す。

「うう、陽平さんが冷たい」

「むしろ俺はなんで悪魔が俺に優しさを求めるのかがわからない」
俺はいつもの皮肉のつもりだったのだが、その言葉を聞いた瞬間、

灯は今までに無い儚げな微笑を浮かべていた。

「安心してください、私の都合ですから。陽平さんは何も悪くないんですよ」

その微笑みがあまりの痛々しくて、俺はついつい灯の頭に手を乗せる。

「よくわかんねーけど、多分、お前も悪くないんじゃないの？」

俺は照れ隠しにそっぽを向いていたから、その時灯がどんな顔をしていたのかわからない。

「悪魔でもですかー？」

けれど、そう尋ねてくる灯の声はさっきよりも明るかった気がする。

「悪魔でも、だ」

ぶっきらぼうに俺が答えると、くすりと灯が笑みを漏らした。

「やっぱり優しいですね、陽平さんは」

灯が言うその言葉の意味を、俺は一体どれだけ理解しているんだろうか？

陽が沈んだ薄暗い空を見上げ、ふと、そんなことを思った。

漆黒の夜空。

静寂の森。

もの言わぬ世界。

昼夜が逆転するだけで、この田舎町はまるで死んだように音を失くす。

初夏だというのに、虫の音一つしないという異常な空間に成り果ててしまうのだ。

だがこの町の住人はそれに気付かない。

あまりのも当たり前すぎるものが無くなっていても、人はそれに気付けない。

いや、当たり前すぎるからこそ、気付けないのだ。

例えるなら、そう、空に人が存在しないと信じきっているからこそ、実際にその存在を目にしたとしても意識に入らないように。

「・・・・・・・・・・・・・・・・動いたか」

何もかも飲み込むような黒の世界に、その人影は存在していた。空を足場に、遊惰にその人影は佇む。

輪郭は闇に融けてしまい、男なのか、女なのかすら判別できない。そもそも、本当に人の形をしているのかすら曖昧だ。

「ああ・・・・・・・・今日は良い夜だ。終わりの始まりを宣告するにはうってつけじゃないか」

しかし、その声はとても美しい人間のものだった。

男か女か判別できないほど曖昧な中性的な声、しかし、だからこそ美しい。

夜と朝の境界を表す黄昏のような美しい声。

その声で人影は　【ライターアース】は宣言する。

「ゲームスタートだ。さあ、二度目の戦いを始めよう」

直後、夜の帳を裂く様な爆音が町に轟いた。

予感（前書き）

何よりも怖いのは予感です。
嫌な予感ほどよく当たります。

予感

ば、
化け物だ。

ふざけるなよ、なんだよ、ありや？

小娘一人ちよつと脅かすだけの、簡単な仕事だつて思つてた。

なのに、なんだよ、あいつ？

なんなんだよ！
あいつつ！？

「死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね」

ああ、後ろからあいつの呪いが追いかけてくる。

逃げなきゃ、もっと早く逃げな

「死ね！」

「ぎゃあつ!？」

熱い、足が熱い！

熱いし痛てえし、動かねえ！

なんだこりゃ？俺は焼けた鉄球で足をぶん殴られたのか？

「
・
・
・
・
・
・
死ね」

おい、やめろ。

やめろよ、マジでやめろ！

俺が何をした？　ほんのちよつと脅かしたただけだろ！　指一本触っちゃいねえし、怪我１つ付けてねえんだぞ、なのになんでこんな目に合わなきゃいけないんだよ！？

「た、頼む。なあ、助けてくれよ、おい、頼むよ。何でも言うつ、

金だって払う！ だからもう勘弁してくれ！」

「黙れ」

「うあつ!？ あう、ああ……あちいよ、いてえよ、いてえよ、勘弁してくれよ、見逃してくれよ」

「黙れ！」

焼けた鉄球みたいなのが、俺の体を何度もぶん殴って来る。

視界も霞んでよく見えねえし。

親に顔向けできない仕事ばっかやって、他人を脅して金を貰うなんてゴミみたいな仕事で生き延びて、ああ、だからバチが当たったんだ。

畜生、畜生畜生畜生畜生畜生畜生畜生畜生畜生つ!!!

けど、化け物は俺を見下して、吐き捨てるように宣告する。

笑う。

晒
う。

嘲笑う。

ベイベーボマーは笑っていた。

己の力を自覚し、そしてその力を持って憎むべき対象を爆破し、理解した。

自分は化け物になったのだと。

人間という枠からはみ出てしまったのだと。

それが愉快で仕方ない。

それが悲しくて仕方ない。

涙が出るほど愉快で、涙が出るほど悲しかった。

「あ
あ
・
・
・
・
・
・
」

嗚咽が喉の奥から漏れる。

自分がやってしまった所業に対して、罪悪感で押しつぶされそうになる。

いっそ、狂えてしまったらよかったのに。

この力に見合うくらいに、心も化け物になってしまえばよかった

たのに。

「第二回っ」

「食卓会議いー」

「いえー」

そんなこんなで二日目の朝、俺と灯は朝食を食べながら作戦会議を開始する。

ちなみに今日の朝はパン食だ。

「で、二日目なんだがよ。結局、異能力者に対して具体的な案ってまだ考えつかねえんだよなあ」

「ですよー。基本的に私のセンサーも受動的ですし、『ウィルス』が感染しそうな心の闇を持った人なんて簡単に見つかりませんし。もし、居たとしてもその人が『ウィルス』に感染しているかどうかなんて能力を使わなきゃわかりませんし」

「おまけにこんな過疎化寸前の田舎町でも、十台中盤の中高生だって数百人は居るんだぜ？ それ全部は網羅できない。加えて言えば、あくまでも十代中盤っていうのはデータに基づいた可能性に過ぎないんだろ？」

あ、やべえ。考えたらだんだん途方も無いことのような気がしてきたぞ？

っーか、世界を救うんだから、途方も無いのも仕方ないのか。

だがこのままじゃジリ貧になって、そのままタイムアップって事も在りえる。

「んー、でもですねー、陽平さん。確かに理論上はそうなんですけど、多分きつと異能力者を見つけるということに限っては、案外なんとかなるかも知れませんか？」

「は？ どういうことだ？ お前のセンサーじゃ、能力を発動していない奴は感知できないんだろ？」

俺の問いに、灯は不敵な笑みを浮かべて頷く。

「はい、その通りです。けどですねー、陽平さん。よく考えてください？ 私のセンサーは確かに受動的で、相手が能力を発動しなければ感知できません。ですが、それで充分なのです。つまり、別に【ライターアース】以外は、後手に回り続けても構わないということなのですよー」

灯の言葉を聞き、俺はその意味を、理解した。

「……つまり、こういうことか？ 俺たちの目標はあくまでも【ライターアース】の制止だ。極論を言えば、他の三人の異能力者たちについては無視してもいい」

「加えて言えば、猫子さんから昨日聞いた情報によりますと『ウィルス』が漏れたのはどうも最近のことみたいですしー。【ライターアース】も含め、ほとんどの異能力者はその力を自覚していないと考えていいと思います」

そうなる、なんとか糸口は見えてきた気がするぜ。

異能力だなんて非日常的な現象を自分自身が起こしてしまったなら、そいつは確実に混乱するだろう。

能力を使うのもためらう奴も居るかもしれない。そもそも、その能力に使用条件みたいなものがかかっている可能性もあるのだ。

異能力者が能力を自覚し、力を使いこなすまでにはインターバルがあるだろう。

そのインターバルの間に、悪魔のセンサーで人物を特定し、その能力に対する対策を練ったり、説得することが出来れば、一介の高校生である俺でもなんとかなるかもしれない。

「なので、前に私が最悪な例として、一カ月後にいきなり【ライターアース】が能力を使用して世界を壊す可能性を上げましたが、それはほとんど無いと思ってもいいです。いかに最悪最強の異能力者である【ライターアース】だとしても、その能力が強大であればあるほど使いこなすのには時間が必要なんですから。ましてや世界を壊すだなんて人間の、いや、生物としてのスペックを逸脱した能力を行使するにはそれなりの準備期間が必要でしょうしねー」

「つまり、俺はお前が感知した異能力者を片っ端から説得、もしくは心の闇を晴らしてやればいいって訳か？」

灯はにっこりと満面の笑みで答えた。

「もしくは、殺しても構いません」

「は、安心しろ。それはありえねえよ」

その答えを俺は一笑に伏す。

何度も言うようだが、俺は『一介の高校生』に過ぎない。

どこぞの特撮ヒーローみたいに、悪い奴を皆殺しーだなんてできるわけねえし、やりたくもねえ。

いや、出来るなら俺は『暴力』には頼りたくないんだよ。

別に博愛主義とかじゃなくて、ただ単に、そう言うのが嫌なだけ。無責任に平和を願って、戦争が無くなればいいのかほざくよーな、一介の高校生のわがままに過ぎねえんだよ。

「ま、なにわともあれ、方針は決まったな」

「はい、基本は待ちの姿勢で地道に聞き込み。学校関係を中心に搜索しつつ、私のセンサーに引っかかったら、即対応ということだ」

「おう」

俺たちは素早く朝食を済ませ、登校の準備へと移った。

窓から覗く空はグレーに染まっていて、隙間も出来ないほど灰色の雲が敷き詰められている。

昨日の天気予報では、朝から雲ひとつ無い晴天だと言っていた気がする。

なんとなくだが、嫌な予感がした。

その日の昼休み、俺と灯は教室で適当にクラスメイトと談話しながら弁当を食べている。

今の俺たちにできることは、出来るだけ社交的により多くの人間と関わっていくことでより多くの情報を仕入れることだ。

俺自身、ある程度浅く広くやっているので人間関係には困らないが、こういう風にある程度『深く』仲良くしておかないとある一定以上の情報は入りにくい。理想としてはお悩み相談が出来る程度の仲にはなっておきたいと思うが、なんというか、そういう下心を持ってクラスメイトと接するのは、なかなか自己嫌悪が湧いてくるものらしい。

「はあ」

「おや？ どーしたんですかー、陽平さん？ なんだか元気が無いですよ」

クラスメイトたちは弁当が食べ終わると、各自の席に戻ったり、教室の外へ赴いたりして解散していった。

まだ転校二日目で、客観的に見ても可愛い灯をこのクラスの連中が放っておくのは不思議だったが、その内の一人が俺にウインクをしたので、どうやら俺に気を遣ってくれたらしい。

なぜか俺と灯は恋人同士として見られているので、どうやら二人っきりの時間も必要だということで解放してくれたのか。

「まったく、変なところで勘違いしたり気を遣ったりすんなあ、このクラスの連中は。」

「ん、なんでもない。別に家庭のエンゲル係数の心配をしているわけじゃないぞ」

「いやいやいや、陽平さん。私すっかり家賃納めていますし、結構小食なので食費も少なめで済みますよ！ 手間のかからないお手ごろなペットです！」

「ペットとか言うなっつーの。見る、周りの連中が俺を、鬼畜を見るような目で見てくるじゃねーか」

「そうですね、本当にペットだったなら、もっと私を可愛がってくれるのに……」

今度は『早くも倦怠期か？』とか『焦らす作戦だな、陽平』や、『恋愛の駆け引きをあつ陽平が使えるなんて、成長したわね』とか言ってるじゃーねーか。つか、最後の奴は俺に対してやけに偉

そうだなあ、おい。

まあ、なにわともあれ、俺とこのクラスメイトたちは比較的に仲がいい方だからな。こいつらに何か重大な悩みや心の闇みたいなものがあつたら、俺はそれを見逃さなくらいの自信はある。

なら、今は違う奴らに時間を割くべきか。

「灯、ちよつと付き合え」

目配せをすると、灯は俺の意図を読み取り、頷いて席を立った。心地よい騒がしさに満ちた教室から、廊下に出て、俺と灯は並んで歩いていく。

「クラスの奴らとはある程度付き合いが深いし、関わっている時間も長い。だから今は、違うクラスや違う学年の奴らと関わろうと思っただが、どう思う？」

「いい作戦だと思いますよー。それに、私もあのにぎやかなクラスメイトたちが心の闇を抱えてるとは思えない………というか、信じたいですしねー」

信じたくない、か。

笑顔でさらりと言っているくせに、その言葉には重さがあった。

「なあ、そっぴやお前、やけにクラスに馴染んでいたよな？ 確かにお前の性格と合いそうな奴らばかりだったけどさ、お前自信も結構親しみを持って接してたように見えたんだが？」

俺の質問で、灯は自分自身でもやっとな声を上げる。

「ああ………そういえば、はい、そうですねー。私と彼らは前回も親しい仲だったので、ついついその時の記憶を思い出したんだと思います」

「そうか」

懐かしげに、儚げに笑う灯に、俺は相槌を打つことぐらいしか出来なかった。

話を聞いている限りでは、灯はどうやら前回はこの学校の生徒として潜入していたらしい。

悪魔がどんな目的でこの学校に潜入していたかは知らないが、聖

名灯として学校生活をそれなりに楽しんでいたように思える。

そうじゃなきゃ、友達なんてできねえだろうしな。

「そういや前回と言えさ、俺や猫子ともお前は関わってたのか？俺に対してはやけに意味深な発言してくるし、猫子とは必要以上仲が悪いように見えるし」

「んー、そうですねー」

灯はしばらく俺の顔をじーっと見ると、なぜかくすりと微笑んで答えた。

「陽平さんのことはノーコメントで」

「あ？なんでだよ」

「ノーコメントしたら、ノーコメント。秘密なんですよー」

むう、子犬みたいな笑顔をしゃがって。

すっかり可愛いと思っちゃったじゃねーか。

「はあ、俺のことは一先ず置いて。猫子のことはどうなんだよ？」

「知りません」

「おうい！」

一転して不機嫌かわった、笑顔で不機嫌オーラを分泌している。

「なんでそんなに猫子のが嫌いなんだ、お前は」

「さあ？さっぱりです。というか、前回の記憶では彼女、普通に物静かな目立たない人だったんですけどねー」

「マジかつ！？つか、嘘だろ、それ？」

「私が陽平さんに嘘吐いてどうするんですか」

いや、でも信じられねえし。

俺の表情で察したのか、灯も肩を竦めて同意した。

「私も驚きですよ。前回と今回である程度印象が変わっている人も居ましたが、あそこまではなかったですよー」

前回と今回か。

俺の親友だった存在が消えてしまったせいで、一体どれだけの影響が出てるんだろうな？

「つーか、他の誰でもない、俺自身がどんな風に前回と違うか一番知りてえ。」

中途半端じゃないものを手に入れた、俺を。

「意外と世界は変わりやすいように出来ていますからねー。そう考えると、私の記憶というのも案外頼りにならないのかもしれない。なん。なので陽平さん、陽平さんにも考えて欲しいんですよー。なんかこう、いかにも心の闇を抱えてそんな人が知り合いに居ないか？」
灯が肩をすくめて冗談交じりに尋ねてくる。

「たたく、そんないかにも心に闇を抱えてそんな奴、俺の知り合いや友達に居るわけがな……あれ？」

「そういえば居たなあ」

「居たんですかっ!？」

声を上げて驚く灯。

「まー、そりゃーなあ、俺だつて冗談をマジで返されたら驚くぜ。」

「と言つてもあくまでも外見的に、だからな。昨日はそいつ風邪で休んでいたらしいから、お前に紹介しなかったけど」

「そ、そうですか。ちなみに陽平さんとその人はどういった関係で？」

「なんで上目遣いで俺を見るんだよ？」

「それはさておき、あいつと俺との関係か。」

「てつとり早く言えば先輩と後輩なんだが、せっかくだからこう言わせてもらおう。」

「友達だよ、多分な」

「できればあつちもそう思ってくれているとありがたい。」

根暗な後輩（前書き）

陽平の後輩その1が登場します。

根暗な後輩

一学年下のとある教室、その窓際の一番後ろ、それがそいつの指定席だ。

「なんか用？ 木島先輩。用が無いならさっさと帰ってください、目障りなんで」

そいつは俺を見つけると、開口一番になかなかいいパンチを繰り出してきやがった。

「相変わらず口が悪いな、明美。少しは先輩に対する敬意とかねーのかよ？」

「敬意？ はっ、私がなんで木島先輩を敬う必要があるの？ 意味わかんない」

言葉の中には不慣れなものなら一撃で沈める毒が込められており、友達である俺に対しても容赦が無い。

というか、こいつは誰に対しても敵意満点だ。

自分の周囲を全てシャットダウンするために、前髪は伸ばしたままにしており、すっぽりと目を隠している。髪質自体は綺麗なもののだが、自分の腰まで伸ばしているのと、全体的に関わった相手を呪い殺してやろうか、と言わんばかりの負のオーラをまとっているせいで、まるで映画に出てくる亡霊のようだ。

闇や呪い、などと言った言葉がこれほど似合う奴もそうそう居ないだろう。

それが俺の後輩、桐生^{きりゆう} 明美^{あけみ}だ。

「俺に対する敬意はさておいてだ、今日はお前に新しい友達を紹介しようと思ってきたんだ。あれだ、どうせお前は一人を除いてるくに友達と遊ぼうとしない暗い奴だからな。ありがたく思えよ、このやろっ」

「友達なんて要りませんから帰ってくださいよ」

「いいから黙って聞け、な？」

俺は明美の頭をがしりと掴んで、力づくで灯の方を向かせようとするが、明美は首の力だけで抵抗してくる。

「やめてください、セクハラとかマジ無理」

「おいおい、先輩の親切をセクハラ呼ばわりかよ、薄情な後輩だなあ」

「小さな親切大きなお世話」

「黙れ根暗女」

「……あのー、二人とも。とりあえず喧嘩はやめましようよー」

「「ちっ」」

俺と明美は同時に舌打ちをし、渋々休戦した。

不思議なことなのだが、俺と明美は顔を会わせるといつも口喧嘩から軽い乱闘に発展してしまう。それでも俺は女性には手を出さない主義だったのだが、明美と友達になつてからは唯一の例外が出来た。

それくらい俺と明美は相性が悪かったりするわけだ。

「改めまして、初めましてですねー、明美さん。私は聖名灯、この度陽平さんのクラスに転校してきた者です。陽平さんと明美さんは友達だつて聞いていてねー、出来れば私も友達に入れて欲しいと思つてるんですよー」

俺たちを仲裁した後、にこやかに灯は明美に挨拶をする。

その笑みはまさに小動物さながらの可愛さを纏つていて、初対面の相手に少なからずマイナスのイメージを絶対に与えない完璧なものだった。

「やだ、もう話しかけるな」

だがしかし、明美はそれを一刀の元に切り捨てる。

灯は明美の態度に戸惑いつつも、笑顔を立て直して尋ねた。

「あのー、明美さん。私、何か不快にさせることしましたかー？もし、何か私に不満があつたら遠慮無く言ってくださいねー」

「別に。強いて言えば、あんたが私の目の前にいることぐらいだ」

あつ！？」

そつぽを向いて憎まれ口を叩く後輩に、俺は鮮烈なデコピンを喰らわせる。

「ったく、この社会不適合者が。恥ずかしいからって無闇やたらと敵意を振りまくな」

「だつ、誰が恥ずかしいって！？」

明美が顔を赤く染めて抗議してきた。

んなもん、お前だよ、お前。

明美は重度の人見知りで、人と交流するぐらいだったら孤独死する方がマシだと考えているような奴なのだ。

無闇やたらと敵意を振りまくのは、そうして自分の周りに人を近寄らせないためだろう。

けど、友達が欲しくないわけではないらしい。

そうじゃなかったら、俺とこっやって会話することもないだろう。それに、親友だって作らないだろうしな。

「はっ、どうせ木島先輩は可愛い彼女を見せびらかしに來ただけだろ？ 私はそんな惚気話に付き合う気は無いね」

口元を歪めて皮肉げな笑みを作る明美。

「いや、こいつとはそんな仲じゃねーし。今日はただの挨拶だけだつっの」

「じゃあもう用は済みましたね、もう帰ってください」

「ほんつと、お前という奴は、本当に可愛くない後輩だな」

確かにいつも敵意満点の明美だが、今日はやけに他人行儀というか、対応がそつけない気がする。

いつもならもつと会話を繰り広げて俺に毒舌を吐いてくるのに。

「…………どうせ、私は可愛くないよ」

いつもなら十倍返しで反撃してくるはずなのだが、明美はやや沈んだ声で答えるだけ。

気のせいかもしれないが、明美が若干落ち込んでいるような気がする。

もしかしてだが、こいつ、拗ねてるんじゃないか？

試しに灯を褒めてみる。

「はんっ、そりゃーな。お前みたいに口の悪い奴より、小動物系美少女の方が可愛いに決まってるだろーが」

「よ、陽平さん。その言葉を嬉しい限りでけど、一言で表すなら空気を読んでー」

「・・・・・・・・ふん」

あわあわする灯は放っておくとして、やはりこれだけ言ってるのに何も言葉を返さないのは明美らしくない。

俺は苦笑しつつ、言葉を続けた。

「だがな、それはあくまでも性格的なことを言っているんであったな、別にお前の容姿は可愛い方だと俺は思ってるぞ？」

「別に、分かりきったお世辞なんていらない」

「ほらな、こうすれば結構可愛いじゃねーか」

ぶつぶつ拗ねている後輩の、長い前髪を片手で軽く上げる。

前髪で隠れていた瞳は、綺麗な栗色で、目元がすっとはっきりとした、どちらかと言えば綺麗と言った方がいいものだった。

しかし、珍しく俺から褒められたせいか、明美が石の如く固まっているんだが。

「ちよつと、陽平さん！？ いきなり何をしていますかー、貴方はっ！」

「いや、コンプレックスで拗ねている感じの後輩を褒めてやっただけだぜ？」

「そーいうことではなくてですね・・・・・・・・あもう、陽平さんはなんでこう少女漫画チックな行動ができるのですかねー？」

よくわからないが、このまま明美がフリーズしているのも面倒なので額をぺちぺち叩いて正気に戻す。

「・・・・・・・・・・いきなりなにしゃがる、この変態」

「せつかく褒めてやったってーのに、いきなりそれかよ」

石化から解放された明美は、なぜかさつきよりも俺に対して負の

オーラを放出してきた。

「可愛いだなんて嘘を吐くな。そんなこと、自分の親にだって言われて時は無い」

「でも、親友には言われたときあるんじゃないの？」

明美の視線に、怒りの感情が混じる。

「分かるだろ？　ちーちゃんは優しいから私に気を遣ってくれてるんだ。そんな事も分からないほど私はバカじゃない」

「あ？」

おいおい、ちょっと待てよ。

てめえ、そこまで卑屈だと俺もさすがに苛立つぞ、こら。

俺はともなく、てめえの親友が言ったことも信じられないのか、こいつは。

「あーあ、はいはい。わかったよ、わかりましたよ！　お前の言う通り、お前は可愛い感じの女の子じゃねーよ！」

「ほら、やっぱりそうだ。陽平先輩のくせに、私に気を遣いやがって」

自分で自分を貶めてほつと安堵している後輩に向かって、俺は不敵に笑って言うてやる。

「お前はどつちかと言うと綺麗な感じの女の子だよ」

「なっ」

ぼふう、という効果音が聞こえそうなほど勢いで、明美の顔が赤く染まった。

わなわなと口を動かして、何か言おうとするが、そうはさせねえ！

「灯、髪留めだっ！」

「サー、イエッサー！」

灯は素早く俺に髪留めを手渡し手渡してくる。

うん、自分から言っというてなんだが、灯、お前ノリいいなあ。

「ちよ、ちよっと、なにするんだよ、陽平！」

俺が素早く前髪を留めると、顔をさらに赤くして明美が抗議の声を上げた。

つーか、ついに呼び捨てにしゃがったな、こいつ。

まあ、それは置いて、だ。

「よく聞きやがれ、この根暗後輩。俺はな、今のお前は素直に綺麗だと思ってるからそう言っただけだ。別にお前に気を遣っているわけじゃねーよ。というかさ、お前、俺がわざわざお前に気を遣うと思ってるのか？」

「う、それは確かに」

俺と明美は傷口を舐めあわず、むしろ塩を塗りつけるような友達関係だ。

明美が落ち込めば俺が貶し、俺が落ち込んでいれば明美が晒す。我がならひどい友情だと思うが、そこには一種の信頼性があることだけは確かなのだ。

「それにな、明美。お前も分かってるだろ？ お前の親友は嘘がめちやくちや下手だ。それはもう、幼稚園児にだって見破られるだろう。そんな奴がな、お前を気遣って思っても無いことを言うと思ってるのかよ」

「・・・・・・うう」

明美は言い返せない。

言い返せるわけが無い。

俺の言葉を否定するということは即ち、自分の親友を否定することに繋がるのだから。

「別にな、明美。俺はお前がナルシストになれて言ってるわけじゃねーんだよ。けどな、てめえの親友の言葉ぐらい、素直に受け取れるぐらい卑屈を直せ。さもなければ」

俺は精一杯の笑顔で明美に宣告する。

「お前の親友に『第一回、桐生明美ちゃんのファッションショー』を提案して、今流行のブランドからメイド服まで資源を提供してやるぞ」

「あんたは鬼かつ！？」

その光景を想像したのだろう、明美は軽く涙目になりがなら叫ん

だ。

明美が親友を大事に思っているように、その親友も明美のことを大切に思っている。というか、軽く引くほど溺愛している。

仮に俺がそんなことをしたならば、ほぼ確実にファッションショ―は開催されてしまうだろう。

「ま、とりあえずはその格好で今日一日過ごしてみるんだな、後輩」

「ううー」

恨みがましく俺を睨む明美。

はははは、いくらでも俺を恨むがいい、その表情が見られるのならいくらでも恨まれてやろう。

俺は嫌がらせのように明美の頭を撫でてやった。

くくく、悔しかろう、完敗した相手に慰められる屈辱を知れ！

「・・・うー」

頭を撫でられると、ぷるぷると顔を赤くして明美は体を震わせている。

あれ？

ちよつとやりすぎたか？ 泣かないよな、うん、さすがに泣かないよなー、後輩。

「陽平さん、本当に貴方って人は罪作りですねー」

灯がジト目で俺を見ってくる。

「ち、違うんだ、灯！ 軽く苛めてやろうと思ったけど、別に泣かそうとまでは思ってたねえよ！」

「そうじゃなくてですねー、はあ、そう言うところがなおさら鈍亀といえますかー」

「ちよつ、何、諦め半分のため息を吐いているんだごふっ！？」

俺が灯に弁解をしていると、腹部に衝撃が来た。

どうやら明美の奴が物理的に反撃してきたらしい。

「なにするんだ、後輩」

「それはこっちの台詞だ、陽平先輩。私の親友だけじゃ飽き足ら

ず、私にもフラグを立てるつもりかよ」

息を荒くして明美が睨んでくる。

いや、意味わかんねえよ。

「仕方ないですよー、明美さん。この人は根っからの旗立て職人ですからー」

「それはわかってるけど、やつぱりむかつく」

「おーい、てめえら。言ってる意味はわかんねえけど、絶対バカにしてんだろ？」

俺の言葉に、灯と明美は揃ってため息を吐いた。

む、むかつくなあ、おい。

「はあ、とりあえず陽平先輩が言いたいことはわかった。灯先輩とはそれなりに話も合いそうだから、まあ、挨拶ぐらいはするよ。それと、陽平先輩がどうしてもって言うから、仕方なくこの髪留めはしばらく付けといてあげる」

ふん、となぜか無駄に偉そうに言う後輩。

何か言い返そうと思ったが、そこは先輩としての心の広さで我慢した。

「後、陽平先輩。ちょっと頼まれてほしいんだけど？」

「ああ？ お前が俺に頼みごとだと」

珍しいな、俺に借りを絶対作りたくない明美がそんなことを言い出すなんて。

「私の親友にこの漫画を返しといて欲しいんだ」

「漫画を返すぐらい自分でや」

明美から差し出されたのは、正確には単行本ではなくて、小冊子のようなもので、いわゆる同人誌という奴だった。

しかもこれは幻の名作と名高い『空に国境は無い』じゃないか！もう絶版になっていて入手はこんななはずなのに、なぜ！？

「私の親友がさ、それ書いた人と親戚らしいんだとき。それ聞いたときは私も驚いてね」

「あ、あのう、明美サン？ これは君の親友に頼めば、ひよっと

して借りられたりするのデスか？」

「悔しいけど、あんたの頼みをちーちゃんが断るわけないだろ」
ひゃっはー！

「任せとけ！ コンマ1秒でも早くこれを返してやるぜ！ そして借りるんだっ！！」

俺は教室から廊下へ素早く移動し、全力疾走で漫画を返しに走った。

「はやっ！ ちょっと待ってくださいよー、陽平さーん」

俺を呼び止める灯の声が聞こえたが、もちろん待つわけが無かった。

文化部の後輩と先輩（前書き）

この話は視点が陽平ではなく、彼の後輩に移されます。
後輩といっても、毒を吐かない方ですけれど。

文化部の後輩と先輩

絵を描くことは好きですか？

私、上田^{うえだ} 千穂^{ちほ}はもちろん大好きです。

漫画やイラストはもちろん、油絵や風景画みたいなものまで、とにかく、何かを描いていれば私は物凄く幸せなわけなのです。

子供の頃からずっと絵ばかり描いたので、当然の如く、社交性は皆無なのですが、そこはほら、類は友を呼ぶという奴で、こんな私にも一人の親友と数人の同類がいます。

そんな小規模な仲間たちと一緒に、ほのぼの地味に過ごすのが私の高校生活。

華が無いと言われるかもですが、これはこれで幸せです。

……実はちよつと気になっている先輩もいるのですが、いまいち勇気が出せなくてなかなか声をかけられないという状況なのです。

漫画みたいに都合よくイベントとかが発生して、私と先輩の距離が縮まつたりしないかなあと妄想する日々。

でも、昔の人は言いました。

『事実は小説よりも奇なり』と。

その言葉の通り、私にも今、高校生らしいイベントが発生しているわけなのですっ！

「ねえ、上田さん。あなたがなんで私たちに呼ばれたのか、大体想像はついているわよね？」

期待していたのとは逆ベクトルな感じで。

「い、いえいえいえ、私は何も悪いことしてませんし、特にあなたたちとは関わり無い生活を送っていたと自負しているんですけど
お」

「はあ？ なに、ぶりっ子してんの、こいつ」

「っーか、私たちだって別にあんたと関わりなんか持ちたくない

つつーの！」

「オタ臭が移っちゃうから、ほんとだったら声もかけたくないんですけどー」

ぎやははは、と男子高校生が見たら女子高生という存在に絶望しそうなほど下品な笑いが私を囲んでいる。

はい、いきなり廊下で囲まれて、無理やり人気の無い校舎裏まで連れてかれているところでもう気付いていましたが、現在私、イジメっぽいことをされようとしている状況なのです。

というか、普通にイジメなのです。

「あ、あのお、私に用が無いならもう帰りたいのですが」

「あー？ 用が無いのに呼ぶわけないっしょ」

「つーか、マジ口開かないで、臭いから」

失礼な。

無駄に香水がきつい人たちには言われたくないのです。

私を取り囲んでいるのは、どうやら私より1つ上の、上級生の女子グループのようでした。

その人たちの髪は明らかに校則違反な色をしていて、化粧も、学校に来るだけなのに気合が入りすぎていて若干引くほど。

駅で見かけたらまず、目を逸らしてやり過ごすタイプの人たちのようです。

一人の除いて。

「あなたたち、うるさいわよ？」

その叱咤で、今まで珍獣のような声を出していた人たちがぴたりと口を閉じます。

例えるならその様子は、飼い主に怒られた犬にも似ていると思いました。

叱咤をした人、恐らくはこのグループのリーダーは、他の女子たちとはまるで毛並みが違い、一言で表すなら清楚なお嬢様といった風貌を。

滑らかな黒髪に、涼やかな微笑をたたえて、制服もきちんと着こ

なしているようです。

けれど、それがどこか『作り物』じみている感じがしました。あまり良い例ではないのですが、A Vやイメクラとか、そういうものに出てくるような、作り物じみた違和感を覚えるのです。

「ごめんなさいね、しつけが行き届いていなくて」

につこりと黒髪のリーダーは私に微笑みかけました。

その笑みがあまりにも白々しくて、軽く吐き気を覚えます。

「こんな人数で囲んでから言うのもなんだけど、私たちは別にあなたを苛めるために呼んだんじゃないのよ？」

嘔吐け、と思いますが、私はチキンなので口に出さずに黙っています。

「私たちはね、ちょっとあなたに頼みごとしたいのよ」

「た、頼みごとなのですか？ お金だったら持っていないのですよ！」

「ふふふ、安心して。別にわざわざ貧乏そうなあなたから金を巻き上げるほど困っていないから」

黒髪のリーダーが私を嘲笑うと、それに続いて取り巻きも私を嘲笑い出します。

うわあ、いやなチームワーク。

「私たちの頼みごとはね、実に簡単よ。あなた、幼馴染が何か知らないけど、剣君の周りをうるつかないでくれにかしら？」

黒髪のリーダーが嫌味ったらしく言った言葉で、やっと私はこの状況に合点がきました。

剣君、というのは容姿端麗、頭脳明晰、女の子にはモテモテで男子からは殺意を抱かれているというハーレム体質の破竜院剣のことを言っているのです。

なんの因果か、そんな主人公体質の彼と私は幼馴染。

つまり、必然的に私は嫉妬の対象となってしまうらしいのです。

「剣君は優しいから言ってないけどね、あなたの行動に迷惑しているのよ？ あなたみたいな美しくない人と一緒に行動されると、

こっちの品位が落ちるってね」

どうやらこの黒髪のリーダーは、私と剣君と一緒にいるところを見て、嫉妬心をむき出しにしまったと。

なんというか、この手の人たちに絡まれることは度々あったのですが、この手の人たちは本当に行動が似通っているというか、ワンパターンというか。

「はあ」

「何をため息なんかついているの？」

あ、やばい、睨めました。

あまりにもうんざりすぎて、ついいため息を吐いてしまったのはうつかりなのです。

「大体、あなたと剣君は釣り合わないわ。いいえ、貴方みたいな人が剣君と会話すること自体が、彼の存在を貶めているのよ」

何かに憑かれたように語り出す黒髪のリーダー！

というか、剣君を美化しすぎなのですよ、この人は。

だって、私と剣君の会話内容はほとんどエロゲーとかエロ本とかそついった下ネタばかりなのですから。

みんな知らないようなのですが、剣君はあの外見からは想像もつかないほどのエロスを秘めた男なのです。

「はっ」

「何を鼻で笑っているのかしら？」

「ひい、ごめんなさい！」

即、私は謝りました。

だってほら、黒髪のリーダーの人が、どこからか小さなナイフを取り出していましたもん。

やばい、なんてバカな人だろうと思っていたら、物凄くバカな人だったみたいなのです。

リーダーがナイフを取り出すと、周りの取り巻きもナイフやスタンガン、携帯なども取り出しています。

「ねえ、上田千穂さん、貴方をお願いよ。もう二度と剣君に近寄

らないで、気安く名前も呼ばないで」

「あのー、なにか勘違いしているようですが、私と彼はただの幼馴染なのです。だから、そういった恋愛関係には絶対ならないと思うのですが？」

「泥棒猫はいつだってそう言うわ」

泥棒猫って。

剣君からあなたの話とか、全然聞いたときないのですが。

私がうんざりした表情をしていると、黒髪のリーダーは、ナイフを私の顔に近づけてきました。

「だからね、万が一、いえ、百億分の一の可能性でも剣君があなたに惑わされないように、あなたが根っからのビッチだっていう写真を撮ってあげるのよ」

暗く、そして気持ち悪い声で黒髪のリーダーは私に語りかけてきます。

周りの取り巻きも、にやにやといやらしい視線を向けてきました。ああ、私はどうやら凄くピンチのようなのですよ。

「悲鳴をあげてもいいけど、おすすめしないわ。だってほら、あなたが悲鳴をあげなければ、被害はあなた一人で済むじゃない？」

あなたの家族なんかにはまでは被害は及ばないようになるわよ・・・・・・ところで、話は変わるけど、あなたの家に最近、動物の死骸が無かった？ 下駄箱でも良いわよ？ 後、脅迫状とか」

家族に被害は及ばない？

動物の死骸？

脅迫状？

なんのことでしょうか？

あ、でも最近、変な男が通学路でよく待ち伏せしたり、後を付けてきたりしたような？

「あら、まだだったの。まったく、せっかく雇ってあげたのに、仕事が遅いわね」

「雇った？」

私が聞き返すと、黒髪のリーダーは侮蔑の笑みをもって答えました。

「そうよ。あなたみたいな田舎者は知らないでしょうけどね、都心の方には、そう言うことを請け負うような仕事をする人間もいるのよ？　つまり、あなたや、あなたの家族を貶めることぐらい、私には簡単なの」

その言葉に、私は恐怖よりも気持ち悪さを覚えます。

自分の手を汚さず、他人を貶めようとするのを、なんでこうも自慢げに語れるのか？　その神経が私にはとても気持ち悪いものだと思います。

「さあ、もうおしゃべりは終わりよ。じゃ、千穂さん、選びなさい。自分から服を脱ぐか、それともナイフで切り裂かれ」

「とりゃあ」

ぱあん、と乾いた音が1つ。

「え？」

黒髪のリーダーは頬を押さえて、信じられないといった顔で私を見ました。

それもそうだと思うのですよ。

だって、今までか弱い獲物だと思っていた私にビンタを喰らったのですから。

「てめえっ」

取り巻きが声を上げて私を取り押さえようとします。

しかし私は、素早くナイフやスタンガンを持った手を蹴り飛ばし、至近距離まで近づいてきた女子には引つかきをお見舞いしました。怒りよりも、驚きの表情で女子グループの皆さんは私を見ます。いやね、さすがにあれなのですよ。

長年、モテモテの主人公体質の幼馴染をやっていると、どうしてもこういった荒事に対して強くなってしまうのです。

後單純に、私、インドア派ですけど喧嘩は強いのです。

「あなた……」

黒髪のリーダーが放心から復活し、私に憎悪が籠った視線を送ってきました。

それにあわせて取り巻きの人たちの目にも怒りが宿ります。ふう、正直に言えば困ったのです。

相手は五人でこちらは一人、数の上で圧倒的に不利ですし、これはかなり苦戦しそうですねです。

ああ、今日は明美ちゃんと遊ぼうと思っていたのに、ちょっと外出できない怪我を負ってしまいそう。

私がそう思ったその時でした。

「おいおい、イジメはかつこ悪いぜ、諸君」

まるで漫画のようなタイミングで、その人は現れました。

長身で細身ながらも無駄が無い筋肉のついた、狩りに適した肉食獣のような体つき。癖の強い、灰色の髪。口元にはむき出しの犬歯が。

まるで『獣』という存在を体現したようなその人　木島陽平先輩は、獲物を食い殺すような目つきで女子グループを睨みつける。

ひい、と取り巻きの人たちは恐怖の声を漏らしました。

そして威嚇が終わると、一転、陽平先輩は不敵な笑顔で私に言います。

「よう、後輩。漫画を返して借りに来たぜ」

こうして陽平先輩は、私の憧れの先輩は、同人誌片手に、まるでヒーローみたいに私の目の前に現れました。

初めて陽平先輩と出会ったのは、中学一年生の時でした。

当時の私は、この中学校に美術部というものが存在していないことを知り、早々に自分の中学校生活に見切りを付けようとしていたのです。

「よ、君も絵を描くのが好きなのか？」

昼休みや放課後に、私はよくスケッチブック片手に誰にも見つからないような場所でスケッチをしたり、適当にイラストを描いたりしました。

さすがに教室の中で描くのは恥ずかしくて、こそこそと傷心を癒していたとき、陽平先輩が私に声をかけてくれたのです。

自分も絵を描くのが好きだから、とりあえず同好会を作ってみないかと誘ってくれたのでした。

もちろん、私に断る理由は無かったです。

「なあ、千穂ちゃん。僕は多分、絵の才能って奴が本当に無いんだと思うんだよ。別に努力が報われないとか、そういうことを嘆いているんじゃないくてね。ただこう、事実としてそういう風になっている気がする。ま、僕も将来は絵描きになるわけじゃないし、それでも言いと思っているんだ」

けどさ、と柔らかな黒髪を揺らして陽平先輩は言葉を繋ぎます。

「君には才能がある。中途半端な僕なんかとは違う、紛れも無い確かなものが。だからね、千穂ちゃん。本当に君が絵描きで食べて生きたいと思っているなら、疑っちゃダメだよ、自分の才能を」

進路や自分の将来といった不安定なものに右往左往していたときに、陽平先輩が優しくそう私に語ってくれたのを今でも覚えているのですよ。

あの頃の陽平先輩は本当に優しくて、儚げで、ふわふわと掴んだら消えてしまいそうな雲のような人でした　　いや、本当ですってば。

「おーおー、お前らは確かよく都心に遊びに行く不良グループじゃねーか。あれだぜ、最近は素行が悪いつてんで、先生方の間では結構有名らしいぞ、お前ら」

けらけらと野獣の笑みで女子グループを追い詰めている今を見ると、とてもじゃないですけど、同一人物と判断し辛いのですが。

陽平先輩はとある事情で、中学三年の後期から通学して来なくな

つてしまい、私ともそれつきり合わなくなっていたのです。

そして、偶然、この高校で陽平先輩と再会した時にはもう既にこんな感じになっていましたとき。

なんか凄く体が鍛えられていましたし、髪とか灰色に脱色してましたし、正直、中学時代の先輩を知る人はまず別人だと思いますよ？ま、私は一目で見抜いたわけなのですが。

「っーかよお、お前らさぁ……俺の可愛い後輩に何してんだよ？」

殺意。

普通に日常生活を送ってれば、まず出会うことが無い明確な殺意が女子グループの人たちを射抜きました。

「あ、あ……」

「ひいっ」

女子グループは一人を除いて、恐怖で腰を抜かして、地面にへたり込みます。

それは当然のことでしょう。

今の陽平先輩を例えるなら、まさしく肉食獣という単語が思い浮かびます。所詮、思春期に振り回されて不良ぶっている人たちが、いえ、この迫力なら陽平先輩の近くにいただけで、大の大人が土下座しますよ。

ちなみに私は、陽平先輩が放った殺意よりも、陽平先輩が言った『可愛い後輩』という単語に反応してうつとりしていたので問題無しです。

「何をしていた？ おかしなことを言いますね、陽平さん。私たちは別に貴方の後輩に何もしていませんよ？」

そして、女子グループの中で、黒髪のリーダーさんだけがまともに陽平先輩の殺意を受けて、立っていました。

もつとも、足がふるふる震えていて、どうみてもやせ我慢です。

恐らく、恐怖よりも自分のプライドの方を優先したんでしょうが、その選択は間違いなのです。

「ああ？ てめえ、何が言いてーんだよ？」

「私たちは偶然、貴方の後輩とここではったり会って、少し『お話』ただけです。そうでしょ、上田千穂さん？」

黒髪のリーダーが、気持ち悪い愛想笑いを私に向けました。

明らかに言葉の裏で、『もしもチクつたらひどい目あわせるぞ』と脅しをかけているのが丸分かりな感じです。

「千穂ちゃん、こいつの言っていることは本当か？」

もはや分かりきっていることですが、一応陽平先輩が私に確認を取りました。

これは『本当に苛められてなかったのか？』と尋ねているのではなく、『この問題に俺が首を突っ込んでいいのか？』と問いかけてくれているのです。

確かに、こんなことは剣君の幼馴染だったので日常茶飯事ですし、この程度の相手で陽平先輩の手を煩わせてしまうのもどうかも思いますが、けどさくつとチクリします。

「こ、怖かったです、陽平先輩！ この人たちにいきなり呼び出されて、囲まれて、ナイフとかスタンガンで脅されて……」

私は弱々しくそう呟いて、陽平先輩の腕に抱きつかしました。

黒髪のリーダーさんが苦々しくこちらを睨んでいますけど、当然スルーなのです。

いやだってほら、せっかく陽平先輩に甘えられるチャンスなんですし。

というか、陽平先輩なんか凄くいい匂いがするのですよう、はあはあ。

「言いたいことは分かったら、まず匂いを嗅ぐのをやめような。」

後、ちよつと俺はこれからこのクズどもに用事があるから、これ持って離れてる」

私に同人誌を手渡し、陽平先輩は私を引き剥がしました。

「了解なのです」

名残惜しかったのですが、私は素直に陽平先輩に従います。

「さあてと、これで言い逃れは出来なくなつたな、クズども？」
本物の野獣のように殺意を込めた視線を向けながら、陽平先輩は
笑みを浮かべます。

もちろん、完全な獣の笑みを。

「お、女の子に暴力を振るうのかしら？」

黒髪のリーダーは引きつった顔で、そう一般論を盾にしますが、
「クズは人間にカウントしねえんだよ」

容赦なく、陽平先輩はそれを両断しました。

「私に手を出したら、私のお父様が黙っていませんよ？ 私のお
父様は政界にも顔が通じているから、貴方一人程度、社会的に抹殺
するのなんか簡単ですよ！」

「そうか、よかったな」

陽平先輩は獣の笑みを浮かべながら、黒髪のリーダーへ歩み寄り
ます。

「後で貴方の大切な人や、家族がどうなつてもいいんですか！？」

「心配するな、お前に『後で』なんてねえから」

一步一步、陽平先輩が歩みを進めるたびに、黒髪のリーダーが顔
を恐怖に歪めていきます。

黒髪のリーダーが何かをわめき立てますが、陽平先輩はそれらを
全て容赦無く切り捨て、手を伸ばせば届く距離まで歩み寄ると、そ
こで立ち止まりました。

「で、他に何か言うことはあるか？」

「あつ、ああ、あああつ」

もはや黒髪のリーダーには恐怖という感情しか無いようでした。
周りの取り巻きはリーダーを助けることなく、むしろ下手に動い
て標的を帰られないかと戦々恐々しているという友情。

「んじゃ、もういいよな」

仲間にも見捨てられた黒髪のリーダーへ、陽平先輩は死刑宣告を
言い渡します。

ゆらりと、上げられた右腕はまるで獣の牙。

黒髪のリーダーは、涙や鼻水を流して首を振りますが、もう遅いのです。

獣の顎はもう、開かれました。

「壊れる」

短い言葉と共に、右腕が獲物目掛けて振るわれました。

右腕はぱあん、という小気味いい音を奏で、獲物の顔面　のすぐ隣の空間を破砕しました。

破砕された空気は衝撃はとなって、すぐ隣の黒髪を揺らします。

「う、うあう……」

黒髪のリーダーは、涙や鼻水や色々な液体を流しながら震え、そのまま膝を着きました。

その顔からはもはや、数分前まで持ち合わせていた彼女のプライドと言うものがまるで感じられなかったのです。

多分、理解してしまったのでしょう。

もしも、あの右手が本当に自分の顔面に振るわれていたら、冗談じゃなく、死んでしまっていたのだと。

陽平先輩は言葉どおり、彼女のプライドが修復不可能に壊れたのを確認すると、満足げ

に頷いて、取り巻きたちに視線を移しました。

「で、次は誰だ？」

もはや恐怖で声を発する事もままならず、取り巻きの人たちは、よろよると腰が抜けた状態で逃げて行きます。

あーあ、自分たちのリーダーを見捨てていくなんて失礼な人なのですよ。

「はあーあ。あいつらの処分は猫子と一緒に考えるとして、相変わらずのトラブルメーカーだな、千穂ちゃん」

さっきまでの獣染みた笑みはすっかり消え去り、陽平先輩は気さくな笑顔を私に向けてきます。

「私は剣君の事情に巻き込まれているだけなのですよ。それと、陽平先輩は相変わらず容赦無いのですね」

私がそう言うのと、陽平先輩は苦々しく笑いました。

「これでも抑えた方なんだがな、こいつらみたいな奴を見かけると、どーも昔の血が騒ぐみたいだ」

呆然と座り込んでいる黒髪のリーダーを指差し、自己嫌悪のため息を漏らす陽平先輩。

さっきの様子だけ見ると、陽平先輩は容赦無くて怖い先輩のように思われるかもしれないのですが、実際は根っからの平和主義者なのです。

脅し文句で『クズは人間にカウントしねえ』とか言っていました、実際には黒髪のリーダーや、その取り巻きには指一本触れずに対処しましたし。

もっとも、彼女たちの心には本物の恐怖と言う奴が埋め込まれましたけど。

「とりあえずだ、ちよつと話があるから場所を変えないか？」

「話ですか？ この同人誌だったら貸してあげてもいいですよ」

「それは超嬉しいが、それ以外の話もあるからな」

め、珍しいのです、陽平先輩が漫画や絵関係の話を私にしてくれるのは。

ひよつとしてこれは千載一遇のチャンスという奴なのでしょうか？

私は勇気を振り絞って恐る恐る陽平先輩に尋ねます。

「あ、あのっ、もうすぐ昼休みも終わってしまいますし、良かったらその話は放課後に、その、一緒に帰りながら話しませんかっ？」

「ん？ ああ、そうだな。そっちの方が色々都合がいい」

陽平先輩はさらっとオッケーしてくれましたが、私にとっては思わずガッツポーズをとりたくなるほどの出来事でした。

だって、一緒に帰りながら会話をするとか、陽平先輩と出来るのは中学生以来でしたから、正直、このまま地面を転がりまわりたい気分です。

「約束ですよ、陽平先輩！ 今日の放課後、一緒に帰りましょうねっ！」

そして放課後。

「よう、待たせたな。先に紹介しておく、この小動物みたいな奴が、まあ、この度俺のクラスに転校してきて、とある事情で俺の家に居候している聖名灯だ。んで、こっちが俺の可愛い後輩の上田千穂ちゃん。中学生の頃は一緒に美術部とかやってた」

「そうなんですかー、話に聞いていたとおり、可愛い人ですねー。これからよろしくお願いします」

「は、はあ、こちらこそなのです」

例えるなら子犬のような可愛らしさを備えた、正真正銘の美少女が目の前にいました。

しかも、陽平先輩と一つ屋根の下で暮らしているらしいのですよ。……さすが陽平先輩、想像の斜め上の行動をしてくるのです。

「どうした、千穂ちゃん？ そんなトンビに油揚げを横から掻っ攫われた狐みたいな表情をして」

「いえ、いいのです。思えば陽平先輩は昔からこんな感じだったのです」

私がつくりと肩を落としていると、その肩を灯先輩が優しく叩いて、私に微笑みかけてくれます。

「その気持ち、よくわかりますよー」

その儂げな笑顔を見ただけで、私と灯先輩は既に通じ合っていました。

そーなのですね、陽平先輩は自分で立てた旗を自分で叩き折るような人なのです、しかも無自覚で。

私も今までで、何度も天然たらしからのフラグクラッシュの急降下を味わって来たのです、恐らく灯先輩も同じなのでしょう。

つまりは、強敵ってことなのです。

「負けないですよ」

「ふふ、望むところですよー」

私と灯先輩はお互いに宣戦布告しました。

出会って数分も経っていませんが、もはや私たちは目と目で会話が出来るほどの宿敵（友達）になったのです！

「よくわかんねーけど、帰りにスーパー寄っていいか？ 今日豆腐と納豆が特売だったんだ」

もつとも、一番自覚すべき人は完全スルーだったのですけど。

それはともあれ、私たちは雑談をしながら陽平先輩の買い物に付き合い、帰り道近くの公園で休憩をしました。

そして、三人揃ってベンチに座ったところで、やっと陽平先輩が話を切り出してきました。

「こういう話は、出来れば俺と千穂ちゃんだけの二人だけの方がいいかもしれねえんだけどさ、ある意味で、灯も関係者になるかもしれないから話を聞いてもらいたいんだが、いいか？」

言葉の文面だけをとれば、恋愛関係のお話ですかっ！？ と私が小躍りしてしまうものだったんですけど、口調があまりにも重々しかったので、私は黙って頷きます。

「……………なあ、千穂ちゃん。こういうプライベートなことを詮索するのは正直趣味じゃないんだが、一応俺も友達の一人として聞かせてもらっぜ」

陽平先輩は、黒い瞳で私を見つめながら尋ねました。

「明美に一体何があったんだよ？」

その質問はあまりにも核心を突きすぎていて、ちょっと呆然としてしまいました。私はすぐに我を取り戻します。

あまりにも的確に質問してくるので、少し驚いてしまいましたが、私は薄々、陽平先輩なら気付くと予想していたのですから。

「やつぱり、わかりますか」

「わからねえわけが無いだろうが。あんなもん、一目瞭然だ」

灯先輩は何がなんだかよくわからない、という顔をしています。

陽平先輩は、灯先輩にも事情が分かるように、そして自分自身でも確認するように言いました。

「いつもの毒舌のキレがねえ」

「ええっ!？」

灯先輩が驚きの声を上げました。

「いやだって、初対面の私に対しても結構容赦なかったですよー？」

「甘いな、灯。本来のあいつだったら、お前はしばらく立ち直れないほどの精神ダメージを負ってしまっていたぜ」

「そこまでですかっ!？」

その通りだと私も思います。

かつて私も、あーちゃんがツンツンしていた時期にはよく心を折られていたのですよ。

「ていうかだな、俺があいつと毒舌や口論を交わして勝てる方がおかしいんだよ。いつもはこっちが引くほど千穂ちゃんとの仲の良さを語ってくるくせに、今日はなぜかやけに卑屈だったし、何より心が弱っていた」

あーちゃんが陽平先輩に、口論で負けたという事実は、私に少なからず衝撃を与えました。

まさか、そこまであーちゃんが弱っているだなんて思っていなかったのです。

「話せよ、千穂ちゃん。事と次第によっちゃ、千穂ちゃんが思っているよりも最悪の事態になっているかもしれないねえんだ」

「陽平さん、それはもしかして……」

灯先輩の問いかけに、陽平先輩は無言で頷きました。

そのやり取りの意味はよく分かりませんでしたけど、どうやら、私が思っているよりも自体が悪化しているのだけは確かなようです。

「分かりました」

どの道、陽平先輩には相談しようと思っていました。

できれば今日の昼休みにでも相談しに行きたかったのですが、不幸な呼び出しのせいで遅れてしまい……。でも巡り巡って肝心な所では助けに来てくれるのが陽平先輩のようです。

結果としては、私が変な遠慮や、勇気が足りないせいであーちゃんのことを話すタイミングを逃がすことを防いだ形になったのですよ。

「信頼する陽平先輩になら、そして陽平先輩が信用している灯先輩なら、あーちゃんのことを頼めるかもしれません」

私は、昨日あったとある出来事について語り始めました。

文化部の後輩と先輩（後書き）

今回は陽平ってこんな感じー、ということ彼の描写を試してみました。

次から視点は戻ります。

仮想殺人

千穂ちゃんの話をざっくり纏めるところだった。

昨日、千穂ちゃんは風邪をひいた明美の見舞いに行ったらしいのだが、既に明美は完治していた。しかし、このまま帰るのもつまらないということで二人仲良くショッピングに行ったらしい。

しかし、そこで異変が起きた。

「実は私、ずっと前から三十台ぐらいの男の人にストーカーされていたんですけど、まあ、大体いつものことかなあって放って置いていたのがあーちゃんにばれてしまったのです」

千穂ちゃんは破竜院剣という、ある種学校のアイドルみたいな奴の幼馴染なせいで、割とストーカー被害や、妬みや恨みなんていうものと身近にあったりする。

前にそれがひどくなった時期があり、俺と当人である剣が協力して大分沈静化させていたのだが、今回はあの女子グループのリーダーがそういう仕事を生業とする奴を雇っていたらしい。

嫌な話だが、都心にはそういう人間の『負』の面を請け負う人間がたくさんいる。そして、その男もその中の一人だったのだろう。

「凄く説教されて、物凄く怒られてしまったのです」

「当たり前だ、つーか、俺も怒るぜ、それ」

俺はにつこりと微笑みながら千穂ちゃんの頭を掴む。

「前にも言っただろうが、そういうことはどんなに些細な事でも、俺や周りに相談して解決しろってよお、ああん？」

ぎりぎりと言力のように指に力を込めた。

千穂ちゃんが「いたたたたつ、でもこの痛みがいいですよっ！」とかほざいているが無視。

「迷惑かかるとかそんなことを考えてるんじゃないよ。俺たちは友達で、明美とお前は親友だろ？ なら、遠慮された側は逆に傷つくぜ。そんなに俺たちはあてにならないのか？ ってな」

「うつ、それは……」

「だからな、千穂ちゃん。本当に本当に、もう自分ひとりで問題を抱えようとするのはやめてくれよな」

千穂ちゃんは俺の言葉に頷き、苦笑する。

「あははっ、そういえばこんな感じにあーちゃんにも怒られたのですよ」

「ほほう、こんなところでシンクロするとは、意外に明美さんと陽平さんって気が合うんですねー」

灯がぞつとするようなことをほざくが、とりあえずは流しておこう。

今はそれより大事な事がある。

「千穂ちゃん。それで、怒った明美は一体どうしたんだ？」

「……大体、陽平先輩が予想している通りだと思うので」

「その男をぶちのめしに行った、か」

あんな外見からは想像できないと思うが、明美はアレでかなり沸点が低い。

自分の親友が見知らぬ男にストーカーされているとなれば、なおさらだ。

「どうせ明美のことだ、ろくに男の特徴も聞かないで走り出したんだろ？」

「はい、あれであーちゃんはかなり健脚で、あっという間に見失ってしまったのですよ。携帯で連絡しても気付いてもらえないし。

仕方ないから、あーちゃんと別れた所、都心のデパート前で待ってたんですけど……そこに、ストーカー男が現れたんです」

千穂ちゃんは目を伏せながら語り始める。

「恐らく、そのストーカー男は直接的には襲わないで、ただ追いかけて回すだけでプレッシャーを与えるタイプだったのですよ。だからまあ、私もそう言うのに慣れていた部分があったので、ささっと巻いてやろうと思ったのですが、そこを、戻ってきたあーちゃんに見つ

かりました」

「それで、ストーカー男にとび蹴りを一発か？」

「いえ、とび蹴りからの回し蹴りのコンボでした」

ああ、あれは俺でもきついからな。当然、ストーカー男とやらはダウンしただろう。

「当然、蹴られたストーカー男は、あーちゃんに対して『何をするんだ！』って感じで怒ったんですけど、そんな怒りとは比較にならないぐらい、あーちゃんがマジキレしていたのですよ」

目を伏せて、自分の無力さを悔いるように千穂ちゃんは明美がやったことを淡々と話していった。

「あーちゃんは、ストーカー男を殴り続けたのです。何も言わずに、ひたすらずっと、自分の拳から血が流れてもまるで気にせず、ストーカー男はあーちゃんの暴力というより、その怒りに当てられていて、動けなくて、このままじゃ、あーちゃんが人を殺しちゃうと思ったのです」

千穂ちゃんがそう思ったのを、俺は大げさだとは思わない。

明美なら、自分の親友を傷つける者を絶対に許さないだろう。

「さすがに私も止めに入ったのですけど、あーちゃんは怒りで周りが見えてなかったみたいで、軽く、なんですけど、私の腕をぱあんって、払っちゃったんです」

例えそれが、自分自身だとしても。

「それだけなのに、あーちゃんは一瞬で素に戻って、そして、まるで世界の終わりみたいな顔をして髪を掻き毟って、叫んで、そうしたら私に抱きついてきて、ずっと『ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい』って言い続けて、まるで、自分が凄く許されないことをしたみたいに謝り続けていたのです。でも私は」

「明らかに過剰な反応だな。だからな、千穂ちゃん。千穂ちゃんが明美の行動に驚いて、しばらく何も言えなかったのは仕方ないと思うぞ」

千穂ちゃんは悲しむように、嬉しいがるように顔をくしゃくしゃ

と歪めた。

「ずるいですよ、陽平先輩」

「ずるくねえ、いいから続きを話せ」

ぶつきらぼうにそう言うと、なぜか隣に居た灯がくすくすと笑う。何がおかしいんだ、この野郎。

「それで、ですね。私が呆然としている間にストーカー男が逃げ出して、それに気付いたあーちゃんが追いかけて、私もそれを追いかけて、でも見失って、それでも頑張って聞き込みとかしながらあーちゃんの後を追ったんですけど、追いついたときにはもう夜で、そこには」

息を飲んで、震える声を抑えながら千穂ちゃんは俺に言う。

「地面に倒れ付すストーカー男と、泣きながら笑っているあーちゃんが居ました。あーちゃんは私の方を向くと、凄く、凄く凄くつ、悲しそうな、泣いちゃいそうな顔をして、走って逃げちゃいました。後を追おうと思ったんですけど、あーちゃんがストーカー男を殺してないか確かめるのが先だと思って、ストーカー男を診たんですけど、幸いなことに、あーちゃんが殴った痕だけで外傷は無かったんです。脈も正常で、どこにも目立った傷は無かったんです」

恐怖を孕んだ声で、千穂ちゃんはその事実を語る。

「それなのに、全然、ぴくりともそいつは動かないんです。頭をぶつけて気絶したなら分かるんですけど、その痕すら見当たりませんでした。私も、それなりに昔から色んな荒事に巻き込まれたから分かるんですけど、ありえないですよ。『まるで人間の中身だけを壊して動かなくしたみたい』に、ストーカー男は動かなくなっていたのです」

千穂ちゃんの話の聞き、俺は灯に目配せをした。

灯はなにやら考えているようだったが、苦々しい笑みを浮かべて頷く。

つまり、ビンゴということか。

「それから救急車を匿名で呼んで、その後から携帯でメールを送

ったり、電話をかけてもまるで返事が無くて。私、私は……

「もういい。お前はよく頑張ったよ、千穂ちゃん」

震える千穂ちゃんの頭に、優しく俺は掌を乗せた。

「泣き出したほど辛いのに、お前はよく今まで繕っていたな、尊敬するぜ。だからほら、今だけはちょっとだけ胸を貸しといてやるよ」

優しく頭を撫でると、千穂ちゃんは瞳を潤ませて、嗚咽を飲み込む。

「すみません、陽平先輩。少し、少しだけなのですよ」

千穂ちゃんは俺の胸に額を当て、しばらくの間、静かに震えていた。

その間、俺はずっと灰色の空を眺めていたから、千穂ちゃんが泣いていたのかどうかは分からない。

けれど、泣いていようが、泣いていまいが、関係ねえ。

「大丈夫だ、千穂ちゃん」

可愛い後輩が親友を心配して、俺を頼ってくれたんだ。

オマケにその親友も俺の友達なわけで、つまり、

「後は、頼りになる先輩に任せとけ」

助けないわけがないだろうが。

世界の危機なんかがかかっていなくても、化け物じみた異能力が明美に感染していたとしても、俺は絶対に後輩たちを助ける。

胸から伝わる体温を感じながら、俺は静かに決意した。

視界が広い。

ただそれだけのことなのに、世界がまるで違うように見えた。

放課後の教室は、私を含めて数人の男女が適当にだべっているだけという、なんということの無い光景なのだが、私はその光景になんとなく安心感を覚えていた。

あの時、まるで世界が変わってしまふような感覚に襲われてから、ずっとずっと一人だけ違う世界に放り出されたような気がしていたから、目の前に広がる、『あいかわらずの当たり前前』に私は安心したんだろう。

「むっ」

私はほぼ無意識に、陽平先輩から無理やり押し付けられた髪留めに触れる。

悔しいけれど、今、私がこうして落ち着いていられるのは陽平先輩と話したおかげだ。

あのバカな先輩とバカみたいに口喧嘩をしたおかげで、ほんの少しだが、胸の中でわだかまっていた何かを吐き出せたような気がする。

もつとも、いくら私がちょっと異常な状態にあったからといって、陽平先輩に言い負かされるという屈辱を味わったことは事実なので、この借りは必ず倍にして返すでしょう。

「ふふっ」

一体、どんな仕返しをしてやろうか？

陽平先輩が慌てふためく顔を思い浮かべると、自然と笑みが浮かんでいた。

「って、これは別にそういう感じのフラグじゃなくて、ただ純粹にあのバカ先輩を苛めるのが楽しみなだけっ」

危ない危ない、陽平先輩は無自覚にフラグを立てる天才だからな、ちゃんと気をつけないと。

親友との三角関係になるなんて御免だ。

というか、むしろ私がちーちゃんとフラグを立てたいってーの。……その前に、色々と仲直りしなきゃだな。

昨日は何かなんだがよく分からない状態がずっと続いたせいで、ちーちゃんからのメールも返してないし、電話も全部保留にしておいていた。正直、嫌われていないか心配だけど、ちーちゃんなら私を嫌うより心配してくれると思う。

ずきりと胸が痛む。

ちーちゃんを傷つけて、拳句に心配までさせている私が、一体どんな顔で会えばいいんだろう？

『いつもの陰気な面で会えばいいんじゃない？』

ふと、脳裏に陽平先輩が無責任にそう言う姿が思い浮かんだ。

うつわ、絶対、陽平先輩なら私に向かってそう言うなあ、と思わず苦笑する。

「そっか」

でもきつとそうだろう。

どんな顔も何も、こんな顔しか私は持っていないんだから、そのままの自分で行くしかないのだ。

もし、それでダメだったら、陽平先輩に責任を持って何とかしてもらおう。

というか、あの先輩なら、私が一生懸命に悩んでいることを一笑に付して、あっさりと解決してくれるような気すらする。

え？ 超能力使えんの、お前？ やったじゃん、すげーじゃん、動画撮ってネットに流そうぜ、とかデリカシーの欠片も無く言いそうだ。

「まったく」

本当にしょうがない先輩だ。

妄想の段階で、ここまで真実味を帯びさせるイメージを持つ人はあの先輩だけだろう。

「じゃあちよつと、後輩らしく、たまには先輩に頼りますか」

そう思い、携帯を取り出したところで、不意にメールの着信音が鳴った。

宛名はまったく知らないアドレス。

迷惑メールと判断し、未開封のまま削除しようと思ったんだけど、そのメールのタイトルを見た瞬間、思わず息を飲んだ。

『ベイベーボマーへ』

「あのゴミクスどもを爆殺しよう」

友達を助けるということ

「やはー、陽平。君の興味を引きそうな情報が入ったんだけど、聞きたい？　って、あれ？　どうしたのさ、そんなに息を荒くして、発情中？」

「はあっはあっ、るせえ、バカ野郎。こちら、ただ今っ、夕日に向かって青春中なんだよ。情報料なら惜しまねーから、さっさと話しやがれ」

『はいはいっと。じゃあ話すけどさ、ついさっきね、君の可愛い後輩をイジメようとしていた女子グループが救急車で運ばれたよ。まだ情報が錯乱していて詳しくはわからないけれど、どうやら、体にひどい火傷と打ち身が出来ていたらしい。それと、校舎の中からすごい爆音が聞こえたって話だから、何か爆発物でも使って襲われたって見方が一番有力かな？　ああ、ついでに言うとな、その直後、君の可愛いもう一人の後輩がふらふらとした足取りで校門を出て行ったのを見かけたよ』

「……猫子、てめえ、どこまで見透かしているんだよ？」

『どこまでも、とでも答えておくよ』

「はっ、相変わらず喰えねえ奴だな。まあいい、情報はありがたく買わせて貰うぜ」

『あいあい。情報料は後でしっかり払ってもらうよん。ちなみに、体で払うのも君限定でオッケーさ』

「安心しろ、しっかり現金払いしてやる」

俺は携帯の通話を切ると、並走している灯へ報告する。

「灯、最悪な知らせだ。明美の奴が第三段階目まで症状が悪化、能力を使用して数人を病院送りにしたっぽい」

「うわあ、それは随分性急ですねー。本来なら、第三段階まで悪化するには最低、一週間はかかるとのレポートだったんですけど、やっぱり実験と実践は違いすぎるというわけですかー」

しかし、と逆接で言葉を繋ぎ、灯は目を細めながら言った。

「なかなか盛大に能力を使ってくれたみたいで、やっと私のレーダーも感知できましたよー」

「つまり、明美の居場所がわかるってことだな!？」

「よく分からないジャミングのせいで多少精度は落ちていますが、彼女、明美さんはどうやら能力を使用しながら移動しているみたいなので、確実に補足可能です」

居場所がわかるという事実が少なからず焦る心を安堵させるが、灯の言葉が、俺に違和感を覚させる。

「能力を使用しながら? おい、それってまさか」

「ウイルスを開発した研究所のデータでは、第二段階から第三段階、さらにその先にまで僅か一日で進むという可能性は限りなく低いとされていますが、不可能というわけではありませんねー」

考えうる限り最悪の結末が脳裏をよぎり、思わず足を止めそうになったが、俺の意地がそれを許さない。

「くそがつ!」

悪態をつき、無理やり心を奮い立たせる。

奥歯を噛み締め、地面を強く蹴り出した。

「急ぐぞ、灯。さつさと明美の場所まで案内しやがれ」

「了解ですよー」

俺たちはさらに速度を速め、明美の下へと疾走する。

私、桐生明美は怪獣だった。

小さい頃、気に入らないことがあったり、怒ったりしたときは、近くにあったものを手当たり次第に周りに投げつけ、周りを全部破壊しつくすまで止まらなかった。

最初の動機がなんにしろ、後半からはほとんど『破壊する』という行為に取り憑かれて、まるで怪獣のように破壊をばら撒いていた記憶がある。

私がそんなのだったから、両親は育児を放棄し、田舎町に住んでいた母方の祖母に預けられることになった。

当然、小さい私は両親から離れたせいで、寂しく、そして悲しくて余計に暴れまわるようになった。

そんな私の『破壊』を、祖母は笑顔で制止し、武力で制圧した。どうやら祖母は何かの武術を納めていた達人らしく、私の子供じみた暴力なんてあっさりと封殺してくれたのだ。

そして、暴力の爆発と武力による制圧を繰り返したことで、私はやっと自制するということを覚えた。

その頃が、私が唯一まとみに私が学校に通えていた時期。

私という暴力が爆発したとしても、祖母が封殺してくれると安心できた、幸せだった日々。

けれども、そんな日々もやがて終わる。

祖母はある日、あっさりと他界した。

詳しい病名は覚えていないけれど、ほとんど末期の状態だったらしいということは覚えている。

そんなボロボロの状態で、祖母はなんでもないように私を抑え続けてくれていたのだ。

私は泣き喚き、手当たり次第に暴れまわった。

気付くと、周りには誰かが倒れていた。

それは、私が学校に通い始めて、初めて出来た友達だった。そこからだった。

私は周りに誰も近寄らせないような生き方を選んだのは。

私みたいな怪獣に近寄ったら、皆を踏み潰してしまうから、誰も私に近寄らないように、言葉に棘を潜ませ、周囲に壁を作り、孤立した。

自分の中にある破壊衝動を押さえ込むために。

そうしたら、大分楽になった。

誰も傷付けなくていいと思ったら、心がとても軽やかになった。始めからこうしておけばよかったんだ。

そうすれば、私も傷つかずに、誰も傷つかずに、幸せな日々を送れる。

全てが丸く収まったんだ。

だから、寂しいとか思うなよ、私。

爆心地。

今、俺が目目の辺りにしている光景を一言で表すのなら、それ以外にしか答えが出ない。

町の外れ、山に近く、半径一キロほどの林がある場所。うつそうと木々が茂っていて、幼い子供が迷い込んだら命の危機を覚えるだろう。

その林が、随分と見晴らしが良くなっていた。

何か強力な爆弾によって焼き払われたように、周囲の木々はなぎ倒され、焼かれ、大地は円形に挟り取られている。

その惨状は、ほぼ林全体にまで及んでいた。

「ああ

」

それを作り出した張本人であろう、俺の後輩、桐生明美は、呆然と爆心地の中で立ち尽くしている。

明美の瞳は虚ろで、感情の色が見えない顔が、灰色の空を仰いでいた。

「陽平さん」

灯に声をかけられて、やっと俺自身も明美の姿に呆然としていたのだ気付いた。

「残念ですが、あれはもう手遅れです。完全に第四段階にまで病状が悪化しています。今の彼女はもはや、異能を撒き散らすだけの化け物になっています」

感情を感じさせぬ声で、機械的に灯が告げる。

「殺すしか、対処法がありません」

ふざけるな。

なんで俺が後輩を、友達を殺さなくちゃいけないーんだ。

そんなの、だたの高校生がすることじゃねーだろ。

「陽平さんもわかってるでしょう。貴方はこういうことに関しては、すばらしく勘が鋭いですから。その感が貴方に告げているはずだ、彼女はもう壊れていると」

うるせえ、そんなこと、わかりたくもない。

そんなものを認めるわけにはいかない。

そう俺の心が叫ぶが、俺自身の根底にある物が紛れもなく明美を見抜き、叫んでいる。

『あの人間はもう壊れてしまっている』と。

色んな人間を『壊して』きた俺だからこそ、わかってしまう。壊れてしまった人間がどういうものなのかを。

「幸い、今なら最小の被害で彼女を仕留められます。だから

」

「黙れよ、悪魔」

灯の言葉を無理やり俺は遮る。

「前にも言ったじゃねーか、俺は誰も殺さない」と

俺の言葉に、灯は悪魔と呼ぶにふさわしく、冷徹な視線を向けてきた。

「理想論はもう結構です。貴方が言っていることは所詮、机上の空論に過ぎないのですよ。実行可能なものでなければ、現実では何も役に立たないのです。いくら貴方が私に向かって吠えようが、現実が変わるわけではないことぐらい、貴方にはわかっていてでしょうが」

「いいや、わかんねーな。俺はまだ何もやってない。わかるか？ まだ、何もやってねーんだよ！何もしてねーのに、無理だつて決めるけるんじゃないやねえ！」

「やる前から分かる事もあります」

俺が吠え、灯が冷徹に否定する。

「暴走状態になった異能力者には、言葉はもはや通じません。そ

の状態で、一体貴方はどうやって彼女を救うというのですか？」

「はっ、それも前回のデータって奴かよ」

このくそつたれな引き起こした研究所が、前回残したデータ。

それは確かに、俺たちにとって重大な情報源だし、俺たちの行動を決定付けるに値するものかも知れないな。

だが、絶対じゃねえ。

「忘れるなよ、灯。もう、この事態こそがデータに無いイレギュラーなんだ。だとしたら、まだやれることはあるだろうが」

少なくとも、友達を殺すだんて最低最悪の方法よりも、数段マシなものがよ。

「……俺が引き戻してみせる」

「無理です」

「決め付けないな」

「決め付けたくもありません。というか、よしんば明美さんと会話が成立したとしても、陽平さんは確実に彼女から攻撃を受けますよ」

「ま、だろうな」

けれど、明美が俺を攻撃するということはつまり、明美が俺を見ているということでもあるんだ。

それで俺の存在を認識してくれるなら、むしろ好都合だぜ。

「陽平さん、あまり彼女の能力を舐めないでください。彼女、明美さんが発症した能力は『ベイビーボマー』。己の感情が爆発させることにより、それに比例した爆発を起こすことが出来る能力です。攻撃性と凶暴性だけを言うならば、恐らく、他の二つの異能力者よりも強力なものなんです。いくら陽平さんだとしても、彼女の能力を受ければ、命の保障はありません」

「バカ言つなよ。人間、生きてる限り命の保障なんてものはありやしない。道端を歩いていたら死ぬときは死ぬんだ」

「貴方の場合、自分から死に行くようなものです」

灯の容赦ない言葉に、俺は思わず苦笑を漏らす。

まったく、普段はふわふわしているくせに、こういうときだけき

ついな。

「死なねーよ、灯。約束してもいい、俺は絶対に死ななねー。なぜならよ」

俺は不敵に微笑んで、灯に言っただけで済んだ。

「まだ借りた同人誌読んでねーんだよ」

灯はぱちくりと目を瞬かせ、やがて深い深いため息を吐く。

「陽平さん、もう止めません。けど、1つだけ聞かせてくれませんか？」

「なんだよ？」

「なんでそこまでして明美さんを助けようとするんですか？ 友達だから？ はっ、そんなのは偽善者が騙る奇麗事でしょう。実際陽平さんと明美さんは親友と呼べるほど親しくありません。広く浅い人間関係だと、自分でも言っていたじゃないですか。そんな浅い友達のために、貴方は命を懸けるんですか？」

「愚問だぜ、灯」

俺は灯の問いを鼻で笑い、答える。

「可愛い後輩に約束しちゃったからな、助けるってよ」

灯はしばらくどうしようもないものを見るような目で俺を見つめると、につこりと微笑みながら言った。

「この偽善者め」

「その通りだが、何か？」

犬歯を剥き出しにして笑い返し、俺は明美に向かって一歩踏み出す。

さて、説教の時間だぜ、後輩。

傷を恐れず進む者（前書き）

誰だって傷つくのは怖いものです。

それはきつと、この物語の主人公も一緒なんだろうね。

傷を恐れず進む者

私と陽平先輩の出会い是最悪だった。

もっとも、最悪だったのは主に私だったけれど。

ちーちゃんと親友になってからしばらく経ったある日、私は陽平先輩を紹介された。

陽平先輩を見ているちーちゃんの瞳は、それはもう輝きまくっていて、一目でこの人に惚れているんだなあと分かった。

だから、妬ましかった。

せつかく出来た自分の居場所が失くなるのが怖かった。

だから私は、いつも他人と接するよりもきつく、それはもうかなりきつく陽平先輩に接した。

何度も自慢の毒舌で心を折ってやりたりもしたのだが、それでも陽平先輩はまったくめげることなく、むしろ私に対する敵対心を燃え上がらせていったのだ。

それから陽平先輩とは、出あう度に喧嘩をして、心底嫌いあつて、それなり和解して、なぜか友達と呼べる関係になった。

あつちはどう思っているかは分からないけど、少なくとも私はそう思っている。

でも、所詮はただの友達だ。

お互いに暇つぶし程度に付き合っているに過ぎない関係なのだ。

助け合うだなんて論外、むしろ傷口を広げあうような関係。

そのはずだったのに……

「なんであんたが、私の目の前に居るんだよ、陽平先輩」

私が撒き散らした破壊の痕に、なぜか陽平先輩が居た。

こんな異常な状況の中だっているのに、陽平先輩はいつも通りの憎たらしい笑みを浮かべている。

「なんで、と言われりやそうだな。調子づいた後輩をシメに來た
って言ったら、信じるか？」
いつもの軽口も健在だ。

正直、こんなわけ分らない状況の中で、見知った顔が居るという
のは多少なりとも安心できるし、嬉しい。

けれど、もはやそんな感情は焼け石に水程度だ。

「早く私の目の前から居なくなれ、陽平先輩。今の私は……………」
おかしいんだ！」

憎悪。

自分の体さえも焼き尽くしてしまいそうな、溶岩のような感情が
胸の中で暴れている。

憎悪の対象であった、あの女子どもを爆殺しても、と言っても、
寸前の所で殺しはしなかったのだが……………とにかく、落ち着
かない。

しかるべき復讐を果たしたというのに、私の中の憎悪を消えること
なく、むしろその勢いを増して燃え続けている。

何かを破壊したい。

この感情の赴くまま、全てを破壊して、破壊して、破壊しつくし
てしまいたい。

「アア」

熱い吐息が喉から漏れた。

頭の中がぐちゃぐちゃになって、よく分からなくなる。

「抑えられないほどの破壊衝動。それがお前の闇だったんだな、
明美。ああ、わかるぜ、明美。何の偶然か分からないが、お前のそ
れと俺の物はよく似ているらしい。はっ、安心したぜ、それならあ
る程度救いようもあるってもんだ」

目の前に居るのは誰だっけ？

わからない。

わからないなら、壊してしまえばいい。

胸の中で狂い踊る黒い炎のような欲望に身を任せろ。

「いいぜ、てめえの暴力ぐらい、受け止めてやるよ」
目の前の存在が何を言っているかわからないまま
私を力
を使った。

ただの高校生で居たかった。

中途半端は嫌だったから、俺はせめて『ただの高校生』として過
ごして居たかった。

そのために相棒の誘いも断って、それなりに普通を装って生きて
いた。

だが、どの道そろそろそれも限界みたいだ。

今思えば、俺はただ逃げていただけだったのかもしれない。

中途半端な自分を認めず、ただの普通になりたくて、自分自身を
偽って生きようとしていた。

みつともなく、現実には背を向けて逃げていたんだよ。

「あああつー！」

叫び声と共に明美の能力が発動する。

明美が叫ぶのとはほぼ同時に、俺の胸の前辺りに衝撃が発生した。
それが爆発だと気付いたのは、爆音が耳に届き、爆風と爆炎にと
って体が吹き飛ばされたときだった。

視界がぐちゃぐちゃに歪み、いつの間にか俺は地面に倒れている。
致命傷、もしくはそれに近いダメージを受けた。

爆心の発生点に近かった胸の部分は、火傷を通り越して炭化して
いるし、あまりの衝撃に、肋骨も折れて、呼吸するたびに激痛が走
る。

だが、この程度ならまだ、俺は大丈夫だ。

「つたく、きついなあ、おい」

苦痛に顔を歪めながら、俺は力無く立ち上がる。

この痛みが俺に現実を思い出させてくれた。

平和ボケしていた脳みそをクリアにしてくれる。

「偽装モードを解除、性能を通常レベルに戻す」

自ら声を発することによって、意識的に脳に性能のシフトを命じた。

体中に力が戻ったのを実感すると、俺は傷ついた部分、胸の炭化、及び肋骨の骨折を修復させる。

皮膚が蠢き、じゅるじゅると音を立てながら傷が修復されていく。炭化した皮膚が剥がれ、下から新しい皮膚が構成される。

折れたはずの肋骨も、もう痛まない。

暴走状態にある明美も、さすがにこれには驚いたのか、化け物を見るような眼で俺を見ていた。

はっ、安心しろよ、明美。

俺は『本物の化け物』って奴を知っているけど、そいつはこんなに生易しくなかったぜ？

けどまあ、あれだ、親切にタネ明かしをしてやるとしよう。

「お前も知っている通り、俺は中途半端な奴だ」

ボロボロに焼けた制服の前を破り裂き、すでに完治した胸をさらけ出す。

「白状するとな、明美。俺は中途半端に『人間』じゃねえんだよ」

よくわからない。

目の前の生物は人間のはずだ。

そして私は、それに向かって能力を使って、致命傷を与えたはず、破壊したはずだ。

なのになぜ、目の前の人間は立ち上がる？

「おい、聞こえてんだろ？ 人がせつかく、とっておきのネタを晒したってーのに、無言っていうのはどうかと思うぜ」

目の前の人間は、この状況が理解できないのか、まだそんな軽口

を叩いていた。

いや、そもそも目の前にいる存在は人間なのか？

そいつが言うには『中途半端に人間じゃない』らしいが、意味がわからない。

ああ、またイライラしてきた。

どうだっていい。

人間だろうが、何だろうが、もう一度壊せばそれで終わりだ。

「うわああっ！」

胸に澀んでいる欲望を吐き出すように、私は叫ぶ。

その叫びに呼応するように、目の前の存在、ちょうどその横っ腹らへんに爆発を生じさせた。

「ぐがっ！」

目の前の存在とは二十メートルほど離れているが、今回生じさせた爆発の威力は高く、私の髪を焦がすほどの熱風を感じる。

そして、その直撃を食らった存在は、無様に吹き飛ばされて、地面に当たり、それでも衝撃を殺しきれず、何回も水切りの石のように跳ねて地面に倒れた。

確実に壊した。

「ふはっ、ふははははははっ」

破壊による爽快感が私の背筋を駆け、思わず大口を開けて笑う。

「ったく、何がそんなに面白いんだよ、お前は」

自分じゃない声が聞こえた。

壊したはずの存在が倒れ付している場所を向くと、そいつは、ゆらりと力無く、しかしふらつくことも無く立ち上がっている。

「はっ、思ったよりもやべえな。最近、カロリーを貯めていねえからな、回復がおせえ。っーか、このままじゃ死ぬかもなあ、くそぶつぶつとそいつは呟きながら、私の方へと歩いてくる。

足取りはゾンビのようにもたたと、遅いものだったが、そいつの目は真っ直ぐ、それることなく私に向いていた。

怖い。

私の胸に、憎悪とは違うもう1つの感情が生まれた。
それは恐怖。

自分の能力を駆使しても破壊できず、なおも自分に向かってくる者が、私は怖くて仕方が無かった。

「来るなあっ！」

私は乱暴に能力を振るう。

何度も何度も、叩きつけるように能力を行使する。

しかし、それでもそいつは歩みを止めることなく私に近づいてきた。

どうして？

恐怖のせいで、目測が雑になって爆発を直撃させることはできなかったけど、それでも爆風はそいつの体に衝撃を与え、爆熱はそいつの体を焼いている。

こんなに傷つけているのに、なんで目の前の存在は私に近づいてくるんだっ！？

「来るな、来るな、来るなっ！！」

「はっ、そんなにビビんなくても俺はお前を傷つけねーよ」

気付くと、そいつと私の距離は五メートルほどまで縮まっていた。この距離で私が能力を使えば、私もその余波で巻き込まれるだろう。

けど、そんなこと知るかつ！

「なんで近づいて来るんだよっ！ 私はお前を傷つけているんだぞ！ 傷つくことが怖くないのかっ？ 私が怖くないのかっ！？」

ここまで近ければ、目測は関係ない。

最大の爆発で私ごと吹き飛ばす。

そうすれば、この不可解な存在は壊れるだろう。

私も壊れてしまうかもしれないが、『誰かをこのまま傷つける』くらいなら、自分が壊れた方がマシだ。

あ、れ？

おかしい。

私はなんで目の前の存在を傷つけているんだ？

そうだ、私は『誰も傷つけない』のに、何で傷つけているんだ？

憎いから？

・・・違う、私はそいつを憎んでいないはずだ。

この胸に渦巻く衝動も、本来ならそいつに向けられるはずじゃなかったはずだ。

なら、怖いからか？

傷つくことを恐れずに私に近づいてくるものが怖いから、傷つけているのか？

それだっておかしい。

だって私は、誰かを傷つけるのが怖くて、誰も近づけなかったのに。

ああ、よくわからない。

矛盾した願望と欲望がごちゃごちゃになって、何もかもわからなくなりそうだ。

「明美」

目の前の存在に、自分の名前を呼ばれた気がした。

ごちゃごちゃになった思考が、目の前の存在に集中する。

「俺だって、怖いぞ。誰かに傷つけられるのも、誰かを傷つけるのも。けどよ、怖いからって、お前を放っておくわけにはいかないだろ」

「・・・なんで？」

私の問いに、そいつはあっけからんと答えた。

「だってお前が一番傷ついているじゃねーか」

そいつは決して無事じゃなかった。

回復し切れていない傷や、焼け爛れた皮膚が、ボロボロになった学生服の隙間から見えている。

まともに会話しているけど、それもかろうじてだ。

そいつの呼吸は全力疾走を終えた後のように荒く、乱れている。私を見る目だって、焦点がろくに合っていない。

対して私は、多少服が汚れているだけで、怪我のひとつも無く、五体満足だ。

なのに、そいつは私が一番傷ついているという。

なんて的外れな言葉。

まるで場違い。

検討外れにもほどがある。

けど、私の視界は歪んでいく。

頬には、生暖かい液体の感触が。

いつだっただろう？

前にも似たような言葉をかけてくれた人がいた気がする。

誰だったろう？

凄く凄く、大切な人だった気がする。

「何よりさ、そんな苦しそうに泣いている奴を放っておけるわけねーだろ　　そうだよな、千穂ちゃん」

背中がやわらかい感触に包まれた。

焦げ付いた匂いの他に、懐かしい、優しい甘い匂いが鼻腔をくすぐる。

私は、誰かに抱きしめられていた。

「あーちゃん、大丈夫だよ。私がついているから、あーちゃんは絶対に独りにならないから。寂しくなんか、させないから」

その声で、言葉で、やっと私は思い出す。

誰よりも大切に、何よりも大好きな私の親友の名前を。

「ちーちゃん」

私が名前を呼ぶと、抱きしめられる感触が強くなった。

胸の中に在った熱くてドロドロとした物は、もう消えている。

私の胸の中は、背中から伝わるちーちゃんの体温と同じくらいの、温かい気持ちで満たされていた。

「友達になろうよ」

まるでなんでもないように、ちーちゃんはそう言った。

当時の、中学生の時の私は、それはもう闇歴史もいいところな感じで他人との関わりを絶っていたし、今の十倍ぐらい暗いオーラを出していた。

そんな私に、よりにもよって初対面での一言がそれだったのだ。

私はその時は、こいつはどれだけ空気を読まないんだ？ とか、また善人面した偽善者が寄ってきたか……とか、その程度にしか考えていなかった。

今思えば、なんて甘い思考だったろう。

ちーちゃんは確かに優しく、人当たりがいい人間だったけれど、それ以上に、とても強欲な人間だったのだ。

彼女は、今まで近寄っていた偽善者とは違い、ただ純粹に、自分の欲望のために私と友達になりたかったらしい。

一応言っておくが、彼女は女の子を好きになる趣味は無い。

友達になってから聞いた話なのだが、ちーちゃんは私を一目見た瞬間に、「あ、なんとなく友達にしたいなー」と、実に身勝手な思いを抱き、それを実行したとのことだ。

同情や憐憫の心も多少は無いことも無かったと言っているが、彼女が私に近づいてくるときの目は確実にハンターのそれだったことを覚えている。

結局、何が言いたいのかというと、私は『嬉しかった』ということだ。

同情なんかじゃなくて、ただ単純に私と友達になりたいって思ってくれる人が居て、私はとても嬉しかった。

何度も何度も、毒舌を吐いて遠ざけても、何度も何度も私に近づいてきて、「友達になろう」といつてくれる彼女が、とても好きだった。

だから、私はちーちゃんと友達になれてよかった。
ちーちゃんの親友になれて救われた。
そして今も、ちーちゃんに救われている。

「ありがとう、ちーちゃん」

背中から抱きしめてくれる親友に、心の底から感謝の気持ちが湧き上がって、溢れてしまいそうだ。

だからね、ちーちゃん。

君は遠慮するかもしれないけど、たっぷりお礼をさせてもらっね。多分、嫌だっけってしても、迷惑だったとしても、無理やり押し付けるから、そのつもりで。

平穏な現在、絶望の未来（前書き）

これにてベイビーボマー編は終了でございます。

次の章からは、本格的に彼が『普通の高校生』ではないことを証明していく感じになると。

平穏な現在、絶望の未来

俺はあの時、千穂ちゃんに明美に抱きついて、そして憑き物が落ちたように明美が泣き崩れた場面を見ていたところまでは覚えてる。

もう大丈夫だな、そう思い安心すると、俺の意識はあっさりと闇の中に沈んでいって、気付いたらときには病院の白い天井を眺めていた。

体がいまいちだるくて動けないので、首だけ動かして辺りを見回すと、銀色のフレームで四角い形のデジタル時計が、あの時から一日経った日付と、17:50という数字を表示している。

どうやら、あれから丸一日俺は寝ていたらしい。

丸一日？

やばっ、偽装モードにしてねえし、俺の体を一般的な病院に調べられたらかなりやばいんじゃないの？ とか焦っていると、いつの間にか現れた猫子に説明をしてくれた。

「にやはははっ、相変わらず、後先考えずに無茶をするねえ、陽平は。病院のことなら心配しないでいいよん、君の事情を知っている『こつち』関係の医者を用意させたから。それとっぴかり口止めもさせてあるしね。あ、そうそう、君の可愛い後輩はもう心配ないみたいだよ？ ちょっと怪しげな人間が調査に来たみたいけど、私がうまく誤魔化したいし」

「おいおい、随分気が利くじゃねーか。気が利きすぎて、この後の料金請求が怖くて仕方ないんだけどよ」

「心配しなくてもオツケーさ。体で払ってもらうから……性的な意味で」

「はっはっはっは、相変わらず冗談がうまいなあ、猫子は」

「にやははっ、にやはははははは」

「猫子？ 笑顔だけど、目が笑ってねえよ？ とうかさ、俺の

可愛い後輩たちとか、子犬系転校生とかはどこだ？ あいつらの性格なら、俺の見舞いに来ていてもいいはずなのによ」

俺の質問には答えず、猫子は言葉を続ける。

「知ってるかなあ、陽平。私は昨日ね、珍しく気を利かせて、君の可愛い後輩である上田千穂ちゃんに、同じく君の後輩である桐生明美ちゃんの居場所を教えてあげたんだ」

「ほんと、どこまでお前は見透かしているんだか。つーか、お前がどうやって明美の居場所を千穂ちゃんに教えたんだ？ 千穂ちゃんの携帯番号を知っているくらいならおどろかねーけどよ、明美の場所は例外だろ。明美にGPSでも付けてたのかよ？」

「にやははははっ、まさかー、そんなわけないじゃん！」

「だよなー、さすがにそこまでしねえよなー！」

俺と猫子はしばらく笑い合ったが、次の猫子の一言で俺の笑いはぴつたりと止むことになった。

「GPSを付けているのは陽平にだよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

薄々気付いていたけどよ、なんか、猫子がコンビを解消してからやけに俺に絡んでくるというか、行動が、その、ストーカーっぽい感じなんだが。

「つーか、今気付いたんだけどよ、なんか俺、拘束されてねえ？ 両手が手錠でベットに繋がれてんだけど？ つーか、いつまで経っても体のだるさが消えねえんだけど？」

「にやははははっ、エロゲーに似たようなシュチエーションがあったから参考にしてみましたっ。もっともね、そのエロゲーだと男女逆だけど」

「猫子、猫子。お前の目がいつものさわやかな感じじゃなくて、こっ、ねつとりと絡みつく感じの視線を向けてくるんだけどよ？」

「にやはははははー」

「だから目が笑ってねえよ！」

なんだ、この状況っ！？

昨日、俺、すげえがんばったじゃん。結構命がけで頑張ったじゃん、なのになんで陵辱イベントみたいなの発生してんだよ！

しかも、その相手が昔の相棒って……せめてもうちょっといい雰囲気で、普通に拘束されてなきゃご褒美なのにつ！

「ちなみに人払い済んでいます」

「わあっ、状況がすでに詰んでやがるなあ、畜生！」

さすがは猫子、抜かりが無い。

「いやー、犯されるう、と俺がぎゃあぎゃあ騒いでいると、今まで笑顔だった猫子の表情に影が差し、ぽつりと呟いた。

「……最近さ、陽平は冷たいよ。『普通の高校生』になりたい君が、私と関係を断ちたいと思うのはわかるけど、それでさ、寂しいんだよ」

その呟きがあまりにも寂しげで、切なげだったから、俺はやっと自分の過ちに気付いた。

関係を断ちたがつている、か。

確かにそうだよな、そういう風に見られてもしかたねえ行動をしてきたけどよ、別に俺は猫子のことが嫌いなわけじゃない。

嫌いだしたら、元々、コンビを組むわけが無い。

つか、コンビを解消したのだって、ある意味猫子のためなんだが……まあ、今言うことでもないだろう。

「なあ、猫子」

ただ、このまま勘違いされるのも嫌だし、少しだけ本音を言っておくとするか。

「情報料とかさ、そういう仕事関係の返済としての強制じゃないなら、俺はお前と一緒に居たいぜ。むしろ願ったり、叶ったりだ」

「陽平？」

首を傾げる猫子。

やれやれ、と俺はため息を吐きつつ、手錠を力任せに破壊した。俺が手錠を壊したことにについて猫子は驚かない。

いくら体がだるいからといって、こんな手錠1つで俺を拘束でき

ないことを猫子は誰よりも知っている。

それなのにこんな真似をしたのは恐らく、俺にかまって欲しかったんだろう。

だから俺は、猫子の頭に優しく右手を乗せた。

「しばらく隣に居てくれ。今回はさすがに、俺もこたえたからな」
「・・・・・・・・・・・・いいの？」

いつもの態度はどこへ行ったのかと問い詰めたくなるほどしおらしく、猫子は上目遣いで俺に尋ねる。

俺は苦笑しながら答えた。

「頼むよ、猫子」

猫子は珍しく、にやははとも言わず、静かに俺の肩に寄りかかる。俺も黙って、それを受け入れた。

命がけで頑張ったんだ、昔を懐かしみながら、しばらく二人で寄り添うぐらいしても、罰が当たらないはずだよな？

「おかえりなさい、陽平さん。昨日はお楽しみでしたねー」

翌日、俺が自宅に変えるとジト目で悪魔に出迎えられた。

「おいおい、いきなりなんだよ、灯。やけに機嫌悪そうじゃねーか」

「いえいえ、別に機嫌悪くなんかありませんとも。私の忠告を無視して瀕死になって、あまつさえその後始末を私に任せて、陽平さんだけ猫子さんと二人でイチヤイチヤしてんじゃねーよ、なんて全然思っていないせんとも！」

「全然、隠す気が無い本音をありがとう」
確かに俺も悪かったと思う。

というか、自分で説得するとかほざいておいて、結局は千穂ちゃんのおかげで明美が戻れたものだし、その千穂ちゃんに連絡入れたのも猫子だし。

よく考えると、俺が無駄に明美に殺されかけただけじゃねーか。

その上、後始末で灯にも迷惑をかけてさあ……。

「そーいや、後始末って具体的にどんな感じにしたんだ？ 明美の容態はどうなった？」

灯は淡々と俺の質問に答える。

「さすがにアレだけの規模で破壊が行われたら色々面倒なことになりますからね、ちよつと悪魔らしく魔法でも使つて、爆心地を元の林に戻しただけですー。ああ、それと明美さんが襲った方には、能力の事とかばれると面倒なので、適当な記憶を改ざんしておきましたし、関係者以外で明美さんが能力を使用した痕跡も大分消してあります」

そして、と灯はさつきまでの不機嫌オーラを若干緩ませて、言葉を続けた。

「明美さんは『完治』しましたよー。恐らく、ウィルスの媒体となっていた心の闇が消え去ったからでしょうねー。今は学校を休んでもらつて、ゆっくりと記憶を整理してもらっています。いくら『完治』したと言っても、まだ色々と不安定ですからねー」

「そう、か」

俺は胸を撫で下ろした。

猫子から大体話は聞いていたが、やはり灯に太鼓判を押してもらわなければ安心できなかったからな。

「記憶の整理か。やっぱり、暴走中の記憶とかも改ざんしたのか？」

出来ればうまく改ざんしてやって欲しいと思う。

いくら能力が暴走していたとはいえ、明美は自分の意思で他者を傷つけてしまっている。

他者を傷つけるということは等しく、自分を傷つけてしまうことになる。

その傷を忘れられるなら、忘れてしまったほうがいいものなのだ。

「いえ、陽平さんが病院で寝ている間、私は明美さんや千穂さんにある程度の事情を話し、今までの記憶の改ざんを望むか尋ねたの

ですが、見事に拒否られました」

「…………お前、そりゃ拒否るだろ、明美や千穂ちゃんなら俺の後輩たちは総じて、そういうごまかしみたいなのが一番嫌いなんだから。つーか、わざわざ事情を説明しなくても、適当に記憶を改ざんしておけばいいじゃねーか」

その方が後輩たちを面倒事に巻き込まないで済むしな。

「いやあ、それが、私たち悪魔にもある程度制限がありましたー。明美さんや、千穂さんみたいな関係者の記憶を改ざんするのはちょっと、本人の許可がないと無理っぽいんですよー」

「便利なようで不便だな、お前」

「功労者に対して失礼ですよー、陽平さん」

ぶくー、と頬を膨らませて灯は俺を睨む。

…………わざとだとわかつているのに、その仕草で和む俺もどうかと思うぜ。

「でもですねー、陽平さん。貴方はきっと、彼女たちのことを想って、そう言っているんでしょうけど、彼女たちにとっては余計なお世話だと思いますよー。私の見たところ、彼女たちはあの程度の傷で潰れるような人間じゃありません。むしろ、その傷を糧にしていくタイプです。色んな人間を潰してきた悪魔が言うのですから、間違いありませんよー」

「おいおい、さりげなく怖い事実を混ぜるなよ。けど、まあ、そうだな。あいつらなら大丈夫か」

他者を傷つけたという事実は、いつまでも治らない傷だ。

その傷は幸せな日常を送っていたとしても、ふとした瞬間に思い出して、痛みを与えてくる。

でも、あの二人なら、その痛みに負けずに生きていけると俺は信じてみることにした。

「それにですね」

灯は悪戯に微笑んで、俺に伝えた。

「彼女たちは言っていましたよ。『記憶を消されちゃ、陽平先輩に

お礼を言えない』って」

わざわざ伝えなくてもいいような、赤面モノの発言を伝えてきやがった。

「あれ？ 照れているんですかー、陽平さん？」

「うるせえ、こつち見んな」

「あれあれえ？」

「あー、うぜえ、うぜえ。近づくなよ、もう。悪魔は俺の半径十メートル以内に近寄らないでくださいーい」

「恥ずかしさのあまり陽平さんが小学生染みたことを言い出したっ！？」

俺はこれから熱を持った顔が冷めるまで、灯にかかわれ続けることになるのだが、そんな中でふと思った。

できることなら、こんな悪ふざけをずっと続けられますように。

そんな夢みたいなことを思った。

灯が散々俺をからかい、俺もそれに付き合ってバカげたやり取りをした。

多分、俺も灯もわかっていたんだろう。

このやり取りが終わってしまったら、俺たちが気付きかけている『絶望』と向かい合わなければいけないことに。

だから、余計に俺たちのやり取りは長引いて、だれて、結局、最後には灯も俺も、無言で顔を向かい合わせるようになった。

「陽平さん、言わなきゃいけないことがあります」

「だよな、俺も言わなきゃいけないことがあると思っていたところだ」

灯はいつに無く真剣な表情で、まるでこれから魔王にでも挑む勇者のような表情で俺に語りかける。

「本体、ルールによって絶対的に保障されているはずの、私のリーダーの不調。そして、不自然なウィルスの侵食速度。イレギュラ

「な事態ですが、ある事態を想定して考えるならば、この状況にも納得がいきます。そしてそれは恐らく紛れも無い事実として存在しているんでしょう。」

死刑を言い渡すように、灯はその言葉を紡いだ。

もつとも、死刑を言い渡されるのは、他でも無い俺たちなのだが。

「ライターアースは私と同様に前回の記憶を受け継いでいます」

俺は半場予想していた、けれど、嘘だと信じたかった事実をゆっくりと噛み砕き、理解し、飲み込んだ。

きつと今、俺が鏡を見たら、物凄く情けない顔をしているんだろう。

けどよ、可愛い後輩たちにこんな顔は見せられねえよなあ、おい！無理やり心を奮い立たせ、悪魔の言葉に答える。

奥歯を噛み締め、不敵で生意気な笑みを浮かべて、俺はその絶望に答える。

「上等だ！」

ダークカーテンの独白（前書き）

二部始まりでございます。

そして、2人目の登場です。

ダークカーテンの独白

俺は時々、自分が本当に人間なのかがわからなくなる。
昔から俺は大抵のことは、人並み以上になんでもできて、むしろ、
できないことのほうが少なくらいだった。

だからなのかもしれない。

周りの人間が、俺を化け物みたいに見るのは。

羨望と嫉妬の眼差しの中に、恐怖が含まれているのは。

「すごい」

「さすがだ」

「敵わない」

「本当に人間か？」

「人間じゃねーよ、絶対」

「同じ人類とは思えないね」

その声が、

俺を見つめる眼差しが、

薄ら笑いが、

俺を人間じゃないと拒絶しているように思えた。

ああ、だから俺は常々思っている。

俺の視界を全部、黒いカーテンで覆ってしまいたいと。

いや、いつそのこと体中をそのカーテンですっぽりと隠して、周
りから隠れてしまいたい。

そんな、つまらない逃避願望。

孤独を嫌うくせに、周囲との隔絶を望む矛盾。

それが俺、ダークカーテン。

つかの間の現実逃避（前書き）

現実逃避もたまにはいいものです。
また、前を向けるのなら。

つかの間の現実逃避

「やあやあ、お久しぶりですね、いや、お久しぶりというほど間は開いてないけど、陽平先輩の憎たらしい顔を見ずに数日間はこちらちゃんと二人で、実に幸せな日常を過ごせましたよ。というか、何、後輩の教室に来てるんですか？ わかりませんか？ 陽平先輩みたいな人がか弱い後輩たちが居る教室に入ってくると、皆、萎縮してしまっているのが。あ、すみません、わかりませんよね。なにせ、陽平先輩はそんなこともわからない無知無能の塊だったのですから。そんなこともわからない私が馬鹿でした。いや、絶対陽平の方が馬鹿だけど」

なんつーか、桐生明美が完全復活した。

数日、灯の忠告を聞いて学校を休んでいた俺は、一応、心配していたであろう友達に挨拶をして回っているのだが、どうやら、この後輩をそのリストに入れたのは間違いだっただけらしい。

心の闇が完治した明美は、俺の顔を見るなり、いきいきとした口調で心を折りに来たからな。

「お前なあ……後輩のために色々と体を張った先輩に対して、何か他に言うことは無いのかよ？」

「陽平先輩の体って、なんか再生してましたよね、超キモイ」

「人の秘密をあつさり口にして、しかもキモイとか言うなよ！ お前、どれだけ容赦なく俺の心を折りに来てるんだよ！？ そんなに、俺に言い負かされたのが悔しかったのか？」

「ええ、無理やり押し倒されて陵辱されるってあんな感じなんだろうな、って思いましたよ」

「どれだけ屈辱だったんだよ」

恨めしそうに俺を睨みつける明美。

その瞳には、後輩のために軽く死に掛けた先輩に対して、敬意の欠片も感じられない。

あれ？ おつかしーぜ？

確か俺、こいつのためにわり命がけの説得をしたような気がするんだが、それでなんでここまで言われなきゃいけないんだろ？

というか、言われてたまるか。

「つーかよお、明美。俺の心を折るより先に、まず、何か言わなきゃいけないことがあるんじゃないのか？ ああん？」

「破れた制服だったら、灯先輩が直して、ちーちゃんと二等分していたけど？」

「そっちじゃねえ！ いや、その内容も気になるけどよ！」

「ちーちゃんが上着で、灯先輩がスボンを持っていた。使用用途は聞かないほうが幸せになれる、とこの私が気を遣うぐらいな感じ」

「普通に返せよ、あの二人！ それと、服に着る以外の使用用途を導き出すな！」

ぜーはー、と思わず俺は息を荒くした。

ちくしょう、俺のツツコミ属性をうまく利用して攻撃をかわしやがって、明美の奴。

そんなに俺に礼を言うのが嫌かよ。

まあ、嫌だろうけど。

「陽平先輩」

「ああ？」

「そろそろ昼休みが終わるから帰れ」

につこりと、それはもう勝ち誇った笑みで明美は俺に言った。

ぶちりと、俺の理性が切れる音が聞こえる。

「言われなくても帰るわ！」

帰り間際に、腹いせに強烈なデコピンをお見舞いしようとしたが、それより先に明美は座っていた椅子を傾けるという回避運動によって無効にされた。

にやり、とさらに笑みを深める明美の姿に、俺は思わず、このまま明美を教室の窓から投げ捨てたいという願望を実行しそうになっ

てしまった。

具体的には、椅子の足を掴んだところで正気に戻ったぜ。

俺は深く呼吸を繰り返して、なんとか気分を落ち着かせる。

「明美、これ以上、お前と会話していると人としてやつちやいけない行動に移りそうだから、教室に戻るわ。昼休みも終わるし」

「そうだね、さつさと帰れよ、陽平」

「先輩はつけるよ、後輩」

つくづく可愛くない後輩め。

でも、元気にはなっていたようだから、これはこれで良しするか。俺がそう心境を無理やり納得させ、教室から立ち去ろうとすると、明美は遠慮がちに俺の制服を掴んだ。

「………陽平」

「先輩をつける」

「陽平先輩」

「なんだ？」

振り返ると、さっきまでの勝ち誇った顔はどこへやら。明美は顔を真っ赤に染めて、視線をさ迷わせている。

「あ、あの、その」

「あ？」

明美は俯いて、恥ずかしそうに、消えてしまいそうな声で言った。

「ありがとう」

あー、悪い、前言撤回だわ。

どうやらこの後輩は、なかなか可愛いところもあるらしい。

長すぎる前髪を、あの時の髪留めで律儀に留めている明美を眺めながら、そんなことを俺は思った。

走る。

走る走る。

なんの変哲もないはずの田舎道を、俺は全力で走って
い
や、逃げている。

「はあっ、はあはあっ、はあっ！ やべー、やべー」

思わず笑い出してしまいそんな焦燥感を堪えながら、俺は逃走中
っ
って感じですよ。

いやー、あれですな。

なんかこうやって、自分の息切れの音を聞いていると、まるで俺
が変態に見えるというかー、なんていうかー、こんな思考で現実逃
避しなきゃいけないくらいやべー。

「つと、あつぶねえ！」

自分の直感を信じて、転がるように左へ折れは避けた。

その後、ちょうど、俺がいたはずの地面をちゅんっ、と音を立て
て何かが抉っていく。

「こえー、こえー。やー、マジこええっすわー。ありえなくね？
現実で、拳銃持った黒服に追われているとか、マジ、ありえねえ
んっすけど！？ そー思いませんか？ 黒服さーん？」

当然のことながら答えが帰ってこない。

代わりに銃弾を立て続けに三発ほど打ち込まれました、てへ。

「つてええええええええっ！？ づあっ、は、初めて知った！
銃弾がかすると、痛いよりも、すげえ熱いっ！」

腕とかわき腹から、そりゃあもう、だっくだっくと血が出てきて
いる。

本当にやばい。

というかですね、何で全力疾走している相手に、こんな精度で射
撃ができるだよ？

普通、運がよければ当たるって程度だっつて、なんかの本で読んだ
のに。

ああー、つまり、あれですか。

俺はただ今、それが可能なレベルの相手に追われているっつーこ

とっすか。

「ダメっすわ、こりゃーちょっと、死ぬっすわ」

自分の口から自然と弱音が出てしまう。

幸い、足は無事なんで、なんとか走れているけど、もうダメだ。

心が半分くらい、折れ曲がっていますもん。

だってさー、今、運良く逃げ切ったとしても、行ける場所がないし。

俺の知り合いの中に、こんなやばい連中から助けられそうな人なんて

「ターゲットを補足。これから捕獲する」

思考を遮るように、無機質な声が響く。

あつれー？ いつも間に回りこんでいたんですか、黒服さん。

「降伏を推奨する。抵抗が確認された場合、制圧許可を得ている」
無機質ながらも、美しい声。

その声の持ち主は、灰色のショートヘアーをなびかせ、人形染みた無機質な美貌を持つ黒服の女性だった。

年は大体、十代後半、成人しているかどうか微妙な感じだ。

今の状況で唯一救いがあるとすれば、追っているハンターが、こんな美人ってことぐらいすかねー。

いや、筋肉ムキムキのおっさんよりも、綺麗なお姉さんに追われている方が気分がいいじゃないっすか。

「あー、お姉さん。ここで素直に降伏したら、お姉さんとデートできるんっすかねー？」

「それは私の任務に含まれていない」

俺の軽口はきっぱりと切り捨てられた。

うん、何度か会話を試みた見たけど、どうやらこのお姉さん、まるでロボットみたいに受け答えに遊びがないというか、余裕が無い感じがする。

こういう人が相手で、しかも自分よりも各上の相手な場合、ほとんど逃げ切れる気がしませんっすわ、本当。

ああ、もういつそのこと、捕まってしまうのか？

そんな諦め半分の思考に陥りかけたとき、ふと、お姉さんの髪が目に残った。

灰色の髪が、やけに引つかかった。

「あ、居た」

俺は思い出す。

こんな絶望的な状況でも、まるでヒーローみたいに俺を救ってくれそうな、お人よしで最強で、すげえ頼りになる先輩を。

先輩の不敵な笑みを思い浮かべると、案外、こんな状況でもなんとかなるような気がするっすよ。

「執行猶予期間終了。これより、ターゲットの捕獲に入る」

かちやりと、銃口が俺に向けられた。

さっきまでの俺だったら、ここでもう諦めていただろうけど、さすがに、ここで諦めたらあの先輩に笑われるような気がするので、つか、好きな女の子にも告白してないのにさ、諦められるはずが無いっすよ、良く考えたら。

「要するに、肝心なのは覚悟なんっすよねえ」

「………何の話をしている？」

俺の言葉に、何らかの不確定要素でも見出したのか、お姉さんの動きが止まり、初めて俺に疑問を投げかけてくる。

その疑問には答えず、俺は大きく深呼吸をした。

目を背けるな。

心の奥にある、闇を見つめる。

逃げるな。

それを受け入れて 認める。

自分を定義する、もう一つの名前を呼べ。

「覆い隠せ、ダークカーテン」

俺の声に反応して、俺のイメージが現実を侵食し始める。

そして、銃口と俺を隔てるように、漆黒のカーテンが出現した。

ライターアース。

それは、世界最悪の異能力者。

それは、世界破壊者。

そして アカシックレコードへのアクセス権を持つ者。

「ぶっちゃけ、チートですよー」

あの時、俺が病院から帰ってきたときに、灯は乾いた笑いを漏らしながら、俺に説明を続けた。

アカシックレコード。

灯曰く、それはこの惑星が観測した過去、観測している現在、観測するはずの未来、その全ての事象を記憶した一冊の本らしい。

一冊の本、というのはあくまでもイメージ的なもので、本当にそんな本が存在しているというわけではなく、というか、アカシックレコード自体、俺が存在する次元とは異なるところに保存されているので、俺が知っている言語、概念では理解しきれないようだ。

そのアカシックレコードへ、ライターアースは干渉する^{アクセス}ことが可能というわけだ。

最悪なことにな。

まあ、アクセス出来るといつても過去や未来といった人智の及ばない領域を閲覧したり、改ざんすることは不可能らしい。

ライターアースが干渉できるのはただ一つ、この『現代^{いま}』のみだ。しかし、それでも充分にその能力は脅威、いや、反則過ぎる。

灯が言うには、アカシックレコードにアクセスできるからと言って、何でも思うがまま改変することは当然不可能だけど、『万物創造能力』、『空間支配』、『全魔術使用許可』ぐらいは出来るとか。

さて、落ち着いてライターアースが使用できる能力について考えてみようか。

・ 『万物創造能力』

この世界に存在する全ての物質を再現、創造することが可能。本来

なら、こんな能力を所有したところで、燃費が悪すぎて使用できないのだが、ライターアースの絶大な心の闇が莫大なエネルギーを生み出すので、使用可能。ある程度、使用限界はあるとはいえ、うまく使えば町一つなんて軽く吹き飛ばせる。頑張れば一国とかが吹き飛ばみたいだ。

・ 『空間支配』

文字通り、空間を支配できる。空間の座標を操って、空を歩く事も可能だし、テレポート、サイコキネシスなどといった異能力の行使が可能。本来なら、燃費が悪すぎて使用不可能な能力なのだが、ライターアースの絶大な心の闇が莫大なエネルギーを生み出して以下略。

・ 『全魔術使用許可』

信じられないことだが、この現代にも魔術というものが残っているらしい。というか、異能力者が感染するというウィルスには魔術やオカルトというブラックボックスを使用しているというので、よく考えれば当然かもしれないが。

ライターアースはその魔術を、現存する魔術を全て、使用することが可能なのだ。過去に失われた魔術は、現代しか干涉できないライターアースではさすがに使用できないのだが、現代にまで残っている魔術というのが、これはまた厄介なものらしく、コンピューターなどといった現代の機械技術も取り入れてより効率的に行使できるようになっているとのこと。

全ての魔術を行使できる知識があるからといって、全ての魔術を行使することができることは別なのだが、そこはライターアースの以下略。

えー、以上、ライターアースが使用できると思われる能力の一覧でした。

んじゃ、説明も終わったところだし、そのライターアースと対しなきゃいけない俺から一言。

「無理だああああああああああっ！！」

下校中、俺は澄み渡った青い空に向かって、吠えた。

「あーもう、無理だし、意味わかんねえし、チート過ぎだし、全然、笑えねえし！ ふざけんなよ、何がゲームだこんちくしょう！ゲームバランスおかしいだろうが、おい。明らかに勝つことは無理、っつーか、なんだこの『中学生が授業中に考えた最強キャラクタ』みたいな能力はよおおおっ！　せめてこっちにも何か能力をよこせつ、自前の性能だけじゃきついんだよ！　爪楊枝で山を崩すような気持ちなんだよっ！」

「落ち着いてください、陽平さん。空に向かって吠えても現状は変わりませんよー」

ぜえぜえ、と息を切らしながらも、とりあえず俺はここ数日であつた鬱憤を全部吐き出した。

灯が感じたリーダーの不調。

その原因はライターアースの空間支配と魔術使用によるものだった。

どういう理由かわからないが、ライターアースは灯同様に、もしくはそれ以上に前回からの記憶を引き継いでいる。

そうでなければ、ライターアースとはいえ、いきなりあんな能力を行使することは不可能だと灯は言った。

ライターアースの能力によって妨害されていたとしても、灯はあくまでも悪魔だ。

妨害されたということは『能力』を使用したということ。

灯はライターアースの正体や、居場所を発見できないまでも、そ

の能力の詳細を前回の記憶から閲覧できるように設定し、ライターアースにいつでもハッキングをかけ、その情報を取得できるようにしているのだとか。

しかし、そこまでして得た情報がもたらしたのは、深い闇を携えた絶望だった。

反則的なまで異能。

格の違い。

何気ない日常の中でも、足元から世界が崩れていくんじゃないかという不安。

そんな感情が俺の心の中で渦巻いて、まともに動くことすら出来なかった。

数日間学校を休んだのは、傷の療養という部分もあったが、それよりも精神的なものの方が大部分を占めていた。

俺なんかじゃ世界は救えない。

そんな当たり前なことを、現実的なことを、嫌というほどに思い知らされた。

そう、思い知らされた、だけだよあ、

「だが、これで決意することが出来たぜ」
んなことは最初からわかっていたことだ。

世界を救うだなんて口では言っていたが、正直、それだけだったんだ。

本当に、自分が世界を救えるだなんて思えるわけがねえ。

俺はそんな重みに耐えられるほど強くない。

虚勢を張っていただけだ。

だから、ライターアースの能力を知った途端、簡単に絶望に押しつぶされる。

もう無理だって、思った。

最初の一日は、布団の中に包まって、がたがた震えながら過ごした。

けど、俺は気付いたんだ。

「そのライターアースっていう中二病キャラと、意地でも笑い合
ってやるってな」

俺がやるべき戦い方に。

「大体、全部が全部異能力者と戦う結末になるとは限らないしな。
明美の時だって、ボロボロにされたけど、結局は話し合いで何とか
なった。だから、後二人の異能力者も、ライターアースとも、誠心
誠意真正面からぶつかって話し合う。これが、俺ができる唯一の戦
い方だ」

灯の目を見つめて、俺は宣言する。

そして、悪魔の冷たい視線を跳ね返すように、俺は決意した。

「文句は言わせねえぞ？ 悪魔」

「・・・・・・・・・・・・・・・・本当に」

灯はその可愛い容姿に似合わない、苦々しい笑み浮かべた後、
ふっ、と柔らかく微笑む。

「本当に、陽平さんは陽平さんですね」

何を当たり前のことを言っているんだか。

けどなんか、その微笑みを見ると、なんとかなりそうって思
えるから不思議だ。

例えばそれが、世界を救うだなんて荒唐無稽なことでも。

「つたりめーだろうが」

だから、とりあえず俺は灯に合わせて、笑っておくことにした。

いつだって現実には急にやってくる。

時に、絶望を携えて。

時に、希望を背負って。

だから俺たちはいつでも覚悟をしなければいけないんだ。
現実を、受け止める覚悟を。

「あ・・・・・・・・先輩、すみません。悪いつすけど、ちょっと、

助けてください」

家に帰ると、血まみれの後輩もたれ掛かるように座り込んでいた。

破竜院剣が、玄関のドアに

万能な後輩（前書き）

短いですが、区切りがよかったので。

万能な後輩

破竜院剣という後輩について紹介しよう。

容姿端麗。

あいつはそこら辺のアイドルなんか目じゃないほどに、容姿が整えられており、一つ一つの体のパーツが完璧に近い。切れ目がちの瞳に、整えられた長身のスタイル。この学校では、いや、この国でもあいつとまともに並べるほどの容姿を持った人間は少ないだろう。頭脳明晰。

驚くほどにあいつは頭の回転が速く、思考も柔軟だ。難解な方程式だろうが、一瞬で看破し、推理小説なんかは、探偵が犯人を見つける前に犯人を言い当てる。本人の話だと、既に二十ヶ国語は話せるらしい。そんな頭脳明晰なあいつが、なんでこんな田舎の学校に通っているかという・・・いや、やめておこう。これはプライベートな問題だしな。

そして、万能天才。

あいつは万能で、そして天才だ。

例を挙げるときりが無いが、そう、例えば、初めて竹刀を持ったその日に、段位を持っている剣道の達人から一本取ったり、一回、その料理を食べただけで、同じ料理を完全に再現できるのだ。さらには美術で絵を描けば、何十年に一度の才能だとその道のプロに驚愕されたりなど、その逸話は数知れない。

出来ないことなど何も無し。

あいつがこの世界の中心だと言われたとしても、俺は不思議に思わない。

だから、俺は少し信じられなかったのだ。

そんなあいつが、破竜院剣が、息も絶え絶えの状態で、血まみれになりながら俺に助けを求める姿なんて。

「いやー、ほんと助かったつすよ、先輩！ 一時は本当に走馬灯がこつ、ぐるぐるーっと頭を駆け巡りましてねー、先輩とのありし日の思い出なんかに浸っちゃりなんかしましてね。あと数分ぐらい遅れてたら、ほんと、あの世行きでした。つーか、凄いですね、灯先輩。なんか手をかざすだけで傷があつという間に無くなって、まるで魔法使い、いや、確か悪魔でしたね。いやあ、まさか悪魔なんてものをこの目で見られると思ひもせんでしたよ。あ、今思ってたんですけど、悪魔が居るなら当然、天使も居ますよね！ 先輩、天使とは知り合いじゃないんつすか？ その天使ってエロいんで

「るつせえ！」

俺は数分前まで、重病人だった剣に対して、拳骨を落とした。

剣が頭を押さえて、涙目でこちらを見てくるが、あいにく男に同情する主義は無い。

「つおおおおおつ、超痛いっす。何するんですか、先輩」

「何って、うるせえんだよ、後輩。数分前まで死に掛けだった奴が、ぎゃあぎゃあ騒ぐんじゃねえよ。傷が開いたらどうするんだ」

玄関で血まみれの剣を見つけると、俺はまず有無を言わずに居間に担ぎこみ、灯に要請して剣の傷を治させた。

灯はこのゲーム中、異能力者を直接排除するような行動以外は、ある程度自由に力を行使できるらしいので、こついった傷の手当てぐらいだったら、一瞬で済ませることが出来るらしい。

さらに言えば、異能力者を『直接』排除するような行動はダメなのだが、俺に銃器の類や毒ガスなどといった兵器を用意することなんかも実は可能なのだ。ま、俺はそんな物騒な物に頼る気など毛頭無いので、今後もその能力は封印されているだろうが。

「天使はいますよー、剣さん。けど、今回は多分、この世界に登場することは無いと思いますけどねー」

噂をすれば影、灯はその手に急須きゅすと湯飲み、お茶菓子が乗ったお

盆を手に登場した。

ただし、制服姿ではなく、髑髏マークのニット帽に、シルバーアクセサリーをジャラジャラつけた上下真っ黒な私服で。

「そりや残念……って、うおっ！？ なんっすか、灯先輩、その格好。言っちゃあなんですけど、似合ってますんよ、それ」

「知ってますから、大丈夫です」

につこりと、なんでもないように灯は答える。

前にも俺は剣と似たようなことを聞いたのだが、なんでも、髑髏マークやシルバーアクセサリー、黒い服装などは、悪魔の正式ユニフォームらしく、灯本人も渋々着ているのだとか。

さて、閑話休題はここまでだ。

そろそろ本題に入るとしよう。

「剣、俺たちの事情はさっき話した通りだが、理解できたか？」

「ういっす、そりやあもう」

剣は女子を卒倒させるような笑顔で、冗談交じりに敬礼をした。

「簡単に纏めると、陽平先輩はこの世界を守るために、実は悪魔だった灯先輩と一緒に異能力を持つ人間と戦っているんっすよね！ やべえ、かつこいっすよ、先輩！ まるでラノベじゃないっすか！」

「ライトノベルか、確かに、そんな展開だな」

事实は小説より奇なりというが、小説みたいな展開が現実起こると思っていなかったぜ。さすがに、小説より奇なりってほどじゃないけどな。

「つーか、お前、相変わらず理解はえーな、おい。俺なんかこの灯から話を聞いたときには思わず現実逃避しちゃったぜ？」

「あー、実際、逃げようと思いましたもんねー。まったく、暴れる陽平さんを縛るのは大変だったんですよ？」

「し、縛りプレイ……。だと。さすが先輩、転校生と同棲しているだけでも凄いのに、その上さらにそんなマニアックなプレイまで」

「落ち着け、剣。文脈的にお前の思考はおかしい」

剣は万能なのだが、思考がエロい方面にズレがちな所が玉に瑕だ。
「やだなあ、先輩。健全な男子高校生としては当然っすよ、とー
ぜん」

軽やかに笑う剣。

確かに、剣の言うとおり、これくらいが思春期の男子としては当然なのかもしれない。

俺は『師匠』の教会で、そういった感情を表に出さないよう訓練されているから、よく淡泊だと勘違いされやすいのだが、本当は俺だってエロいことをしたいと思っている。

だってほら、男だもの。

が、『文脈的に思考がおかしい』と言ったのは、エロ方面だけじゃない。

「なあ、剣」

「なんっすか？」

「お前、異能力者だろ？」

俺の質問に、剣は見ていてわかりやすいほどに硬直した。

考えてみれば、おかしいだろ、普通に。

いくら剣の思考が柔軟だからといって、世界の危機や異能力だなんてライトノベルじみだ出来事を、何の疑いもなく肯定できるわけがない。

例え、目の前で魔法を使われたとしても、だ。

この『俺』でさえ現実を疑って逃げ出したくなっただ、いくら万能だったとしても、一般人であつた剣がそんなにやすやすと受け入れられるほど、世界に危機は軽くない。

ならば、答えは簡単だ。

剣が実際に、その当事者であるのなら、俺の話を理解できる。

「……………すげえ。なんっか、さすが先輩って感じっすね！ 実際に、このことは俺から話すつもりだったんですけど、まさか先に言われるとは」

「いや、後輩が血まみれで倒れてたら何か事情があるって勘ぐるのは当たり前だろ？ だから俺の身の回りに起こっている出来事を当てはめてみただけだ。だからそんな目を見るんじゃないよ、恥ずかしい」

後輩である剣に、まるでヒーローシヨーを見る子供みたいな目をされると、恥ずかしいを通り越して気持ち悪くすらあるのだ。

まったく、俺より格段に上のスペックを持っているくせに、なんで俺みたいな奴を慕っているんだかなあ、ほんと。

「じゃ、ネタバレされちゃったんで、さくつと状況説明しますね。まず、先輩のおっしゃるとおり、俺は異能力者です」

俺が複雑な想いをしていると、剣があっけからんと、自らの正体を明かした。

「異能力つつつても、俺の能力は貧弱で、ただ、少し頑丈な黒いカーテンを出現させるぐらいっすね。おまけに、そのたびに傷を抉られるような思いもしなきゃならないし、マジ勘弁って感じっすよ」

剣は軽々と話しているが、俺はその内容に戦慄している。こいつは、この後輩は、異能力をその身に宿していたとしても、心の闇がかなり増幅されているであろう第三段階目に進行していたとしても、まるでいつもどおりなのだ。

つまりそれは、完全に異能力を掌握しているということ。

「剣、お前の方がよっぽどすげえよ。俺は前に一人、異能力に感染した奴を見たことがあるが、お前みたいに平然とはできていなかったぜ。勘違いするなよ、別にそいつの心が弱かったわけじゃねえ、お前が強すぎるんだ」

「やーだなあ、そんなおだてないで欲しいっすよ、先輩。それにほら、俺の能力は明美のとは違って、さほど感情は左右されないんっすよ」

その言葉に、今度は俺が硬直することになった。

「剣、どうしてお前が明美の能力を知っている？ 俺は一度も、明美の名前は出したつもりはなかったぜ？」

「…………あー、やっちゃいましたか。多分、能力を使いまくって逃げていたせいで、若干精神が不安定になったのが原因ですね。ったく、俺らしくないミスでしょう?」

剣は自虐的に笑った後、サーカスのピエロのように両腕を広げて大げさに振舞う。

「俺、ダークカーテンは今の所、ライターアースの勢力下にあります」

その仕草は、さすが剣といったところか、なかなか様になっていた。

滑稽な推論

緊迫する空気の中、剣はあっけからんと言葉を続ける。

「実は能力の使い方、というか心構えを教えてくれたのがそのライターアースって人なんつすよ。自分の闇を否定するな、受け入れる、ってね。いやあ、さすがにそのアドバイスがなけりゃ、俺も今頃、明美みたいに暴走してましたぜ」

「……灯が能力を行使してまで情報操作したはずなのに、明美のことを知っていた。」

それはつまり、剣が灯の能力が及ばないライターアースの勢力下である何よりの証拠。

そしてなにより、薄ら笑いを浮かべながら話す剣の瞳に、曇りは無い。

「そんでもってですね、一応、アドバイスをしてくれたお礼として、ライターアースの頼みを少し引き受けてたんつすよ。ま、その内容は、この町に住む十代の人間の素行調査って感じっすね。それくらいなら楽勝だぜい、と高をくくって行動してたんつすけど、いつの間にか怖い黒服のお姉さんに追われて、現在に至るってわけです」

剣は皮肉げな笑みを浮かべて肩を竦めた。

怖い黒服のお姉さんに追われていた、か。恐らく、それは人間を異能力者に変えるウィルスを開発した研究機関の人間だろう。猫子の情報でも、異能力者のサンプルが欲しくてそれらしい人間がこの町をうろつろしているって聞いていたしな。

「つか、それよりも俺は、この後輩があそこまで追い詰められていたってことが信じられないんだが。」

破竜院剣という後輩は、その溢れる才気は、たとえ熟練の喧嘩屋、殺し屋と対峙したとしても、遅れをとらないだろう。

『人間』だったとしたら、ただけだな。

「で、剣。いや、ダークカーテン。これからどうする？」

「どうする、とは？」

俺の問いに、剣は学校中の女子が思わず胸を押さえるような眩しい笑みで疑問を返してきた。

白々しい、と思いつつも、俺はため息混じりに説明する。

「つまりだな、俺とお前は現在、敵対状況にあるわけだ。そしてここは俺の家、文字通りホームグラウンド。さて、お前はこれからどういう行動をするんだ？　ってことだよ。ほら、それによって俺も対応しなきゃいけないーし」

「・・・へえ」

剣の目が細められ、挑発的な視線を俺に向けてきた。

「なるほど、敵である俺をこのまま無事に帰すわけには行かない、ってことっすか？」

「いや、その逆だ。お前を無事に帰すために、これから俺がどう対応すればいいのかって事だよ」

「へ？」

まったく、なにまぬけ面してやがる。イケメン台無しだぞ、こら。

「だからよお、お前、今さ、かなり複雑な立場にいるんだぜ？」

ライターアースの勢力下にいるのに、それと敵対している俺のホームグラウンドに来ている。しかも、別勢力から追われているんだ。俺としてはこのままお前をある程度匿ってやりたいんだが、そうすると今度はライターアースの方に問題が生じるだろ？　それで裏切り者扱いされたらお前が困るじゃねーか」

剣がまぬけ面から、なにやら複雑そうな顔に変わる。

「あ、あの・・・勢力下にあるっていつても、そこまで密接な関係ってわけじゃなくてっすね、他に何にも頼る物がないから仕方なく指示に従っているっただけですぜ。ライターアースとのやり取りだってメールだけですし、裏切る以前っすよ？　大体、世界を壊そうとしているって話も初めて聞きましたし。ライターアースの目的がそれだったら、正直、俺は手伝いたくないっす」

「つまり、このまま俺に助けを求めても立場的に大丈夫ってことか？」

「というか、俺は初めから先輩と敵対するつもりは無いっすよ」
うし、なら安心だな。

ライターアースの勢力下にあるって聞いたときは驚いたが、思っていたよりも薄い関係でよかったぜ。これなら俺が剣を守っても、剣に不都合が生じることは無い。

「つーことだから、いい加減、お前はその威圧をやめろ、灯」

「はい、了解しましたよー、陽平さん」

にぱっ、と無邪気に微笑んで灯は返事をした。

この変わり身の早さには相変わらず恐れ入るぜ。

なにせ、剣がライターアースの勢力下にあるってわかったときからずっと、剣を射殺さんばかりに睨んでたからなあ。

並みの人間じゃ精神が抹殺されるレベルの視線だったが、そこは万能な後輩、並々ならぬ胆力で耐えていた。

まあ、それでも若干、手が震えてたけどな。

つまり、それくらいさっきまでの灯は怖かった。超、怖かった。

今更ながら、灯が悪魔だということを思い知らされた。

「じゃ、とりあえず、剣が追われている組織から匿うために、一時的に俺の家に寝泊りさせようと思うんだが、同居人として許可を求めるぜ、灯」

「オッケーですよ。というかですなー、私はただの居候なのでから、家主である陽平さんが決めたなら反対しませんよ。ちょうど部屋も余っていますしねー」

俺が借りている家は、四人家族が悠々と暮らせるぐらいの部屋がある。

使っていない部屋を一つ掃除すれば、剣をしばらく泊めるぐらいは可能だろう。

「キョーコさんはなんて言っている？」

「大丈夫です。さっき頷いているところを見ましたー」

ふう、もう一人の同居人からも許可を貰えたか。

キョーコさんは俺がこの家を借りる前から居たらしいからな、一応、許可は取っておかないといけない。

「……すいません、ちよつと質問なんつすけど、先輩」

「ん、どうした？」

剣はなぜか少し顔色悪くして、おずおずと手を上げた。

「その、キョーコさんって誰っすか？ 俺、灯先輩が転校してくる前は、先輩、一人暮らししているって聞いてたんっすけど？」

「生きている奴とはな」

俺の言葉に、剣の笑みが引きつる。

「先輩、それは灯先輩が用意してくれたお茶の数が一つ多いのと関係しているんっすか？」

「まあな。俺には見えないけど、こちら辺にキョーコさんっていう幽霊がいるらしいぞ。なあ、灯」

「はい、ただ今、剣さんの後ろでなんか呪いの言葉呟いていますねー」

「さつきから妙に肩が重かったのはその所為^{せい}っすか！？」

のんびりと茶を啜る灯とは対照的に、剣がひい、と悲鳴を上げて自分の肩を抱いた。

「というか、なんで幽霊がいるんっすか！？ え？ ちよつと待って。そもそも、幽霊って実在するんっすか！？」

「悪魔に超能力者がいるんだ、幽霊がいてもおかしくないだろ。

まあ、俺は靈感無いからまったく見えないし、影響受けないらしいが」

「ジャンルが違うっすよ、ジャンルが！」
んなこと言っても居るものは居るしなあ。

「大体、高校生がこんな家をまともに借りれるはずが無いだろ。前の住人が四人続けて変死でもしなきゃな」

「したんっすね！ 変死しちやったんすね！？」

がくがくと、額に冷や汗を掻きながら剣は俺の方を揺さぶる。

ふう、幽霊の一人や二人ぐらいでがたがた言うなんて、まだまだだな、後輩も。

「俺は自分が影響受けなきゃ、それ良いんだよ」

「ひい、なんて自己中心的な！ んじゃ、俺はどうなるんっすか！？」

「お前はほら、なんかなるんじゃね？」

俺の後輩は素晴らしく出来がいい、万能な奴なので、きっと、幽霊なんかには負けないと信じているぜ。

「ちなみにキョーコさんは今までにお被いに来た霊能力者を七人ほど返り討ちにして、呪ってやったって自慢してましたー」

「めっちゃ、強力な悪霊だあああああつー！」

灯の奴が余計な事を言った所為で、剣は頭を抱えて叫んだ。

勘弁してください、マジ、勘弁してください、と剣が俺に縋り付いてくるが、ここは厳しく突き放す。

「いいか、剣。お前は最悪、命を狙われるかもしれない立場にあるんだ。幽霊ぐらい我慢しろ、怖いのがなんだ！ 命を失うよりはマシだろっ！？」

「いやいやいや、そのキョーコさんって幽霊が既に命の危機なんっすよ！」

「信じろ、自分を！ 信じろ、キョーコさんを！ 人間と幽霊だって、信じあえればきっと二人の距離は縮んでいくさ」

「それはつまり彼岸までの距離が縮まるってことじゃないっすか！」

うるさい後輩め。

俺はこれからお前の分の生活用品を買い揃えなければいけないから、すげえ忙しいんだぞ。それなのにいつまでも幽霊が怖いだとなんだと……はあ、もういい、めんどうだ。

「灯、シヨック療法だ。今からこいつを開かずの間、またの名をキョーコさんルームに閉じ込めて、キョーコさんと二人っきりで話し合ってもらおう。うまくいけばきっと、剣だってキョーコさんと仲

良くなれるからな」

「ああ、なるほど。それはグッドアイデアですねー。あそこなら靈氣が半端無いほど集まっていますから、剣さんほどの素質があれば、キョーコさんと会話できますしね」

「ちょ、待ってください！ うまくいかなかった場合のリスク尋常じゃないですよ、それ！？」

「男は度胸」

俺は剣の首根っこを掴み、開かずの間へと引きずっていく。
ちなみに開かずの間は、もろ鬼門の方角にある和室である。

大家曰く、その部屋に入った者の死亡率は六割を超えるのだとか。
「ひい、た、助けてください、先輩！」

「前に言ってただろ？ 女の人と二人で密室に閉じ込められてみたいって。今がそのときだ」

「女の人って、幽霊じゃないっすかあああああつ！！」

「でも和服美人らしいぞ？」

「え？ それはちよつとうれし」

ボタン、俺は開かずの間の襖を開き、そのまま剣を放り投げた。
不思議なことに、襖は自動ドアのように自然に閉まっていく。

「さあて、買い物買い物つと」

遮られていく後輩の悲鳴を背に、俺は今日の朝刊に入っていたチラシの広告を思い浮かべた。

あ、やрий、今日はトイレットペーパーの特売だ。

トイレットペーパーと生活用品などをもろと準備した俺は、早速、剣の部屋を作るべく、空き部屋を片付けていた。

元々、この家のほとんどは古き良き日本式の建築方法で建てられており、全て和室だったらしいのだが、さすがに何十年も経つと色々とボロが出てくるらしく、いくつかは現代風に普通の部屋とリフォームされている。

今、片付けている部屋もそのうちの一つだ。

「しっかし、我ながら荷物が少なくて手間が掛からないというか、なんというか」

この空き部屋は、ここに引っ越してくるときに持ってきた荷物を置いておく倉庫として使っていたのだが、うん、我ながらほとんど何もない。

中学の時、部活で使っていたスケッチブックや、アルバム、後は・
・・・・・ちよつと荒れていたときに集めてしまった
思い出深い凶器たちが数点。

「とりあえず、この凶器は隠さないとだめだよなあ」

本来なら銃刀法に違反するから処分しなければいけないのだが、これはあの時の俺を思い出させて、戒めてくれる大切な品だ。たとえば、法律に違反したとしても、これは処分してはいけないうらう。

ということで、『拳銃』と『アーミーナイフ』は俺の部屋で嚴重管理行き、と。

「お？ 随分、懐かしいものが出てきやがった」

凶器が入っていた箱から、少し色あせた写真が数枚出てきた。

そこに映っているのは、中学生時代、自暴自棄でどうしようもなかった俺と、一緒にコンビを組んでいた猫子。

「本当に、懐かしいぜ」

寂寥感が胸を締め付け、過去の出来事が苦く口の中に広がる。

あの頃の俺は本当にバカだった。

『師匠』と出会って、更正してもらえなかったら、今頃どうなっていたか、考えるだけでも恐ろしく、それ以上に恥ずかしい。

中学生時代は、誰だってバカなことをやるだらう。

けれど、俺のやっていたことは、恐らく、その中でも群を抜いてバカだった。

夢を見ていたといつてもいい。

猫子と二人で、『世界を変える』ことを夢見ていたのだ。

だから俺は、世界を本気で壊そうとしているライターアースのこ

とを笑えない。

俺たちもある意味、世界を壊すようなことをしていたのだから。

「ん？」

と、ここでふと、何かが引つかかった。

あれ？ 確か、ライターアースって前回の記憶を引き継いでいるんだよね？

なら当然、自分の能力の使い方も熟知しているはず。

なのになぜ、世界を壊さない？

灯みたいに、何らかの理由で能力の一部を制限されているのか？
それとも、ライターアースほど異能をもってしても、世界を壊すにはある特定条件下ではいけないのか？

「…………いや、それよりも」

ひょっとして、ライターアースの目的は、世界を壊すことではない？

灯の説明を聞く限り、ライターアースが世界を壊したことは紛れも無い事実だ。

だが、事実であると同時に、結果にしか過ぎない。

もしも、ライターアースには何か別の目的があつて、それが失敗したから、結果として世界を壊したというのなら？

「だとしたら、希望が見えてきたじゃねーか」

世界を壊すことが目的でないのなら、あるいは説得できる可能性出てくるかもしれない。

詳しくは後で灯と話すとして、今はとりあえずつかの間の希望に浸っておこう。

なぜか自然と手に力が入り、思い切り手を握り締めてみた。

どうやら人間って言うのは思ったよりも単純で、どんなに滑稽な推論だったとしても、ほんの僅かに光が見えたら、気力って奴は湧き上がるらしいぜ。

「っしやあ！ それじゃあ、まずは、この部屋をさっさと片付けますか」

でもってその後は、顔面蒼白で廊下に倒れている後輩を片付けないとな。

木島陽平という先輩（前書き）

主人公は実はそれなりに凄いというお話。

木島陽平という先輩

「目標の能力使用を確認。これより偽装モードを解除、武力を用いて制圧する」

無機質に呟かれた言葉。

一瞬の静寂を破ったのは、銃弾ではなく、二つの切断音。

「う　　そっすよねえ!？」

引きつった笑みで俺は尋ねてみるけど、黒服のお姉さんは相変わらず答えてくれないっすわ。

学習しない行動だと言われても仕方ないけど、これは本当にしゃーない。

だって、切り裂かれたんだから。

銃弾も、達人の居合いも防げるはずのダークカーテンが、目の前のお姉さんにあっさりと切り裂かれたんだから。

両手に携えているのは2本のアーミーナイフ。

一体、どんな素材を使えば、俺のダークカーテンを切り裂くことが出来るんっすか、まったくもう。

「んでもって、こりゃ、ちよつとやばいっすねー」

俺は無意識に胸を押さえる。

ぬるりとした生暖かい感触が手に溢れ、生臭い鉄の匂いが鼻腔に充滿した。

いつ斬られたんっすかねえ？

ナイフどころか、それを振るう腕すら見えないっていうのはかなりやばい状況だ。

戦力差がありすぎるっすわ。

「最終警告。投降を推奨する。次は、四肢の腱を切断すると宣言」
警告か、確かにそうだ。

胸に刻まれた十字の傷は浅い。

しかし、恐らく次はこのお姉さんはきつと、文字通り切り刻んでく

る。

警告の攻撃で反応すら出来なかったのだから、俺にはその攻撃を回避することは無理って判断した方がいいみたいっす。

はい、てなことで、

「そんじゃ、痛いのは嫌なんで、さっさと逃げることにするっすよー」

三十六計逃げるが勝ちってね。

俺は深く息を吐き、もう一度その名を口にする。

「覆い隠せ、ダークカーテン」

出現するのは漆黒の暗幕。

闇をそのまま布状に固めたような、超常の現象だ。

「最終警告を解除。これより、目的の捕獲推奨レベルを下げます」
黒服のお姉さんがナイフを構えた姿を最後に、ダークカーテンは俺の視界を全て包み込む。

けど、このままじゃ、さっきの二の舞っす。

だから、俺は続いて唱える。

「キーワード『暗い海』」

異能力を行使するときが一番大事なのはイメージだ。

俺の場合はしっかりと暗幕を頭の中で思い浮かべられるかが、能力の発動に関わってくる。

強く思い浮かべるほど、能力は強固なものとなり、そして、現実を侵食する……ってね。

引用はライターアースのメールからっす。

んでもって、俺はその特性を利用して、あらかじめイメージを固めておいた物を、キーワードを唱えることによって、思い浮かべやすくしているというわけっすよ。

ちなみに、暗い海というキーワードからイメージするのは、膨大な数の暗幕。

人さえ溺れてしまいそうなほどの量の暗幕だ。

「ぐ……」

出現した膨大な量の暗幕に押しつぶされ、さすがのお姉さんも身動きが取れない。

けど、それも恐らくは一時的なもの。

なぜならほら、俺の耳にはしゅらんっ、しゅらんっ、という小気味良い切断音が聞こえているんだから。

「ほんつと、お姉さんは化け物っすか？」

俺は、自分で投げかけた問いの返答を聞かずに、一目散に逃げ出した。

目的地は先輩の家。

俺が憧れる、ヒーローみたいな人の家だ。

目が覚めると、そこには血まみれの女の人俺を覗き込んでいた。
「んぎよわあああああああつ！？」

はい、そんなわけで、俺は自分の悲鳴と共に起きたわけっす。

「ちよっ、キョーコさん！？ 昨日、話し合ったじゃないっすか！ 俺、すぐ出て行くからむやみやたらに化けて出ないって！ い加減、落ち着いたクールな幽霊になるって！」

俺は悲鳴を上げた後、布団から転がるように部屋の隅へ移動。
がたがたと震えながら、この部屋に居るであろう和服幽霊に抗議を試みる。

すると、部屋の壁に染み出るようにして血文字が浮かび上がった。
きた。

血文字は、妙に丸っこい筆跡でこう書かれていた。

『やだ』

「反応がかわいいっすよーっ！？」

やばいつす、不覚にも俺、萌えてしまったっすよ。

落ち着け、俺。相手のペースに飲まれたら終わりだ。相手は常識が通じない幽霊、ならば、こっちも常識破りの方法で戦うのみっ！
「ふふふ、いいんっすね？ そんな態度をとって？ こっちは生

命力溢れる男子高校生、

例え幽霊であろうと、キョーコさんは和服美人！　つまりっ」

しゅばっ、と俺はかつこよく立ち上がってポーズを決める。

「俺はあなたにセクハラすることが出来るっ！！」

幽霊？

血まみれ？

上等っすよ。こちとら性欲が有り余った男子高校、美人幽霊なんてむしろ望むところ。

それが美女だったなら俺は
神様にだってセクハラしてみせるっ！！

『・・・・・・・・これでも？』

キョーコさんは血文字を変化させ、ご丁寧にも三点リーダーが書かれた文章を浮かび上がらせた。

そして、俺の目の前には血まみれの和服美人が出現する。

絹のように艶やかな黒髪は赤く染まり、瞳は黒く濁っている。身に着けている着物だって、元々の色が赤なのか、血に染まった赤なのかわからないほどの出血量。

思わず俺の心に本能的な恐怖感が生まれた。

当たり前だ、目の前に居るのは真正正銘の幽霊。この家に古くから住まう悪霊。霊能力者ですら対処できない、絶対的な恐怖の権化だが、俺はここで挫折するわけにはいかなかった。

だって俺は男子高校生だから。

エロいことが大好きな、男子高校生だから

「イメージ『二次元萌え化幽霊』！！」

能力を使うときと同じだ。

強いイメージで現実を変える。妄想のフィルターで、目の前にいる血まみれの幽霊を、萌え萌え美少女幽霊に脳内変換するっ！

見る、よく見るんだ、破竜院剣！　目の前に居るのは、着物を濡らして、体のラインをくっきりと浮かび上がらせた美少女だ。その美少女が、俺に挑発的な視線を向けているんだぞ・・・・・・・・つま

唐突っすけど、先輩は本当に凄い人だ。

まず、先輩には苦手な分野というものが一切無い。

すべからく、満遍なく、大体のことは、運動や勉強、料理、芸術などといったものはある程度さらっとこなしてみせる。というか、苦手なものがあったとして、先輩はあっさりと努力を積み重ねて、それを克服することが出来るのだ。

先輩は「ただの器用貧乏の中途半端、凡人の意地みたいなもんだよ。なんでも出来るのはお前の方じゃねーか」と言っていたけれど、俺は先輩の方が数段凄いと思う。なぜなら俺は、ただ才能に頼って『なんでもできる』状態にあるだけで、先輩みたいに努力を積み重ねて得た結果ではないから。重みがまるで違う。

わかりやすい例えをあげると、『最初から何でも出来た天才』が俺で、『努力で何でもできるように鍛え上げた達人』が先輩って訳です。もう、明らかに後者の方が凄いし、好感も持たれるじゃないっすか。

確かに先輩の『何でも出来る』は、俺の才能と違って、平均値より多少上というレベルで、突出したものじゃないっすけど、先輩はそれを『中途半端』と嫌っているけど、逆にそれこそが先輩の凄さの一つでもあるんっすよ。

正直、俺には信じられないっすよ？ だって、先輩が言う『中途半端』のラインは、ちょうど『もつとも多くの人に好かれやすい』レベルなんっすから。

俺みたいにも人並み以上に出来る万能型の人間は、大抵、好かれるというよりも羨まれ、妬まれ、例え好かれたとしても、どちらかというと崇拜に近い感情だったり、ろくなことが起きない。

けど、先輩はまるで違う。先輩の中途半端さに、人々は共感と得て、その中途半端を克服しようと努力する先輩の姿に人々は感心を覚える。そして、いつの間にか、先輩の周りにはたくさんの方が居るんだ。純粹な、善意と友情から集まった仲間たちが。

ああ、そうだ、だから、先輩は凄い。

俺は生まれてこのかた、これほど人に好かれている人間を見たことが無いっすよ。

ぶっちゃけ、リアルに友達百人とか居るらしいし、その全員と関係を良好に保っていて、なおかつ先輩自身も無理せず楽しく人間関係を構築している。

かく言う俺もその一人っす。

いやあ、なんつつーか、もはや凄いを通り越して異常っすね！なんか、将来大勢の人間を纏めて、凄いことをやりそうなイメージがあるというか、昔の『英雄』っていうのは恐らく、先輩みたいな力リスマを持っていた人間のことだったとさえ思う。

さあて、何で俺が現在、ここまで先輩を褒めちぎっているのかと言うとっすね、うん、改めて先輩の凄さを思い知らされたって言うのが大きいっすね、やっぱり。

「んじゃ、集まってくれてありがとな。手元にお菓子とジュースを行き渡ったか？ うっし、問題無いみたいだな。なら、遠慮なく『第三回世界救済会議』を開始するぜ」

場所は、先輩宅の茶の間。

そこに、俺と先輩を除くと合計4人が丸いテーブルを囲って座っている。

一人目は聖名灯先輩。

先輩の相棒にして、この世界に顕現した世界救済を目論む悪魔。

二人目は上田千穂。

俺の幼馴染にして、高校生で既に画家として不動の地位を築いているという異常^{ばけもの}才能者。

三人目は桐生明美。

千穂の親友にして、かつて『ベイビーボマー』という異常能力を暴走させたにも関わらず、正気に戻り心の闇を打ち払った『強い』人間。

ここまででも十分凄いメンバーなんだが、俺は、最後の一人を、この人を自分の都合で呼び出せる先輩を心底尊敬した。

「にやはははー、陽平。なかなか面白いことになってるじゃないか！」

茶髪的美少女は陽気に笑う。

四人目、安田猫子先輩は心底楽しそうに、猫のように笑う。

この笑顔を見たら、彼女を知らない人間は信じられないだろう。

学校の情報を、この町の情報を、いや、時にはこの国の重要機密でさえ笑顔で売り、人の運命を弄ぶ魔女にして情報屋だということに。

「まあな、猫子。少なくとも、お前を退屈させない程度には愉快的な事態になっているぜ」

そんな彼女と気軽に会話できる先輩はやっぱ凄いのと思い、心底尊敬できると思い、そして そんな先輩が、俺は怖かった。

世界を壊す理由（前書き）

誰だって、一度は世界なんてなくなってしまえばいいと思うものです。

世界を壊す理由

「………と言うことでだな、現在、剣がその怖いお姉さんとやらに命を狙われているというわけだ。これで、俺が今まで体験した事実を話してみたんだが、理解できたか、お前ら？」

「にやはっ、りょーかい、了解。一から十まですっかり理解できたよ」

猫のように目を細めて、安田先輩は笑う。

いや、安田先輩だけ笑っている。

当事者を除いて、俺を含めた三人の後輩組は、先輩の異常さにくづつ呆れ果てて何も言えなかった。

「やっぱり、陽平先輩はバカだ、アホだ、というかお人よし過ぎる」

そして、一番復帰が早かった明美が俺と千穂の気持ちを代弁する。

「おいおい、明美。いきなり先輩を罵倒するんじゃないよ、というか、さりげなくこっちにピーナッツを投げるんじゃない、食べ物は大切にしる」

先輩は華麗な手さばきで明美が投げたピーナッツをキャッチし、そのまま口の中へ放り込む。

あー、先輩、悪いっすけど、今回ばかりは俺も先輩のことはバカとしか言いようが無いっすわ。

「陽平先輩、本当に、本当にそんな理由でライターアースって奴と、世界を壊せる力をもった奴と戦おうとしているのですか？」

先輩にベタ惚れしている千穂も、さすがに今回ばかりは先輩の理由を肯定していない。

いや、本来なら肯定なんて出来るわけがないっすよ。

「お前らなあ、俺の話を信じてくれたのは感謝するけどよ、なんでそんなに呆れたような、信じられないものを見るような目をしてんだよ？」

本当にわけがわからない、といった風に先輩は首を傾げた。

そんな先輩に、俺たち後輩は揃ってため息を吐く。

そして、後輩を代表して俺が先輩に言う。

「あのっすね、先輩。先輩は本当に、その、前回の、前回先輩の親友だった奴の頼みだから世界を救おうとしているんっすか？ この世界を破壊するような、冗談みたいな存在と戦おうとしているんっすか？」

正直、否定してもらいたい気持ちで俺は先輩に尋ねた。

「ああ？ 違うぞ、剣。んなわけねえだろ、まったく、俺の話をちゃんと聞いていたのか？」

俺たちの祈りが届いたのか、先輩は俺の疑問を否定する。

ああ、やっぱり、そうっすよね！ そんな、自分が覚えても居ない親友のために、そんな、命を賭けて戦うだなんて

「俺は戦わない。俺はライターアースと戦わずに、徹頭徹尾話し合いで解決するつもりだぜ」

今度こそ、俺たちは本当に言葉を失った。

「にやははははははっ！ さっすが、陽平！ 相変わらず、ぶっ飛んでるね！ さすがは私の相棒っ！」

「はっ、『元』ですがね、猫子さん。今の相棒は私、聖名灯ですから、お忘れなくー」

にやはは、と笑う安田先輩へ、灯先輩は氷点下の笑顔を向けている。

あ、いやいや、お二人とも、なんでそんな会話をしているんっすか？

先輩は、この木島陽平という人は、ただでさえ絶望的な状況だっというのに、自分で残りの希望を削っているようなことをしているんっすよ？

常人だったら、泣き叫んで逃げ出したくなるような状況にいるんっすよ？

「……………先輩、先輩はおかしいっすよ！ なんでそんなに

あつさりと現状を受け入れられているんっすか！？ もつと悩んでもいいんっすよ！？ 泣き言を吐いても、逃げ出しても、誰も先輩を責めないっす！ 『世界』なんて曖昧な馬鹿でかいものを先輩が背負う必要なんてこれっぽっちも無いんっすから！」

気付いたら、俺は先輩に対して怒鳴っていた。

俺は先輩のことを心底尊敬しているし、先輩みたいになりたいと思っている。その思いは今も変わらない。

だから、だからこそ、俺は怒鳴らずには居られなかった。

先輩が『世界』なんて大多数の他人のために命を賭けるのが、他人以下の、覚えても居ない親友の頼みを動機にしているのが許せなかった。

「他人なんかほっとけばいいんっすよ。世界が壊されるなら、この世界から逃げ出す方法を考えればいいじゃないっすか。きっと先輩だったらそれくらいあつさり出来るっすよね？ なら、先輩はそうすべきなんだ。先輩が見ず知らずの他人のために命を賭けるなんて、バカらし過ぎる……バカらし過ぎるんだよ……！」

戸惑いの視線が俺に集まるのがわかる。

特に、明美と千穂が驚いているようだ。無理もないっすね、だって俺、こんなことを叫ぶキャラじゃないっすから。

こんならしくないことを言ったのは多分………ダークカーテンの所為っすよねえ。

「………はあ、キャラ崩壊するまで、何言つてやがるんだよ、剣」

今度は先輩が呆れて、俺に言った。

「お前らが見知らぬ他人なわけねーだろうが、ボケ」

あつさりと、当然のことを言うように先輩は言った。

そこでやっと俺は理解できた。先輩は、俺たちを守るために、俺たちが居る世界を壊さないように命を賭けているのだと。

「先輩……」

俺は何かを言おうとして、結局、何も言えなかった。

この先輩に、バカみたいなお人よしの先輩に、何を言うべきなのか、俺にはまだわからなかったから。

明美も千穂も同じように、何か先輩にかける言葉を搜して、でも見つからずに言いよんでいる。

「……そこまで」

そこに、ぱあんと、拍手の音が響いた。

「あのさあ、後輩たち。これ以上、陽平の行動理由について愚痴愚痴言うのなら、帰ってくれないかな？」

拍手の主は安田先輩。

安田先輩は、普段からは想像もつかないほどの冷たさを含んだ言葉で、俺たちを嗜める。

「陽平は自分で決めたことは覆さない。それは君たちもよくわかっているんじゃないかな？ だったら、黙って陽平の話を聞いて、少しでも陽平の助けになれるように意見を出したほうが有意義ってもんさ。わかるかな？ ここはそういう話し合いをするための場所なんだよ」

苛立っている。

表情こそ笑顔だが、確実に安田先輩は苛立っているだろう。

そして、俺たちはそれがどれほど恐ろしいことを知っている。

安田猫子という人物を怒らせてはいけないということを知っている。

「すいませんです、猫子先輩！ ちょっと、私たち感情的になっていたみたいですー。本当に反省してます、ごめんなさいなのです。ほら、あーちゃんも謝って！」

「……………ごめんなさい」

危機察知に長けた千穂が素早く謝り、それに続いてあの明美ですら謝った。

つまり、それだけ安田猫子という人物はやばいっす。

やばいつすけど、でも、俺は………

「うん、千穂ちゃんと明美ちゃんの良い子だね。きちんと人に謝れるのは素晴らしいことさ！」

安田先輩は、二人を気さくな笑みで許したあと、ぐるん、と眼球だけこちらを向けた。

「君は良い子かい？ 破竜院剣くん？」

ただ、それだけのことで俺の体が震えはじめる。

がちがちと、奥歯が噛みあわない。

悲鳴すら出ない。

他者を圧倒する才能を持っていようが、俺は、安田先輩にはまるで敵う気がなかった。

なぜなら、安田先輩に対しては才能も、強さも、そして力さえも何の役に立たないのだから。

怖い。

ああ、怖いっすよ、マジで！ 正直、今すぐにでも土下座して謝りたいくらいっす。むしろ、なんで自分が謝らないのか不思議で仕方ないっす。

安田先輩を敵に回したら最後、彼女の気が済むまで掌で踊らされ続けて、最終的には一片の希望も無い絶望に落とされるのに、なんで、俺は謝らないんっすかねえ？

……ああ、多分、きっとそれは

「ストップだ、猫子。俺の後輩を脅しすぎんなよ」

「にやは、ごめんごめん。ついつい君の後輩たちが怯える姿が可愛くてね」

先輩の一言で、あっさりと安田先輩は機嫌を直した。

多分、安田先輩にとっては俺なんかが粹がっているという事実より、例え注意であったとしても、先輩に声をかけてもらったという事実の方が上位になっているんだろう。

どうして安田先輩が、先輩に対してそこまでの好意を持っているのはわからないけれど、どうやら、俺が助かったことだけは確かみ

たいつす。

「大体な、賛成意見ばかりの会議なんぞ、やる意義ねーしな。だからほら、あんまり気にすんじゃねーぞ、剣」

「はは、りょーかいつす、先輩」

先輩が声をかけてくれたおかげで、やっと緊張が解ける。

気付くと、俺は自分の爪が食い込むほどに、手を握り締めていた。

「うし、んじゃまずは剣の安全確保についてだな」

まず、俺は剣の現状について、卓を囲む五人に話していく。

「剣の現在、謎の黒服女から命を狙われている。恐らくは、ウィルスを開発した研究機関がサンプルほしさに派遣したエージェントと見ていいだろう。それも、かなり凄腕だと予想しているが、実際はどうなんだ？ 猫子」

「はいはい、実にその通り。陽平の言うとおり、剣くんに派遣されたのは、あの研究機関のエージェント。しかも、聞いて驚け、あの名高い『ネームレス』が出張ってきているらしいのさ」

『ネームレス』というあだ名を聞いて、俺は思わず眉をひそめた。おいおい、いくらなんでも表側に住んでいる奴に『ネームレス』を派遣するんじゃねえよ、その研究機関。ったく、どれだけサンプルが欲しいんだか。

「あの一、先輩？ そのネームレスっていうのが、あのお姉さんの二つ名なんっすか？ なんか、先輩の反応から凄くやばそうな相手だっことはわかったんっすけど」

剣が引きつった笑顔で俺に尋ねてくる。

俺は剣から視線を逸らし、ネームレスについて説明する。

「…………ネームレス、その名の通り、固有の名前を持たないエージェントだ。名前は任務に応じて使い捨て、自分自身をまったく省みずに任務達成のためだけに存在しているような奴だよ。そいつは任務を達成するまで絶対に諦めることはないし、今までにそ

いつが自分自身に任務を中断したことは無い。そして、ネームレスは上から依頼された任務は全て、成功させてきた化け物だ」

「……つまり、俺、絶体絶命っていうことっすか？」

頬を引きつらせ、額に冷や汗を掻いている剣へ、俺はゆっくりと首を横に振った。

「ネームレスが任務を引き受けたっていうことは、その任務が達成されたのと同義なんだよ。だからな、お前はネームレスに狙われた時点で研究所のサンプルになったようなもんだぜ」

俺の言葉に、場の空気がざわめく。

「よ、陽平先輩！ どうにかならないのですか！？ いくらスケベでエロスで、いつも私に面倒なトラブルを押し付けてくる、ぶっちゃけ半殺しになったぐらいだったら笑って眺めていられる剣くんでも、一応私の幼馴染なんです！ さすがにホルマリン漬けはどうかと！」

「そうだぞ、陽平先輩、いや、陽平。ちーちゃんがそう言っているんだから、なんとかしろよ。まあ、ぶっちゃけ剣が居なくなれば私が幼馴染のポジションをいただけるから、私自身はまったくかわないんだけど。というか、ちーちゃんを困らせる諸悪が消えてくれるなら万々歳だけど」

「落ち着け、お前ら！ かえって剣にダメージを与えているぞ！？ そして明美は先輩を呼び捨てにするな！」

俺が指差した先には、いつもの輝かんばかりの笑顔はどこへやら、暗い表情で膝を抱えている剣の姿があった。

「ははっ、そーっすよね。どうせ、俺なんか消えたほうがいいような人間っすしー、ぶっちゃけ、このまま生きててもなんか良いことありそうにもないっすしい」

そして、なにやら黒いカーテンみたいなものが出現し、剣を覆う。

「ふむふむ、なるほど。これが剣さんの能力、『ダークカーテン』ですかー。能力として攻撃力はあまり無いにしろ、そのカーテンは無尽蔵に出現し、攻撃遮断、対象捕獲に使えるそうですねー」

「ええい、解説している場合かよ、灯。このままじゃ、最悪、剣が暴走するかもしれねえんだぞ！　というわけで、千穂ちゃん！　なんでもいいから剣を褒めろ！　通常の状態にまでテンションを戻すんだ！」

「了解です、陽平先輩！」

いきいきとした表情で頷く千穂ちゃん。

よし、千穂ちゃんから褒められれば、すぐに剣もテンションが上がってくるだろう。

理由はまあ、プライベートに関わることなんだが、一言で言うと、男は単純ってことだ。

「元気出して、剣くん！　私はちゃんとわかっているよ、剣くんは消えたほうがいい人間なんかじゃないってことを！」

千穂ちゃんの言葉に、剣はぴくりと反応する。

「剣くんはスケベだけど、女の子が嫌がることは絶対しないし、女の子が泣いていると、すぐに駆けつけて慰めていてあげたよね？」
「そして何人も女の子が剣に好意を持って、修羅場になったけどね」

「スポーツも勉強も得意で、クラスの皆から頼られていたよね？」

「そしてクラス全員に、才能がある人間とそうじゃない人間の格の違いを見せつけた、っと。剣の所為で挫折した人間は数知れず！」

「幼馴染の私が困ったときには、よく助けてくれたよね？」

「その所為でかえってちーちゃんが困ったことになったけどな？　知ってるだろ？　剣の幼馴染ってだけで、ちーちゃんがクラス中の女子からはぶられて過ごしてきたってことを。まったく、小さな親切大きなお世話ってこういうことをいうんだよ」

あれ？　おかしいな？　千穂ちゃんの言葉の後に、余計なものがくつついてるんだが。主に剣が一番ダメージを喰らう形で。

「・・・・・・・・・・・・・・・・死のう」

「けえええええん！？」

いつに無く暗い表情で、黒いカーテンを纏った剣がふらふらと席

を立つ。

「待て、落ち着け！ 早まるな！」

「離してください、先輩。俺なんかは生まれてきちゃいけない人間だったんです。便器に顔を突っ込んで溺死するのがお似合いなんです」

「やばい、語尾の「っす」を忘れるぐらいテンションが下がってやがる!？」

ゾンビのような足取りでトイレに向かう剣を、俺は羽交い絞めにして拘束した。

くそ、いつもの剣だったらここまで打たれ弱くねーんだが、やっぱりウイルスに感染するとどうも精神的に不安定になるみたいだな
「というか、明美！ お前は何を余計な事を言ってただよ!？」
罪悪感の欠片も無い顔で明美は答える。

「いや、ちーちゃんが剣を褒めているのがむかついたから」

「我慢しろって！ お前は人の心を傷つけることに関しては剣以上の天才なんだから！」

「……………ふん」

なぜか頬を赤く染めてそっぽ向く明美。

いや、褒めてないぞ？ そこは照れるところじゃねーぞ？

「ていうか、会話の方向が段々ずれてきたぞ、こんちくしょう！」

「あはははー、今更、何を言っているんですかー、陽平さん。私はこのメンバーが揃った時点で、こうなることを予期していましたよー」

俺の隣で、灯はのほほんと茶を啜っている。

人が事態收拾に苦労してるときにためえは……………

「そんな怒り狂った瞳で見ないで欲しいですよー、ちょっとぞくぞくしちやいますから。それと、一応、こういう事態を予期していたのですから、対策ぐらいは練っていますよう」

灯はそう言うと、ぱちんつ、と軽快に指を鳴らした。

「かもーんですよー、キョーコさん！」

その瞬間、気のせいかもしれないが、空気がうつすらと重みを持ったような、そんなイメージを抱いた。

「とりあえず、皆さん、生気が有り余っているようなので、ちょっと抜いてもらうのですよー」

「あ？ お前、一体何を言ってる」

俺が灯に尋ねようとすると、急に押さえつけていた剣の力が抜ける。

どうやら、何かとてつもなく怖いものを見てしまったようで、青い顔で気絶していた。

異能を行使する本人が気絶すると、能力も解除されるらしく、剣を覆っていた黒いカーテンはいつの間にか消えていた。

俺は首を傾げながら、とりあえず剣を畳に寝かせる。

「きゃああああああ！？」

と同時に、千穂ちゃんと明美から悲鳴が上がった。

「なんだ！？ 何が起こってやがる！？」

「まー、靈感が無い陽平さんにはわからないでしょうけど、今、キョーコさんが血気盛んな後輩さんたちのテンションを下げているところなんですよー」

のほほんと言う灯だったが、これはテンションを下げるというより、阿鼻叫喚といった方が正しいだろう。

「くっ、逃げて、あーちゃん！ ここは私が喰い止めるっ！」

「だ、ダメだよ、ちーちゃん。私がちーちゃんを置いて逃げられるわけないじゃん！」

「いいから、早く逃げ・・・・・・・・・・あ、あああああああああああああ、くふっ」

「ちーちゃん？ ねえ、ちーちゃん？ ちーちゃああああああああん！！」

どうやら、キョーコさんが気合を入れて後輩たちを脅しているらしいのだが、靈感が無い俺から見たら、後輩たちが寸劇をやっているようにしか見えないのだが。

「にやは、陽平の家に亡霊が憑いているの知ってたけど、実際、この目で確認できないのが残念だよ。せっかく、面白そうな事態になっっているのに」

同じく、後輩たちの寸劇を眺めていた猫子はボツリと眩きを漏らす。

「ああ、そっぴゃ、猫子も靈感無いんだっけか？」

「にやははん、そっぴゃ。陽平とお揃いでねー」

猫子が無邪気な笑みを浮かべて、俺の肩にもたれかかって来る。

俺はそれをため息混じりに受け入れた。

ちなみに灯は露骨に舌打ちしていた。

「っーかな、猫子。キョーコさんに頼らなくても、お前がもう一度後輩たちに注意してやりゃーよかつたんじゃないの？」

「やだなあ、陽平。陽平が言ったんじゃないか、あまり君の後輩を脅さないようにっぴゃ。私はそれを忠実に守っているだけだよ？」

「……お前は相変わらず、変なところで真面目だよなあ、猫子」

ふと、昔を思い出す。

俺がまだどうしようも無い、ガキで、荒れてて、この世界を変えてやろうとしていたあの時も、猫子はこんな風に俺の隣に居続けたくれた。

それがどれだけ俺にとって嬉しかったか、今更ながら口にしようと思ひ、言ひ留まる。

「ん？ どーしたのさ、陽平」

「いいや、ちよっぴゃ後輩たちの寸劇に見入っていたんだよ」

千穂ちゃんと明美が、力を合わせて何かに立ち向かっていく姿を眺めながら、俺はごまかした。

礼を言っぴゃのは今度にしよう。

まだ中途半端な俺じゃ、こんな台詞を猫子に言っぴゃやる資格は無いから。

「あー、というわけで、お前ら、少しは落ち着いたか？」

後輩三人はそのそと手を上げて答える。

「一応な、俺には剣の奴をどうにかできるツテがあるから、お前らは心配するな。それに、俺の家の周りに灯が結界を張ってくれたから、ある一定以上離れなきゃ、そいつが剣を見つけることはできねーよ」

「……………わー、さすが陽平先輩なんです……………」

「……………別にそれくらい、陽平先輩なら出来て当然だろ？調子に乗るなよ、陽平先輩……………」

「……………なんで、明美が偉そうにしてるんだが。先輩、超感謝っすよ……………」

机に突っ伏している後輩三人は、明らかに疲れ果てたような口調だった。

キョーコさん、よつぼど気合入れてたんだなあ。

霊感はないけど、後で、キョーコさんルームにお供え物でも置いておくか。

「んじゃまあ、これで剣の問題は終わりにしておいて、次が本題だな」

剣のことについては、会議というよりも、報告みたいなものであり、これから話すことこそ、俺がこいつらを集めた本当の理由。

話し合わなければいけない重大事項なんだ。

「お前らに話したとおり、今、この世界はライターアースという異能力者によって危機に晒されている。そのライターアースっていうのは、史上最強にして最悪の能力を持っていて、正直、俺じゃ何をどうしようが勝てる可能性が見つからない。いや、文字通り『世界』全てを相手にしたって、破壊せしめてみせるだろうお。むしろ、それが出来るからこそ灯っている悪魔が俺の所に着たんだ。そして、現に前回の世界はライターアースによって破壊されている」

卓を囲む仲間の姿を見渡し、挫けそうになる心を叩き直しながら

俺は言葉を続ける。

「そのライターアースはどうか、もうその力の使い方を熟知しているらしく。悪魔である灯の能力さえ制限できるほどだ……。なのに、ライターアースはまだ目立った行動をとっていない。まあ、水面下で着々と世界を壊すための準備を始めていると言われちゃそれまでだよ。それでも、スプーン一杯程度には希望が欲しいからな、こういう仮説を俺は提唱してみる」

すう、と息を吸い、肺の中に空気を居れ、声がぶれないように強く言葉にした。

「ライターアースの目的は世界を壊すことじゃなくて、もっと別の何かだ」

「……陽平さん、それにはちょっと反論させてもらいますよー」

予想していた通り、灯は先ほどまでのほほんとした雰囲気は消し、悪魔としての冷徹さをもって俺に異論を唱える。

「いいですか、陽平さん？ 確かに、現状をそう言う風に考えることも可能かもしれませんが。もしかしたら、ライターアースの目的は本当に世界を壊すことではないのかもしれませんが。けど、それが一体、どうしたというのですか？」

冷たく、俺を射抜くような視線。

普段の灯からは考えられないほどの迫力、威圧感に、この場に居るほとんどの人間は緊張を強いられていた。

「陽平さん、忘れてもらっては困りますけどね、ライターアースは前回、世界を滅ぼしてしまったのですよ。物理的に、この惑星を粉々に破碎して。つまり、『世界を壊せるほどの心の闇を持った人間』なんですよ？ 正直、それだけの心の闇を背負った人間の目的なんて、常人に理解できるとは思えません。話し合いで解決できるとは思えません」

灯とこういう会話をするのは一体、何度目になるだろうか？

俺はため息混じりに、俺の信念を貫くために言葉を紡ぐ

「ちょっと待って欲しいのです」

その直前、別の言葉によって封殺された。

「灯先輩、あ、あのですねー、ちょっとだけそれに反論です」

言葉を発したのは、さっきまで机に突っ伏していたはずの千穂ちゃん。
やん。

って、千穂ちゃん！？ あ、いや、これはもちろん会議だから、意見はどんどん言ってもらっていいんだが、まさかこの状態の灯に千穂ちゃんが反論するとは思わなかった。

そんな俺の驚愕はよそに、千穂ちゃんは言葉を続ける。

「灯先輩はその、ライターアースって人のことをどれだけ知っているんですか？ 能力とか、世界を破壊したとかじゃなくて、性格とかどんな暮らしをしていた、とか」

「千穂さん、あいにく異能力者に関しての記憶は制限されています。ですので、その質問には『知らない』と回答しましょう」

淡々と機械的に答える灯に対し、千穂ちゃんは瞳に強い意思の光を灯して言った。

「なら、灯先輩に教えてあげます。私たち人間は、ライターアースとかいう異能力者じゃなくても、世界を壊せるぐらいの心の闇を背負って無くて、人生で一度くらいは本当に『世界を壊したくなる時』っていうのがあるのです」

強い千穂ちゃんの言葉に、俺は拳を強く握る。

「努力が報われなかった時、理不尽な目にあった時、大切な人を失った時、人は思わず世界を壊したくなってしまふのですよ」

「……………なぜですか？ 出来もしないし、飯に出来たとしても自分によって何の利益もないでしょう？」

眉をひそめる灯に、千穂ちゃんは答えた。

「理由なんてないですよ。世界を壊したい、世界なんて終わってしまっただけ欲しい、とつい思ってしまうのにな、きっと理由なんて

無いのです」

灯はしばらく動作が止まったロボットのよう硬直していたが、やがて、何か納得したように頷く。

「ふむ、なるほど、それは一理ありますね……では、悪魔である私から、人間である皆さんに質問があります」

そして、静かに席を立つて、灯は俺たちを見渡して尋ねてくる。

「皆さんが世界を壊したいと思うときはどんなときですか？」

「……灯、それはこの議題に対して必要な問いなのか？」

俺は胸の奥に、苦い痛みを感じつつ、灯に問い返した。

「ええ、とても、とても必要なことですよ、陽平さん。この質問はきつと、悪魔である私にも、そして人間である貴方たち

にとつても重要な質問です」

灯はそう、断言する。

俺は、灯がなぜ、そう言ったのかはわからない。

しかし、俺は知っているのだ。

灯は、この悪魔は正しいことしか言わないのだと。それがどんなに残酷に聞こえても、この悪魔の言葉は本当に正しい。

だから俺は、この苦味に耐えて答える。

「何もかもがどうでもよくなったときだ、灯。少なくとも俺は過去に一回、何もかもがどうでもよくなって世界を壊しそうになったときがある」

俺の言葉に、猫子を除く全員が困惑する。

特に、後輩たちは目に見えて困惑していた。

「色々聞きたいことはあると思うが、これに関しては本当に何も言いたくないんだ。悪いが、俺の話についてはまた今度してくれ」俺は誰かが何かを言う前に、拒絶の言葉を吐く。

その言葉を、後輩たちは、灯は、黙ってあっさりと受け入れた。

灯と後輩たちは特に追及することも無く、次に剣が拳手して質問に答える。

「んじゃ、次は俺っすね。俺は周りの人間と自分が違うってこと

に気付いたときつすかねえ。正直、割とショックだったんつすよ、周りの人間以上に何かをこなせるって。それはつまり、周りに人間とは『違う』ってことつすからね」

件に続くように、千穂ちゃんと明美も挙手して答えていった。

「私はそうですね、一時期、絵が思うように描けなくなったときなのです。あの時は本当に、何もかも見るもの全てが『描けない』という事実を突きつけられるような、そんな気分になりましたから」

「……私は、昔、友達を傷つけたときだよ。そのときは本当に、なにもかもが憎くて仕方なかったんだ」

俺も含めて、四人の人間が悪魔に向かって告白をした。

世界を壊したいと思ってしまうほどの、過去の出来事を。

そして、灯は俺たちの言葉を聞き終わると、何度も頷いて呟く。

「なるほど、ああ、やつと理解できました。人間というのは『逃げたい』と思う感情を、何か世界のような大きなものの所為にしてぶつきたいのですね。それが、世界を壊したいと思ってしまう原因」

ああ、まったく、この悪魔はなんて堂々と見透かしやがるんだか。凶星を突かれすぎているので、俺たちは何も言えずに灯の言葉を聞き続けるしかない。

「なら、貴方たち人間は自覚すべきなんです。『逃げたい』と思う気持ちがどれだけ恐ろしいのかを。その逃避願望が、どれだけ大切なものでもないがしろにしてしまうことを……もしかしたら、貴方たちがライターアースのように世界を壊してしまうことになってしまうのですから」

やつと、俺はこの悪魔が何を言いたいのかを理解した。

この悪魔は俺たちに『逃げるな』と言いたいのだ。

ライターアースと呼ばれる、世界破壊者と関わるのならば、それほど心の闇を持つ者に近づく気なら、自分自身から逃げているように話にならないと。偉そうに説教をしてやがっているのだ。

「上等だ」

「上等なのです」

「上等だよ」

俺と千穂ちゃんと明美の声が重なる。

『誰が逃げるか』

俺たちの答えに、灯はどこか微笑ましそうに笑った。

「……俺は」

だが、剣は何も言えずに黙っている。

ダークカーテンに感染している剣にはきつと、灯の言葉はあまりにも芯を突いていたのだろう。

しょうがねえなあ、俺の後輩は。

俺は何かを躊躇うように言い澀む剣の背中を押そうと思い……。やめた。これはきつと、俺が手を貸してはいけないことだ。手を貸すのならせめて、剣が一人で自分の闇と向かい合ったときにしよう。

「にやはっ、にやはははははははっ！ 言うねえ、みんな！ なかなか熱血な展開で喜ばしい限りさ」

そんな時、一人だけ灯の質問に答えなかった猫子はけらけらと笑う。

おかしくて仕方ないように、けたけたと笑う。

「何がおかしくて貴方が笑っているのかはわからないのですが、貴方には無いのですか？ 世界を壊したいと思った時が」

一転、冷たい瞳で尋ねる灯に、猫子は嘲るように答えた。

「あるよ、数え切れないほどにね」

猫子の瞳は暗く澀んでいる。

底が、見えないほどに。

「でも、強いて言えばそうだね」

猫子はゆっくりと俺の方を向き、おかしいように、悲しいように笑いながら言う。

「恋に破れたときかな？」

その言葉で、俺はやっと自分がどれだけ最低だったのかを理解した。

世界を壊す理由（後書き）

2010/3/9 誤字訂正しました

たまには後ろも向こう

そんなわけで、なんやかんやのうちに『第三回世界救済会議』は終わった。

とりあえずの結論としては、剣の保護を現状の最優先にして、後はライターアースの目的を探っていく、という形に落ち着き、千穂ちゃんや明美は表立って関わらないように釘を刺し、学校での噂話や人間観察に勤めてもらうたのである。

ちなみに俺は、千穂ちゃんや明美がこの件に関わるのは正直反対だったのだが、どこからか会議の情報が漏れた所為で、関係者として招かざるを得なくなってしまったのだ。

まあ、恐らく情報を漏らしたのは猫子の奴だと思うが、あいつが何を思って情報を漏らしたのかはわからない。

というか、今思えば、俺は相棒だった頃から、あいつの気持ちというものがわからなかったのかもしれない。だから、結果として猫子を傷つけていたんだろう。

ほんと、俺はどうしようもないな。

あいつのためを思って行動したことが、あいつと　　と思っ
て行動したことが、裏目に出て、その結果がこれだ。最悪と言っ
てもいい。

けど、それでも俺は立ち止まるわけにはいけないんだ。

何があつたとしても。

「おう？　どーしたんっすか、先輩。そんなところでたそがれて」

「あー、剣か」

俺は椅子の背もたれから起き上がり、剣に片手を挙げて応える。

誰にも見つかりたくないのために、家にこっそりと仕掛けた回転扉の向こう側にある超プライベートルームでくつろいでいたんだが、そこはさすが天才。まさか、この空間まで探して当てるとは思わなかったぜ。

「よくここを見つけれたな」

「先輩の気配を追って行ったら、偶然と仕掛けのある壁に気付いただけっすよ」

いや、普通に気配とか辿るなよ。漫画じゃあるまいし。

「しっかし、なんかここかつこいい部屋っすねー！　こう、男の隠れ家的な内装とか、さりげなく充実している家具とかが最高っすよ！」

剣はしげしげとこの部屋を見回し、目を輝かせている。

「おお、わかってくれるか、このロマンを！　前に猫子の奴にも見せたんだけどよ、反応がいまいちというか、『男の子ってこういうのが好きだよねえ』みたいな顔されてさあ」

「女子ってそうっすよねー。男のロマンをわかつちゃくれないっすよねー」

このプライベートルームには、俺が集めた模型や銃器の類、ナイフや無駄に尖ったデザインがしてある家具などで構成されていて、ぶっちゃけ、俺の趣味の塊みたいなものだ。誰だって好きな物に囲まれて生活したいって思うときだがあるだろ？　俺はひそかにそのささやかな夢を実現させていたのさ。

「あ、そうそう、女子といえばなんっすけどねー、先輩」

「おう、なんだよ、後輩」

剣は軽い口調で、なんでもないように尋ねてきた。

「結局っすね、先輩は誰が好きなんっすか？」

「……………うん、なるほどなあ。だから、俺が一人になるときを見計らって近づいてきたわけかよ、剣」

「一応確認しておくぞ。それは友達として、とかじゃなく、紛れもなく恋人として誰を愛するか？　ということだよな」

「さっすが、先輩。話が早くていいっすね」

剣は学校中の女子がとろけてしまいそうな、フェロモンが可視化していそうな笑みを俺に向けて話を続ける。

「先輩って、色んな人間と友達っすよね？　しかも、その誰とも

仲が良い。例えば、灯先輩とか明美とか……千穂とか」

「おいおい、俺はすっかり男子とも付き合いがあるんだが。どうしてそこで女子の名前ばかり列挙するんだよ」

「これが恋の話だからっすよ、先輩」

剣は恥ずかしげも無く、実に恥ずかしい台詞を笑顔で言いきつた。いや、どーでもいいんだがよ、どうしてそこに猫子の名前をリストしてないんだろうな？

「はつきり言つて、誰が見てもわかるっすよ？ 灯先輩は陽平先輩のことに好意を持っているし、明美だって先輩には千穂の次に心を開いている。そして、千穂にいたっては、見ればわかるじゃないか。あいつが先輩の事を好きなことぐらい」

「……一応訊いておくが、どうしてその中には猫子が入ってないんだ？」

剣は目を細めて、俺を睨むようにして答える。

「安田先輩はもう自分自身で言つてたっすから、『恋に破れた』つて。俺は敗北者をリストできるほど、先輩の競争率は甘くないと思つてるんっす」

おおう、この後輩は猫子が見てないところだとなかなか言っじゃないか。でも、気をつけとけよ。俺の経験上、あいつはなぜかこういう陰口みたいなことはすっかり聞いているような奴だから。

「だから安田先輩のことは除外しておいて、今はこの三人の話っす」

今までに無く真剣な表情で、剣は俺の瞳を見据えてくる。

「いや、ぶっちゃけ灯先輩と明美の話はどーでもいいっす。正直、先輩を観察していれば、大体わかったっすから。問題は、千穂のことっすよ」

「へえ、知つたような口を利くじゃねえか」

「これでも俺は天才っすから」

嫌味やおごりでもなく、ただ、事実として剣は断言した。

そっ、真の天才という奴は、自分自身が謙遜できないほど、謙遜

してしまつたら他の全てを否定しつくしてしまうほど理不尽なものなのである。

だから、剣は断言しなければいけないのだろう。
自分自身が天才だと。

「灯先輩に対しては、可愛いマススコット感覚で接していて、でも完全には信用しないようにしている。明美に対しては、ほとんど妹や身内に対するものと似通っているっすね。恐らく先輩は、この二人を恋愛対象とは見てないんじゃないっすか？」

「くくく、さあな」

俺が肩を竦めると、剣の目つきが険しさを増す。

「…………とりあえず肯定とみなして話を進めるっすよ。それでっすね、灯先輩と明美に関しては観察していてわかつたんっすけど。それが千穂に代わると、まったく判断がつかないんっすよ」

「ふうん、つまりお前は、俺が千穂と関わるときだけ気合を入れて『仮面』でも被っているって思ってるのか？」

「そうっすね。この俺ですら見破れない、とっておきの『仮面』を被っているんじゃないかと推測してるっすよ」

ほうほう、なるほどなあ。

俺は剣が真剣な目つきでいるというのに、ついつい口元がにやけてしまった。

「何がおかしいんっすか？」

当然、剣はそれを見逃さず、言及してくる。

「正直っすね、先輩。俺は先輩が千穂の気持ちに気付いた上で、あんな、生殺しみたいな、からかい半分みたいな態度をとっているのが気に喰わないんっすよ。この際だから、はっきり言うっすけどね、千穂は紛れも無く先輩のことが好きっすよ？ あいつの幼馴染である俺が言うんだから間違いないっす」

剣は俺の肩を強く掴み、握りつぶさんばかりの力を込めて言った。
「だから先輩。もしも、先輩が千穂の気持ちに気付いて、それを弄ぶような態度をとっているっていうのなら
俺は例え先輩

でも容赦しねえ」

そう言う剣の姿は、いつものへらへらとした態度は微塵も感じられず、まさしく鬼気迫るものがあつた。

ああ、だからこそ俺はそれを嘲笑うように言葉を返してやる。

「だから？」

目を見開く剣の手に、俺の肩を掴んでいる手を掴み返し、強く握り締めた。

「お前が容赦しないから、なんなんだよ？」

「つつ！」

剣が思わず顔をしかめるほどに、俺は強く力を込めた。

「お前はあくまで『ただの幼馴染』だろうが。しかも、千穂ちゃんだってもう高校生だ、何も知らないガキじゃねえ。その千穂ちゃんと俺がどういふ関係にあるのかなんて、当事者同士の問題だ。部外者が偉そうに首を突っ込んでくるんじゃねえよ」

「……先輩、それ、本気で言ってるのかよ？」

剣の語尾が消え、代わりに俺への敵意が湧き上がっている。

はは、いいねえ、剣。なかなかいい塩梅に頭に血が昇ってきてるじゃねーか。

だがよ、まだ足りねえな。

この際だから、いつそのこと全部を吹っ切らせてやろう。

「つーかな、剣。お前は前提が間違ってるんだよ。俺はな、別に千穂と話すときに『仮面』なんか被っちゃいねーよ。お前だって、薄々わかってんだろうが。なんで千穂と俺が話しているときだけ、お前の人間観察が鈍るのか、それはな」

そのために俺は挑発する。

何かと理由をつけて目を逸らしがちな後輩の目の前へ突きつけてやる。

「お前が千穂ちゃんのことを誰よりも好きだからだろうが」

えー、どうも、上田千穂なのです。

陽平先輩の家に行けて、おまけに陽平先輩に頼ってもらって、今日はとっても良い日だと思っていたのですが、最後に思わぬ落とし穴があったのですよ。

「にやは、それでねー、千穂ちゃん。陽平の奴ってば、意外と口マンチストなところがあるんだよ」

「あははは、そうなのですかー」

「まー、男はみんな口マンチストだけど、あいつはほんと飛び切りでさあ」

一見、和やかに会話をしているように見えるかもしれませんが、ええ、実は私、内心凄くビクビクしているのです。

だって、今、私が会話している相手は、あの安田猫子先輩なのですから。

元陽平先輩の相棒という噂もあり、そして、何より私の学校では『魔女』のあだ名で恐れられている人なのです。というか、こんな今は陽気に話しているんですけど、私は陽平先輩の家で感じたあのプレッシャーを忘れられません。

というわけで私は現在、内心ガクブル状態で猫子先輩と談笑しているのですよ。ちなみにあーちゃんもさっきから私の腕にしがみついて、無言して震えています。

「昔、陽平は二丁拳銃に憧れたときがあっけね。対して射撃がうまくなくいけに、銃の反動に耐えてひたすら練習していたりしてたなあ」

「あれえ？ 猫子先輩、さりげなく陽平先輩の重大な秘密とか話しちゃってませんか？」

なんで陽平先輩の昔話に拳銃が出てくるのでしょうか？

そこら辺を突っ込んで聞きたいところなのですが、猫子先輩は意味深に笑ってごまかすだけ。

うん、色んな意味で怖くて聞けないのです。

ああもう、どうしてこんなことになったのですかねー？ 本当だったら今頃、夕暮れに染まるこの田舎道をあーちゃんと一緒に帰っていたのに、突然、猫子先輩ってば絡ん来たからなあ。

とりあえず、私は怯えるあーちゃんの頭を撫でて『萌え』によるMP回復に努めておくですよ。

そんな私たちの様子を見て、猫子先輩は口元を抑えて微笑みます。

「ふふふふ、そんなに私が怖い？」

「い、いえいえ、そんなことは多分、きっと、もしかしたら無いので」

「正直、超怖い」

今まで黙っていたあーちゃんが、なぜかその時に限って即答しました。

んもうっ、あーちゃんつてば空気読んで！？ でも、そんな空気読めないあーちゃんも、私好きだよ。

「にや、にやははははは！ まさか、そこまでストレートに言われるとは思っていなかったなあ」

失礼なことを言っただけなのに、なぜか猫子先輩は上機嫌なようです。

くっくっく、と口元を押さえて体を丸の字によじっているのですが、そこまで面白いことしたのですか、私たち？

「いやー、素晴らしいね、君たちは。そう言うところが、私は気に入っている。どこぞの万能天才君のように、陰口を叩かないところだね」

万能天才君……あー、剣君のことですか。確かに彼はちよつと、暗いところがあるというか、意外と小心者みたいところがあるから仕方ないですよ。

軽く涙が浮かんだ目じりを拭い、猫子先輩は気まぐれな猫を連想させる笑顔で私の頭に、軽く手を置きました。

「そして、陽平に対して真っ直ぐな気持ちで想っているところも、

気に入っているよ、千穂ちゃん」

「ぬわっ!？」

な、なぜそれをつ!？ くっ、さすが『魔女』とあだ名されし情報通の猫子先輩！ 私の秘めた恋心ですら看破しているとは！

「いや、ちーちゃんの態度を見ていたら、誰でもわかるって」

「今明かされる衝撃の事実!？」

しよ、シヨックなのですよー。

まさか、私の恋心が周囲にバレバレだったなんて。うう、ひっそりと愛を育む学校生活を夢見ていたのに。

「……………本当に君は面白いね、千穂ちゃん」

「はい？」

なでなでと、優しい笑顔で猫子先輩は私の頭を撫でていました。

「陽平が気に入るもの納得だね」

「んわっ!？ そ、そんなことは、あつて欲しいと思っていますけど、いや、確かに気に入っているとは言われたときはあるのですが、それでも……………」

私の脳裏をよぎるのは、あの日の出来事。

今日みたいな夕暮れの時。

赤く染まった教室。

二つの影。

そして

「千穂ちゃん？ 一体、どうしたのかな？」

「い、いえっ！ なんでもないですよ！」

私は慌ててあの日のイメージを頭から振り払いました。

ダメなのですよ、こんなときに、あの日のことを思い出したら。

思い出すならもっと、しかるべき時にしないと。

「ふうん、どうやら千穂ちゃんと陽平の間には、私も知らないイベントがあつたみたいだね」

「見抜かれたっ!？」

にやにやと笑う猫子先輩。

もう嫌なのですよ、なんでこんなに人の心を見抜けるのですか？
まあ、私がわかりやすい性格をしているといったら、それまでのですけど。

「にやははは、そう拗ねない、拗ねない」

けらけらと猫子先輩は陽気に笑うと、私の顔を覗き込んで言いました。

「お詫びに………いや、これはライバルとして、正々堂々戦うために、良いことを教えてあげよう」

「良いこと、ですか？」

首を傾げる私に、猫子先輩は、にやはと笑って囁きます。

「陽平が、誰よりも心から敬愛する女性のことを、ね」

そのとき、私は一体どんな表情をしていたのでしょうか？

ただ、猫子先輩はなぜか満足そうに笑みを浮かべると、その名前を口にしました。

「灰霧^{はいぎり} 渡里^{わたり}。それが、陽平の師匠にして、陽平がこの世界で誰よりも敬愛する、私たちの宿敵さ」

夕暮れに照らされた田舎道は、あの日の事を嫌でも連想させました。

とりあえず殴り合おう（前書き）

話し合いで解決できなければ殴り合いに発展します。
けど、殴りあわなければ解決できないこともあるのです。

とりあえず殴り合おう

「・・・・・・・・ここにいいか」

俺が住む田舎町には当然、目のつかない場所なんかはどこにも存在する。

例えば、こんな男二人が思う存分、殴り合える程度の広さがある野原などは、割と探せば存在するのだ。

「一応、灯には特別処置として、結界をお前中心にして発動するように変更させたから、ネームレスに見つかる心配はねーぞ」

「ああ、そりやどうもっす」

そっけなく答える剣。

その顔からは、いつものふざけた雰囲気は無く、なにか張り詰めたものが剣から漂ってきている。

「おいおい、これから正々堂々、喧嘩するってーのに、何、そんなに固くなっているんだよ？ そんなんじゃ、俺の拳で一発だぜ？」

「先輩こそ、どうして喧嘩の前なのに、そんなに気楽なんっすかね？」

剣は俺を非難するように視線を浴びせた。

はっ、いやいや、後輩君。喧嘩の前だからこそ、リラックスしていなければいけねーんだぜ？

「くっくく、剣。いいか？ 喧嘩が始まる前に一つだけ教えておいてやるがよ。俺に喧嘩で勝ったって、別に千穂ちゃんがお前の事を見てくれるようになるわけじゃねーんだからな。そこんこは勘違いするなよ」

「はっ、愚問っすね。何年俺が千穂の隣に居ると思っているんっすか？ 俺が先輩と喧嘩するのは、ただ単に」

剣は今まで向けてきたことが無いような、明確な敵意と憎悪の視線を俺に向ける。

「先輩をぶん殴ってやりたいだけっすから」

後輩の答えを聞いて、俺は安心した。

「ああ、よかったぜ、剣。お前が変な理由で俺と喧嘩しようってんじゃないくて」

に、と俺は犬歯を剥き出しにして笑う。

「これなら容赦なく、お前を殴れそうだ」

互いの距離は、一步踏み出せば殴り合える程度。

空は既に陽が落ち、薄暗いヴェールで包まれている。

俺と剣は静かににらみ合い、そして、何の合図も無く、お互いに一步踏み出した。

固く、拳を握って。

「んじゃあ、一丁、青春してみるかあっ!? 後輩君よあっ!」

「せいぜいほざいていてくださいよ、先輩いいいいっ!」

というわけで、肉体言語を用いた悩み相談が始まった。

相談主はもちろん、剣。

疑問や不満は全て拳に乗せて話してくる。

返答ももちろん、拳。

いやあ、シンプルでいいじゃねーか、どうも。

とまあ、そんなわけで、俺と後輩の、殴り合いの喧嘩が始まった。

喧嘩が始まった直後、剣の体がぶれた。

「つとお!」

俺の拳は空を切り、その直後、腹部に鈍い衝撃が。

「遅いつすよ、先輩」

そこからさらに顎から脳天を貫く衝撃。

視界は揺さぶられ、思わず俺はたたらを踏む。

「くそっ」

俺は悪態を吐きつつ、気合でバックステップをする。

ひゅん、という鋭い風きり音が目の前で生じ、俺の髪も数本持っていかれた。

「ねえ、先輩。俺は昔っからずっと思ってたんつすよ。ひよつとしたら俺は、人間じゃないかもしれない、ってね」

ゆらり、ゆらり。

目の前に居るはずの剣は、独特の足運びで、俺に焦点を合わせられないようにぶれて動いている。

人間というのはどうしても目に頼ってしまう動物だ。その上、目の焦点があつていない物質に対しての反応は、どうしても遅くなつてしまいがちである。

剣はその性質を最大限に利用できる足運びで、俺の目を惑わしていた。

「だってほら、俺って異常じゃないっすか？ 一度見たことは忘れないし、一つの公式を理解できたなら、そこから派生する百の発展した公式を導き出すことだってできる。運動だって、一度見た動きなら完全に再現できるし、どんな達人の秘奥だって、一日二日で習得する自信がある。かく言う、この歩法もその一つっす」

たんつ、という地を蹴る音が聞こえたときにはもう、俺の顔面を剣の拳が捉えていた。

「確か『柳三歩』やなぎさんぽでしたっすかねえ？ いやあ、俺にこの歩法を教えてくれた師匠には悪いことしちゃったつすよ。だってほら、師匠が二十年ほどかけて編み出したこの歩法を、あっさり数時間で習得しちゃったんですし」

止まらない拳打の嵐。

四方から繰り出されるその攻撃に隙は無く、また、防御しきれる余地も無い。

「師匠の努力を、あっさりと踏みにじっちゃったわけですし！」
今までの拳打とは比べ物にならない、重い一撃が鳩尾に入る。

「かはっ」

肺中の息は吐き出され、体の内側から何かに蹂躪されるような痛みが走った。

「とまあ、この様に俺は異常なほどの天才なわけっすよ。おまけ

にこの容姿なもんだから、うざったい虫が寄り付く、寄り付く」

俺が痛みで膝を着くと、それを見下すように、俺の眼前で剣は大きくため息を吐いた。

「そんな中で、唯一、俺が憧れる存在が居たんつすよ。それが、木島陽平。つまり、先輩だたんつすよ」

容赦の無い前蹴りが、俺の顔面を蹴飛ばし、意識を刈り取ろうとする。

俺はそれをとっさに両の手を交差させて防いだ。

「先輩は凄かった。俺と同じく、大勢の人間から好意を寄せられているというのに、俺の周り先輩の周りにはあまりにも空気が違っていたんつす」

剣の足を掴み、そのまま地面へ引きずり下ろそうとするが、あらかじめそれを読んでいたかのように、剣は自ら足の力を抜いた。そして、そのまま俺が引きずり下ろした勢いを乗せて、肘を俺の脳天に落とす。

「つあっ!?!」

脳に響く衝撃に、俺は一瞬、体中の力を抜いてしまった。

それを当然、剣が見逃すはずが無い。

「俺の周りに集まる人間は、俺に対して崇拜染みた好意をもって集まってくる。すると当然、出来上がるのは偶像を祭るカルト集団のような空気。けど、先輩の周りにはもつと純粋な行為と、友情によって繋がっていた。お互いの利害関係をはっきりとさせ、ギブアンドテイクな関係と、時折それを越す友情。ほんと、人間関係においては理想的つすよね。普段はギブアンドテイクな関係で澱みも歪みも無くし、そこから生まれる友情と仲間意識によって、利害を超えた関係も生み出す。ほんと、理想的つすよ」

蛇の顎のように、剣の右手は俺の首を掴み、そのまま体の重みで締まるように持ち上げていく。

「が、あつ」

「そんな先輩を、俺は妬んでいましたし、羨んでた、そして、な

により尊敬してたんすよ。いや、今、この瞬間も、俺は先輩に対しての敬意を忘れてないっすよ」

ぎりぎりと、剣の右手は容赦なく俺の首を絞めている。

「周りの人間に心の底から慕われて、周りに人間を幸せにできる先輩なら。『異常』じゃない、普通人間である先輩なら、幼馴染の千穂の隣を譲ったって悔いは無いんす。だけでもし、先輩が千穂のことをなんとも思っていないくて、遊び程度に考えているなら」

右手の力が増し、剣の眼差しが鋭く変わった。

「先輩をここで完膚なきまでに踏みこじる必要がある」

他者の努力をあつさりと踏みにじり、才能だけでその上に君臨する絶対者。

才能という絶望を司る人間。

あまりの才覚に、その周りの人間を自らの意思に関係な取り込んでしまう、洗脳染みたカリスマ。

それが俺の後輩、破竜院剣だった。

悲しいほどに努力が出来ず、他の人間との隔絶を感じてしまう孤高の天才だった。

「かはっ、はっ、はぁ………くはっ、くくく
くははははははははっ！！」

そんな天才に対して、俺は首を絞められながら精一杯笑ってやる。

「何がおかしいんすか？」

剣は眉をひそめて、俺に尋ねた。

「はっ、なんで俺が笑っているかだって？ そんなこともわかんねえのか、この後輩はよおっ！」

その問いに対して、俺は獰猛に笑って答える。

「この俺が普通の人間だと！？　よりにもよつて、この俺がだ！　くははははっ、まったく、何を勘違いしてやがるんだが！」

俺はその笑みのまま、ゆっくりと首を回していく。

ゆっくりと、剣の右腕の力を凌駕し、首の筋肉をほぐすように回していく。

「な、にしてんつすか？ 先輩？ は？ え？ おかしいでしょ？ 人間が、こんなに血管締められながら首を回しているのに、気絶しないなんて！？」

信じられないものを見るような剣の叫び。

「別におかしくねえよ、後輩」

その叫びに、疑問に、俺は丁寧に答えてやった。

「この俺が、たかが数十秒脳に血液が行かないだけで気絶するよ
うな脆弱な生物のはずないだろ。まったく、人間じゃあるまいし（
．．．．．）」

剣の目が驚愕によって見開かれる。

俺はそれに苦笑で答え、堂々と宣言した。

「教えてやるよ、後輩。人間じゃないってというのは、こういうことだつてな」

剣は確かに万能の天才だ。

人間の中では異常なほどの才能を所有し、どんな達人、熟練の殺し屋にだって対応するだろう。

ならばなぜ、ネームレスというエージェントには対応できなかったのか？

その答えは簡単だ。

ネームレスというエージェントは、まっとうな人間ではない。奴は人の形を模した兵器のようなものだ。いくら天才である剣といえど、戦うためだけに作られた兵器と相対すれば、性能で劣ってしまうのだ。

「まあ、相変わらず中途半端に、だけどなあ」

首の筋肉だけで右手の拘束に抗い、俺は大きく息を吸った。

そして、スイッチを切り替えるように呟く。

「偽装モードを解除する」

さあ、後輩。

この俺が中途半端に人間じゃないってことを証明してやろうじゃないか。

先輩が何かを呟いた瞬間、先輩の雰囲気、まるでスイッチで切り替えたかのようにがらりと変質した。

先輩を掴んでいる右手が警告する。

本能が、俺に告げる。

『死にたくなければ今すぐ逃げろ』と。

あの黒服のお姉さん　ネームレスの時と同じように！

「くはっ」

犬歯を剥き出しに、先輩は野獣の笑みを浮かべた。

その瞬間、俺の右腕が弾かれる。

まるで重機で無理やり剥がされたかのような、圧倒的な駆動力によつて。

「とりあえず、今までの分を返してやるよ」

ドンっ！！

そんな音が聞こえた。

気付くと、俺の視界はくるくると回転していて、何かに跳ね飛ばされたという感覚だけが体に残っている。

「あ、があ」

俺が先輩に殴り飛ばされたという事実を理解できたのは、地面に叩きつけられ、無様に先輩を見上げた後だった。

「確かにお前は、異常なほどの才能を持っている。その才能を持つていれば、ほぼ全ての人間はお前の敵じゃないだろう。そう、人間はな」

本能が再び警告。

背筋に走る寒気は体中が恐怖している証明。

俺は本能に従って、とつさにうつ伏せの状態から飛び上がった。た。

そのほんの数瞬後、俺がいた場所を、先輩の手が決る。

地面を深々と、まるで圧倒的な力を持った化け物が腕を振るった

かのように。

これが人間に出来るレベルの事象なのだろうか？

「逃がさねえよ」

ぐん、と先輩は異常な駆動で俺との間合いを詰め、右腕を弓なりに構える。

しかし、恐れる必要は無い。

俺にはまだ、『柳三步』という歩法がある。あれは人間の焦点をずらし、攻撃を確実にかわす武術の秘奥。いかに先輩が強力な攻撃を持っていたとしても、当たらなければ無意味っすから。

ということ、

「あえて言うつすよ、先輩。当たらなければ意味などな

」

「んじゃ、当てるぜ」

自分の肋骨が軋む音が聞こえた。

体は今まで感じたことがないほどの苦痛を与えられ、否が応にくの字曲がる。

「え、おっ・・・な、にが起こったんっすかねえ、先輩？」

「だから、当てたんだよ、後輩」

先輩の右腕にもたれかかる俺を、俺の首根っこを掴み、左腕だといつのにやけに強い力で先輩は地面に叩きつけた。

「かはっ」

息が出来ない。

思考することも、何もできない。

これは、地面に叩きつけられただけじゃなくて、何かに押しつぶされそうになっている？

「さあて、ここで先輩からのお説教だ」

混乱する頭で状況を確認すると、どうやら、俺は仰向けに倒れていて、その俺の胸を踏み潰すように先輩が足を乗せているようだ。

「まずなあ、後輩。おまえさあ、何でこんなときまで建前で語ってたんだよ？ お前が千穂ちゃんを諦める？ はっ、笑わせるのも大概にしろ。お前が唯一、お前で居られる場所を、そんなに簡単に諦

めるわけねーだろうが」

反論しようと口を開くが、先輩に肺を踏みしめられている所為で、声が出せない。

「んでもって、お前は何、被害者ぶった面してるんだよ、後輩。」

違うだろ？ お前の才能はお前の物で、その所為でお前が不幸になるのは自業自得だ」

みしみしと、自分の肋骨が軋む音がする。

もがいてももがいても、拘束が解けることは無い。

「なのにお前はなんで諦めてんだよ？　千穂ちゃんを諦めるとかほざく前に、まず、お前が諦めちゃいけないものがあるだろうが。いくら他人が怖くたって、いくら他人が理解できなくたって

そして、自嘲するように先輩は言葉を紡いだ。

「人間諦めてんじゃねーぞ」

その言葉で、俺の闇が溢れた。

「アア ああああ ああああ ああああ ああああ ああああ
ああああ ああああ ああああ ああああ ああああ ああああ
ああああ ああつ！！」

膨大な闇のイメージ。

それが片っ端から具現化し、先輩を押しつぶそうとする。

いや、この俺が先輩を押しつづきたいと思っている。

「知った風な口を利くなあ ああああああああああああ
あああつ！！」

幾重にもダークカーテンを重ね、まとめ、その奔流で、俺を踏みしめている先輩を吹き飛ばした。

「あんたに何がわかる！？ 誰とも競えない！ 誰とも共感できない！ 他の人間が何を考えているんだかわからない！ この孤独が！ あんな幸せそうな世界で笑っているあたにつ、何がわかって

るってんだよおおおおおつ！！」

黒い衝動に突き動かされるままに立ち上がり、強く強く、決して千切れない闇の布をイメージし、この手に具現化する。

「異常になるしかねえじゃん！ 化け物になるしかねえじゃん！ 他人がそういう目で見てきてやがるんだから、そういう風に隔てなきゃ、黒いカーテンでも引いて、隠れてなきゃ、わけわかんねえ他人となんか一緒に居られるかよ！！」

決して千切れることの無いダークカーテンで、今度こそ俺は、黒の奔流に飲まれた先輩の首を絡め取った。

「ぐ、う」

うめく声が聞こえるが、関係ない。

関係あるわけが無い。

「特にあんたは眩しかったよ。俺に無いものを全部持っていて、楽しそうで、周りが誰も笑顔でいて。その上、俺を、俺を唯一、天才とか化け物とかじゃなくて、破竜院剣として見てくれた千穂まで奪った！ 俺の居場所を奪ったんだ！ 憎くないわけねーだろ！ 諦めきれぬわけねーだろうが！」

ずるり、と幾重にも束ねられたダークカーテンの中から、先輩を引きずり出す。そしてそのまま自分の前まで引き寄せた。

「でも、しょうがないだろ！ 千穂ちゃんがそう願ってたから！ 幼馴染なんだから！ 幸せを願わなくちゃいけないだろ！」

ぶつける。

俺は、眼前にまで引き寄せた先輩に、感情のままに言葉をぶつけていた。

馬鹿みたいに、まるで子供みたいに。

本気の言葉で話していた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・そこまで想っているなら、どうして逃げた？」

手にかかる力が急に上がる。

その理由は簡単明白。

首に巻きついているダークカーテンを、先輩が異常なほどの力で握り締めていたから。

「なあ、後輩……いや、破竜院剣。そこまで千穂ちゃんを想っているなら、どうして逃げたんだよ？　なあ、なんで逃げたんだよ！？」

怒りに満ちた野獣のように、先輩は犬歯を剥き出しにした顔を俺に向けてくる。

「どうして千穂ちゃんからも逃げた！？」

人間離れた力で、無理やり先輩はダークカーテンの拘束を解く。そして、逆にダークカーテンを使って俺を引き寄せようと力を込めてきた。

「ぐ……」

ダークカーテンを離すのは簡単だった。

けど、この手を離してしまったら、何かに負けてしまう、そう、先輩の言うとおり、何かから逃げるようなきがしたから。

「お前の唯一の居場所だったんだろが！　お前が唯一、お前自身で居られる場所だったんだろが！　なのに、お前は どうして逃げた！？」

異常な力で引きづられるのを必死に耐え、俺は答える。

「怖かったからっすよ！　唯一、俺を理解してくれる千穂の事を、俺が理解できないのが怖かったんっすよ！　千穂が、俺すら及ばないほどの才能を持った化け物だったのが、怖かったんっすよ！」

上田千穂。

それは俺の幼馴染にして、世界に名だたる絶対的な絵画の天才の名前だ。

千穂の才能が開花し始めたのは、小学校を卒業した頃。並みの画家よりも才能がある俺は、いち早くその片鱗を感じ取り、そして恐怖した。

天才という言葉すら生ぬるく、この俺ですら圧倒する鬼才。たった一枚で、人の存在を根底から変えてしまえるほどの感動を

与えられる、そんな異端者。

それが俺の幼馴染、上田千穂の正体だった。

彼女の才能を目の辺りにしてしまったら、挫折どころではない。圧倒的な理不尽によって潰される。絶対にたどり着けない境地を見せられてしまつては、どんな天才だろうと、そう、この俺だろうと二度と筆など持てない。

だから、俺には理解できなかった。

圧倒的才能で他者を踏み潰してもなお、明美や先輩のように、他者と心を通わせ、笑い合える千穂が怖くなった。

だから俺は逃げ出した。

千穂の才能が完全に開花する前に、こっそりと距離をとって、その異常に押しつぶされたように生きることを選んだ。

「なのに、なのにあんたは一体なんなんだよ、先輩！？俺はあんたも怖かった！中学の頃から眩しくて、千穂ちゃんと同じくらい理解できなかった」

ダークカーテンを俺の腕に巻きつけ、握力だけでなく、体中の力で対抗できるして、俺は叫ぶ。

「なあ、なんでだよ！？なんで、あんたはあんな異常才能者の隣で、普通に絵を描くことが出来たんだ！？どうして、あんたは潰れなかった！？どうしてあんたは千穂の隣に居続けることができたんだ！？」

慟哭だった。

過去の罪を、嘆きを、挫折を、声にして、問いにして、俺は先輩に投げつけた。

「はんっ、そんなこともわかんねえのかよ、後輩！」

圧倒的な力によって、俺の体は引きずられて、先輩との距離は後、一步までに縮む。

皮肉なことにそれは、俺と先輩が最初に殴りかかった距離だった。「確かに千穂ちゃんはずげえ。圧倒的過ぎて、俺がああ境地にたどり着けないことぐらい、嫌でも理解させられた。でも、それがど

うしたんだよ？」

犬歯を剥き出しに、先輩は不敵に笑う。

「千穂ちゃんが鬼才で、異常才能者で、異端者だったからといって、この俺が絶対にたどり着けない境地に居るから、それがなんだよ！？」

重機で思い切り引き寄せられるように、俺の体は宙に浮いて、そして、気付くと先輩の右腕で胸倉を捕まれていた。

「この俺が絵を描くのは好きだからだ！ 絵を描くのが、なによりも、俺が気に入ってるから描いているんだ！ この世界に、俺の隣に、どんな天才が居ようが、それが変わることはねえんだよ！」だから、と先輩は言葉を続けて、

「千穂ちゃんが好きなら、いい加減隠れてないで向き合えよ！」

言葉を拳に乗せて、思いつきり顔を殴ってきた。

俺の体はかつて味わったことが無いような浮遊感に包まれ、そして、体中をすさまじい衝撃が襲った。

地面に叩きつけられた衝撃で、体中が痛い。

特に、殴られた右頬なんかは痛すぎて感覚が麻痺してきている。

けれど、それよりも 俺には先輩の言葉が一番痛かった。

黒いカーテンに包まって隠れていた俺を、カーテンごと吹き飛ばすような、そんな一言だった。

不思議と、その痛みはどこか清々しかった。

「……………つたく、のんきに伸びやがって」

俺はやけに満足した表情で気絶している剣を見下ろし、ため息を吐く。

「まあ、とりあえずこれで少しはお前の闇が晴れるといいな、後輩」

大体、この後輩は格好つけすぎなのだ。

悩んでいることや怖がっていることを必死に隠して、なんでもな
いように振舞って、自分を異常だと決め付けて、幼馴染に格好悪い
ところを見せないように取り繕っている。

「……いや、それは俺も同じかもな。」

「つか、男は皆、取り繕いながら必死に格好付ける生き物みたい
だしなあ。」

俺が自嘲気味に苦笑していると、電子音がポケットから聞こえる。
確か、この音は灯からの着信だったはず。

俺は素早く携帯を取り、電話を受けた。

「おう、どうした？ こっちは後輩の人生相談を終えたところで

」

『今すぐ家に帰ってきてください！』

切迫した声だった。

あの灯がこんなにも焦っている声を、俺は始めて聞いたような気
がする。

『ライターアースによって、私の結界が干渉を受けました！ 何
の目的かはわかりませんが、異常事態には違いありません！ 早く
私と合流してくだ』

灯の言葉は途中で途切れ、砂嵐のようなノイズしか携帯から流れ
ない。

「くそっ！」

俺は苛立ちながら電話を切った。

一体、何が起こってやがる？

なんで今、ライターアースが干渉してくる？ そもそも、俺らの
存在をもつ補足したのか？ 明美の事件は悪魔の能力で情報処理し
たはずなのだが……いや、もしかしたらライターアースは
それすらも凌駕するのかもしれない。

何にせよ、この場を離れるのが先決だ。

「目標補足。これより、警戒最大レベルで捕獲します。対象の状

態は損傷60%までを上限と設定しました」

聞き覚えのある懐かしい無機質な声。

その声の主が、黒服を纏った灰色髪の女が、目の前の草原を歩いてくる。

俺はその様子を内心、泣き出したくなるほどの苛立ちに襲われながら、眺めていた。

おいおいおい、どうしてこんなタイミングで出てきやがるんだよ！

「障害を確認。識別コード、レッド。第一級警戒対象と判断します」

灰色髪の女 ネームレスが両手にそれぞれ十徳ナイフのよ
うな形状の、それよりも性質が悪い特注のナイフを携えて俺を見つ
めてくる。

「……………はあ、お前は本当に最悪のタイミングに現れやが
って」

俺は苛立ち混じりにがしがしと頭を掻き、心を無理やり奮い立た
せて笑みを浮かべた。

「とりあえず、久しぶりだな、ネームレス。いや、<NH>シリ
ーズNo.145 タイプ【アサシン】」

ネームレスは相変わらぬ無愛想な声で言葉を返す。

「一年と二ヶ月ぶりです、御影^{みかげ} 陽平^{ようへい}。いえ、ブラックリスト上
位者『悪の執行人』にして<NH>シリーズ No.547 タイ
プ【エンペラー】」

俺たちは『兵器』同士、再会の言葉を交わした。

死合い（前書き）

てなわけで、陽平の正体はこんな感じですよ。

死合い

まあ、ぶっちゃけて言ってしまうえば、俺はいわゆる人造人間という奴だ。

世界を裏側から管理する組織が、人間の種の限界を突破するために作った<NH>シリーズという人造人間の一人なのである。

コンセプトとしては確か、人間が人間を一から作り直して、それぞれの分野に適した天才を導出するとか、そんなだったような気がするなあ。ちなみに俺のコンセプトは『カリスマ』。より大勢の人間を掌握し、統率するために作られた。だから、タイプ【エンペラー】というわけだ。ネームレスの奴は戦闘力や、殺傷力を重視したので、タイプ【アサシン】という区分になっている。

この<NH>シリーズの共通点は、強靱な肉体と再生力、そして灰色の髪。

前者は意図的に付け加えた物なのだが、後者はなぜか改善することが不可能な不良点だったらしい。まあ、髪の色ぐらいどうでも誤魔化せるから得に問題にはされてなかったみたいだけだな。

で、なんでそんな人造人間である俺がこんな田舎でのほほんと高校生活の楽しんでいたかという理由を説明したいところだが、今は割愛しておこう。

その理由は実に面倒で、いろいろな事情が複雑に絡み合っているし、それに　　今、この瞬間、そんなことに思考を裂いている暇は無い。

「るうおおおおおおおおああああああっ！！！」

俺は叫びと共に、ネームレスの体躯を砕かんと右手を獣の顎に見立てて襲い掛かる。

人間としてのリミッターをかけず、手加減もせず、正真正銘、本

気で。

空を裂き、骨を砕く一撃。

獣の顎のように、強靱な力で体軀を砕き、千切ることが可能な一撃。

「回避」

その一撃を。

音速にも届かんばかりの右手を、ネームレスは僅かなステップでかわした。

そして、息を吐く暇も無く、2本のアーミーナイフを振るう。

「つつあー！」

右肩から左わき腹、左肩から右わき腹、それぞれに走る傷跡がxの字を描く。

飛び散る鮮血。

体を走る激痛。

人間同士の戦いなら、この一撃は紛れもなく致命傷だったろう。

「はっ！　ぬりいなあっ！！」

「………っ！」

俺はそんな『軽傷』には気も留めず、残った左腕でネームレスの腹部へ掌圧を叩き込んだ。

めきめきっ、という骨が砕ける音がして、ネームレスの口元から血が吐き出される。

だが、それでもネームレスは止まらない。そして、もちろん、俺もだ。

「警戒レベル最大。これより、体の損傷を度外視し、目標の排除を行います」

「排除？　上等だ、やってみやがれ」

ネームレスの無機質な視線が、俺の視線を混じり、次の瞬間、肉が絶たれる音と、体が砕ける音が聞こえた。

「るうおおおおおおおおあああああっ！……！」

「排除排除排除排除排除排除排除排除排除排除排除排除っ！……！」

交差する拳とナイフ。

それは交互に相手の肉体を傷つけていく。

俺たち<NH>シリーズの人造人間は、カロリーが続く限り、いくらでも再生を行うことが出来る。これがどういった仕組みで行われているのか、俺は知らない。超科学による代物なのか、はたまたオカルト染みたものなのか？ それは恐らく、あの研究所に居た所長にでも聞かなければ知ることは出来ないだろう。だがしかし、そんな理由はこの場においてはどうでもいい。

肝心なのは、どちらのカロリーが先に着くかだ。

俺たちの闘いは、先に再生できなくなったほうが負ける。

「・・・・・・・・」

数分ほど殺しあった頃だろうか、状況に変化が起きた。

ネームレスが無言で俺の拳の範囲外に飛び、距離を取ったのだ。

「おいおい、どうした、もう限界か？ それとも、俺の射程範囲外から銃器でも使って頭を狙ってみるか？」

「・・・・・・・・」

ネームレスは答えない。

わかつているのだ。今更、銃器なんていう『遅い』攻撃手段に移行すれば、その瞬間、俺に頭蓋を砕かれるのだと……………いや、砕かないけどな！？ さっきは殺し合いとか雰囲気と言っちゃったけど、実際、殺さねえし。つか、殺したくねえし。

今はとりあえず、死なないように必死で時間稼ぎをしているところで、俺はまともに戦ってはいない。というよりは、まともに戦えない。なにしろ、相手は元々戦闘を重視して作られた『兵器』なのだ。人身掌握がコンセプトの俺とは性能が違う。

つまり俺は、ネームレス相手では、時間稼ぎぐらいしか出来ないのだ。

「……………自身の損傷が80%以上……………条件クリア。これより、最終手段に移行します」

ネームレスは静かに呟くと、2本のアーミーナイフを、ばらした。

アーミーナイフというのはいわば、十徳ナイフのように缶切りやコルク開けなどといったさまざまな機能を折りたたんで一つにした便利用品である。

だが、ネームレスのそれは違っていた。

そのアーミーナイフ折りたたまれていたのは、便利用品などではなく、それぞれ異なった形状の刃。

「標本刀戯」

呟かれたその言葉は、この技の名前だろうか？

一切の無駄を省いて戦うはずのネームレスが口にするその言葉にどれだけの意味があるのかわからない。

ただ、俺にわかったのは

人造人間の反射速度で

すら捉えられない速さで、ネームレスが動き、俺の体を刃で『固定』したことぐらいだった。

俺は激痛に耐えながら、口元を歪めて笑う。

「……なるほど、だから『標本刀戯』かよ」

ネームレスは恐るべき速さで、ばらした刃を俺の体、特に間接や駆動するために必要な場所て刺しこんだらしい。様々な形状のナイフはより確実に相手を固定し、動けなくするための特注品なのだろう。

もつとも、その所為で自分も武器を失くしてしまうから、最終手段なのだろうけれど。

「……………っあ、はあっ、はあ」

その上、消耗も激しいらしいな。

自分の限界を超える動きをした代償なのか、ネームレスは先ほどまでの機械染みた雰囲気崩し、膝を着いて息を荒くしている。無表情は崩していないが、その額からは汗が流れ出始めていた。

……まあ、同じシリーズである俺が一つしかナイフを弾けないほどの動きだったのだから、無理はないだろうけれど。

「排除、する」

ふらつきながらも、ネームレスは俺に止めを刺そうと歩みを進め

てくる。

右腕一本しか満足に動かせない今では、その歩みを止めるのは難しいだろう。

つまり、絶対絶命だ。

『LLLLL……』

俺が冷や汗を流して頬を引きつらせていると、ポケットから電子音が鳴り響く。

俺はその音に素早く反応し、唯一動ける右腕で電子音を鳴らしている携帯電話を取った。

『陽平さん、生きてますかー？』

「たった今、死にそうだよ」

「『ああ、ならよかったですー。間に合って』」

最後の一文は、電話と肉声との両方から聞こえてくる。

声の方へ視線を逸らすと、そこには俺の相棒であり、真正正銘の悪魔

「助けにきましたよ、陽平さん」

聖名灯が子犬を連想させる笑みで佇んでいた。

「いやあ、本当に焦りましたよー。急に結界が干渉を受けるわ、陽平さんの身にやばいことが起こっていると悪魔レーダーが反応したりと、もう、寿命が縮む思いでしたよー」

「悪魔って寿命あるのか？」

「無いですけど、そんな気分ってことです」

灯が微笑みながら、ぱちんつ、と指を鳴らすと、俺の体が急に拘束から解放される。

「おおっ？」

ふらつきながら自分の体を確認すると、自分を固定していたナイフがいつの間にか消え去り、傷口も跡形も無く塞がれていた。

「……すげえな、いつ見ても」

「ふふっ、悪魔ですから、これくらいは出来ますよー。そして、貴方が望むのなら」

にい、灯は唇を三日月に歪め、目を細める。

「あの程度の障害。一瞬で灰に還してあげましょう」

灯は、この悪魔は、頼もしいことに、ネームレスを指差してそう言い切った。

そうなのである。

実際、この悪魔は対象が異能力者でなければ、大抵の場合、一瞬で消し去ってしまえるほどの『何か』を持っているのだ。今回の事例も、異能力者である剣が関わっていないければ、結界などというまどろっこしいことはせず、直接、ネームレスに干渉して事態を解決できるほどに、この悪魔は万能で、チートな存在なのである。

「……対象に増援を確認。戦力は不明。現状での対抗策は無いと判断……………」

ネームレスは現状の不利を理解すると、傷ついた体にも関わらず、人間よりはるかに早い足で逃げ去っていく。

あつという間に消え去っていく背中を眺め、灯は俺に尋ねる。

「消しときますか？ あれ」

「必要ない。つーか、アレでも俺の昔馴染みだからな、死なれると悲しいんだよ」

「ふう、相変わらず優しいですね、陽平さんは」

「甘いだけだよ、俺は」

俺は解放された体をゆっくりと解しつつ、灯と会話を続けた。

「それよりも、だ。どうだ？ 剣の野郎は？ 少しは病状が良くなったかよ？」

「んー、そうですねえ」

灯は、地面に気持ちよさそうに気絶している剣を眺めて答える。

「ほぼ、大体完治したつていうところでしょうか？ うん、このままの状態が続いたなら、数日以内に完全に回復するかとー」

「そ、か」

俺はほつと胸を撫で下ろした。

色々痛い思いはしたけど、まあ、結果はなかなかじゃねーかな？
少なくとも、ナイフで標本にされてまで頑張った甲斐はあったと思っぜ。

「それで、どうしますか、陽平さん？ あの黒服のお姉さんはきつとまた、剣君を襲って来ますけど、一応、記憶改ざん魔法でも唱えておきましょうか？」

相変わらずこの悪魔は便利だなあ、と思いつつ、俺は少し考え、答える。

「いや、やめておこう。ライターアースが剣に接触してきたなら、何かしら意味があるはずだ。記憶改ざんしたら、その痕跡も消えてしまう可能性が高い。それに、ネームレスの方は俺の方で何とか対処できる。会議で言っただろう？ 一応、ツテがあるんだよ……できれば、使いたくはなかったけどな」

「んー、どういう意味ですか？」

「そのうち、わかる」

見上げてくる灯の頭に掌を乗せ、軽く撫でてやる。

「おお？ 珍しいですねー、陽平さんから頭を撫でってくれるなんて。ついにデレましたか？」

「うるせえよ」

デレるというか、なんというか、今回は灯に助けてもらったからなー、それなりにお礼は必要だ。

だから、お礼のために撫でているのであって、見上げてくる灯の顔が可愛かったから不意に撫でなくなっただけじゃねーんだ。

「ふふっ」

そんな俺の思考を読み取りやがったのか、灯はおかしそうに笑っている。

「……ふん」

俺は、子犬みたいにじゃれついてくる灯の頭を、しばらく撫で続けた。

化け物（前書き）

これで、ダークカーテン編はひとまず終了になります。
新キャラとか出てきましたが、それは次のお話にて。

化け物

ネームレスには固有の名前が無いと思われがちだが、それは違う。彼女がネームレスというあだ名で呼ばれるのは、あくまで名前を使い捨てているからであり、だからと言って『本当』の名前が無いとは限らないのだ。

というわけで、ネームレスこと、紅花^{べにばな} 散世^{ちるよ}という名前を持つエージェントであり、人造人間でもある。彼女はコンセプト上、社会に紛れる必要がなかったので、感情表現などの部分はひどく拙く、起伏の小さいものなのだ。

しかし、感情が無いというわけでもない。散世は普通の人間より極端に感情表現が難しいだけで、感情はしっかりと存在している。そう、例えば、今まで100%を誇っていた任務成功率が崩れてしまったときなどは、それなりに悔しく思ったりしているのだ。

もっとも、表面上には一切変わりは無く、相変わらずの無表情なのだ。

「……………以上、報告を終わります」

「んー、りょーかい、りょーかい」と

そこは昼夜とわず、機械的な光によって照らされている場所だった。

その空間には窓は一切無く、外から完全に遮断されている。そんな遮断された空間に存在するのは、無数のコンピューター、それもいわゆるスーパーコンピューターと呼ばれる超高速演算を可能とする類のものばかり。コンピューターの類の他にも、様々な機械がその空間には存在するのだけれど、どれも奇奇怪怪な形状をしており、常人にはその用途を見出すことは不可能だろう。

ブーーン、という機械音が耐えない空間で、唯一、機械とは無縁な、休憩用のソファアに金髪の少女がだらりともたれ掛っている。目の前で散世を立たせているのにも関わらず、遠慮の欠片も無い座

り方だった。

「しかし、めずらしーこともあるもんだねえ。散世ちゃんがお仕事失敗しちゃうなんてさー」

けらけらと、ソファーに座っている人物は無邪気に散世を嘲笑う。その人物の身長、体型、顔つきなどは少女と呼んで差し支えない十代後半のものだが、にじみ出る雰囲気のようなものが違和感を抱かせる。

もつとも、鮮血に染まったような、『真つ赤な白衣』という異常な服装を目の前してしまえば、そんな違和感はある些細なものではない。

されに言えば、岸田^{きした} 隔^{へだて}という異常者を説明するのに、外見などというものは些細なことに過ぎないのだ。

「……まだ失敗はしてないと抗議。現時点では一時報告、これから対象の捕獲に移る」

無表情だが、どこか不満げに散世は隔に反論する。

「いやね、それがさあ、無理なんだよ、散世ちゃん」

「無理、とは？」

無表情のまま首を傾げる散世に、隔は笑いながら答えた。

「実はさー、研究の費用だしてくれているスポンサーの奴らがさー、木島陽平とその周囲にこれ以上手を出したなら、金を一切出さないとかほざいてくるんよ」

散世の眉が、疑問で僅かに動く。

「疑問。なぜ、スポンサーが御影陽平を擁護するのですか？」

「散世ちゃん、『御影』じゃないくて、今は『木島』だよ。昔馴染みだとしても、呼称は正確にしましょう」

「……………了解」

散世が頷くと、隔はへふーと盛大なため息を吐いた。

「しかし、まさか『悪の執行人』である彼が、御影から離れた彼が、今なおここまでの影響力を持っているとは思わなかったなー。んー、でも、これがひよつとしたら、タイプ<エンペラー>の真価

なのかもしれないねえ」

「所長、説明要求」

「あー、はいはい。無知で愚かな戦闘まっしーん、である散世ちゃんにもわかりやすく説明してあげるからねー」

ずびしいっ！ とチヨップがいい角度で隔の額に叩き込まれた。

先ほども言ったことだが、無表情だろうと、散世は無感情ではない。罵倒されればそれなりに苛立ちを覚えるのである。おまけに、感情表現が苦手なので、すぐに実力行使に出る癖があるようだ。

「あー、うんうん、そんなに怒らないでよ、散世ちゃん。私が悪かったて」

隔は額にチヨップを浴び去られたというのに、顔色一つ変えず、気だるげな笑顔で謝る。

「……………説明要求」

「んー、そんじゃ説明してあげるねー。いいかい？ 彼、木島陽平は人心掌握を目的として造られたタイプだ。彼の行動、才能、言動、全てが大衆を魅了し、彼に好意を持たせるようにして造られている。『御影』の血統はそういう人材を欲しがっていたからね、精々、マスコットキャラクター程度で役に立てば良いと思って造ったんだけど、どうやら予想以上みたいだったようだ」

「つまり？」

隔は、ひゃひゃ、と奇妙な笑い声を出した後、愉快そうに言葉を続けた。

「彼の場合は、他人に好感を与えるだけじゃなくて、自分に忠誠を誓わせるレベルまでその効果を拡大させられるみたい。つまりだ、彼はその気になったら、ひょっとしたら、世界征服ぐらいできちゃうんじゃないかなあ？」

散世は隔の言葉を否定できなかった。

世迷いごと、ただの冗談だと切り捨てることはできなかった。

なぜなら、現に木島陽平は、否、『御影陽平』だった頃の彼は、『悪の執行人』として、世界を征服しかけたのだから。

「なるほど、まさに『エンペラー（皇帝）』として相応しく成長しているじゃないか。製作者としては嬉しい限りだけれど……敵対するとほんつと、めんどいなあ、彼」

へふう、と気だるげに隔は呟く。

「まったく、資金切られたぐらいだったら、まだなんとかあったのに、まさかあんな化け物まで呼ぶなんて、容赦ないなあ。製作者に対する愛と無いのかねー？」

「？　　どういことです、所長？　　所長が嫌われ者だってことは理解可能ですが、化け物とはどういうことですか？」

「……散世ちゃんもさらつとひどいねー」

まあいいか、と隔は一人で納得すると、ぱちんつ、と指を鳴らした。

すると、まるでSF映画のように、四角く切り取られた映像が二人の目の前に映し出される。

現代においては、明らかなオーバーテクノロジー。しかし、二人ともその程度のことでは驚きはしない。なぜなら、この研究所では、この程度の技術、そこら辺に転がっているのだから。

「……………これは……………」

けれども、散世は目を見開いて驚愕した。

もちろん、映像が出てきたことなんかではなく、その映し出された内容について、である。映し出された映像には、無表情の仮面を崩すほどの衝撃を散世に与えたのだ。

「まー、幸い、ここはそこから結構遠いし、ある程度の時間稼ぎも置いてあるし、実験データもバックアップはしっかりあるし、なにより　　<NS>シリーズのデータは大分取れた。おまけに悪魔とかいう不確定要素のデータも取れたんだ、万々歳だろう」

ひゃひゃひゃひゃ、と笑い、隔は散世に言う。

「だから、さっさと逃げるよ、散世ちゃん。あんな化け物、相手にするだけ人生の無駄だからねえ」

翌日、俺と灯は学校も休みなので、二人でだらだらと室内で過ごしていた。

俺は積んでおいた漫画の消化を行い、灯は携帯ゲームの攻略をしている。

「しかし、あれですねー、陽平さん」

「んー、なんだー？」

俺と灯は視線を手元から話さず、会話を開始した。

「なんとか剣君のダークカーテンも完治したっぽいじゃないですかー」

「ああ、夕日が見える草原で殴りあったからな」

「古典的ですねー」

「いやいや、意外と効果あるんだって、これが」

思春期の悩みなんて、大抵の場合、夕日が見える草原とか、丘とか、川辺とかで殴りあったら解決するものと師匠が言っていたし。
「ま、なにわともあれ、これで残りの異能力者はライターアースを含めて二人ですね」

「だなー。そういや、残り日数って確かあと20日ぐらいだったっけかよ？」

「ですねー。でも、今回はイレギュラーが多いですから、実際、そのリミットは在って無いようなものと考えてもいいかと」

「あー、マジでかー」

だるーん、と俺と灯は会話を続ける。

会話の内容は一応、世界がかかっているのだが、傍からみたらまったくそんな風には見えないだろう。

いや、だって、しゃーないし。

昨日、あれだけ気合入れて後輩と殴りあったり、昔馴染みと殺しあったりしたらさ、そりゃ、軽く燃え尽き症候群にもなるぜ？

ということ、今日は世界を救うとかそついうのは軽く休みのんびりと休日を過ごしているわけだ。

「んあ、そういえばなんですけどね、陽平さん。ネームレスっていう黒服のお姉さんの件はどうになりました？ 確か、剣君、サンプルにされそうになってましたけどー」

「ああ、あれな。一応、俺のツテで研究所のスポンサーから圧力をかけてもらったんだ。これであつちが身動きが取りづらくなるだろうし、もう、完治した剣には興味は薄れていると思うしな」

それに、と俺は言葉を付け加える。

「俺の師匠がその研究所を跡形も無く潰したっていう連絡が来たし、とりあえずは大丈夫だと思うぜ？」

俺の言葉に反応し、灯はゲーム画面から目を離してこちらを向く。

「師匠？」

「ん？ 言つてなかったか？ というか、お前も知らないんだな」
漫画から目を離し、灯の方を向くと、なんというか、灯がえらくふてくされていた。

「……そりゃ、私だつてわからないこととがありますしー。一応、陽平さんのことは、あらかた知っていたつもりでしたけど、あくまでも前回と今回は違いますしー」

「よくわかんねーけど、ふてくされんなよ」

「いいんですー。どうせ私は、陽平さんが実はフィクサーと呼ばれる世界を影から操る巨大組織の幹部に買われた人造人間ってことぐらいしか知らない、その程度の女なんですよーだ」

「俺が今まで秘密にしてきたこと、ほとんど知ってんじゃねーか！？」

「つたく、今までちまちま伏線を張ってきたのに、台無しもいところだ。」

「……でもまあ、俺が造られた人間だつて知っていた上で、俺となんでもないように会話してくれてたんだよなあ、こいつ。」

「つーか、お前は俺が人造人間だつてことに何かこう、思うことは無いのか？」

だから俺は、今までなんとなくわだかまっていた気持ちを吐き出

してみた。

灯は、きょとん、と目を丸くし、当たり前のように答える。

「え？ 別にありませんけど。というか、陽平さんが人造人間だからって何かあるんですか？ 確か、最新技術で造られたから、漫画やアニメみたいに寿命が極端に短いってこともなく、普通に人生を送っておつりが来る程度の寿命でしたよね？」

「なぜ知っている？ というか、なぜ寿命の話？」

「いやですよー、陽平さん。寿命の話ときたら当然、結婚関連のことに決まっているじゃないですかー」

「そういや、お前も悪魔だし、寿命もないからなー」

「スルー！？ そして、未も蓋も無い言い方！？」

なんにせよ、灯が悪魔だろうと、俺が結構悩んでいたことをあつさりと受け入れてくれたことは事実なわけで、うん、そこだけは感謝しておこう。

「ああ、人間じゃないで思い出したんだが、灯」

「……………うう、普通に結婚という単語をスルーされたあ」

わしゃわしゃと灯の頭を撫でてやる。

すると、あら不思議、さっきまで不機嫌だった灯が超笑顔になりました。

「で、思い出したんだがな」

「はいなー、なんでしよう？」

「これから俺の師匠がやってくるんだけど、その師匠っていうのが、また人間じゃないというか、普通に化け物でさー」

「うおう、陽平さんの師匠なのに随分な言い方ですねー」

確かにそうかもしれない。

だが、師匠を一言で説明するのに一番的確な単語は『化け物』なのだ。一応、善人の部類にはいる性格をしているからなんとか世界は平和だが、師匠がダークサイドに落ちたら、恐らく、ライターアース同様、世界崩壊の危機になってしまうだろうなあ。

「正直に言くと、俺はあの人を世界中の誰よりも尊敬しているけ

れど、同時に、世界中で一番苦手な人でもあるんだ」

「陽平さんにも苦手な人がいたんですねー」

当たり前のことを、なぜかしみじみとうなずく灯。

「ええい、とにかくだな、師匠は人の形をした最終兵器みたいな人だから、いくら悪魔であるお前でも態度には気をつけれよ？　ほんと、気をつけろよ？」

「はいはい、わかりましたってー」

にやにやと笑う灯の額にデゴピンをかましてやろうかと思ったが、急に、玄関の呼び鈴が鳴った。

…………… ああ、多分、というかこの不吉な感じは絶対に師匠だぜ。

「はあ、仕方ない。いくぞ、灯。いつまでも放置していると、あの人は平然とドアとかを突き破ってくるからな。冗談じゃなくて、二回ほど俺の壁は師匠によって破壊されたからな？」

「どんな人っていうか、人ですか？　それは」

灯の質問に俺は答えない。

だってほら、師匠って人間かどうかっていったら、化け物って答えたほうが的確な感じの人だし。

まあでも、どんな人かと聞かれたら、

「こんにちは、陽平君。久しぶりだね、元気にしてた？」

と、人の玄関を蹴り飛ばし、片手でクマの死体を悠々と背負って微笑むような人だと答えよう。

「たった今、元氣じゃなくなりましたよ、師匠」

「へえ、そりゃ災難」

藍色の着物を纏い、絹のような長い黒髪をなびかせ、妖艶に微笑むこの女性こそ、俺の師匠　灰霧渡里という化け物だった。

グラビティマンの独白（前書き）

責任は重く、期待からは逃げられない。

グラビティムーンの独白

小さい頃から、私は重圧の中で生きてきた。

人より強い重力で体を押しつぶされないように、下を向いて、必死に歩いてきた。

その重圧が、私にとっては辛くて、苦しくて、でも、どうしてもなくらいに逃げられなくて、結局、押しつぶされそうになりながら今までなんとか過ごしてきた。

時々、夜に浮かぶ月を眺めながら私は思う。

ああ、もしも、私があの方に月に行けたのなら。

この重苦しい重圧から、地球の重力から、逃げられたのなら、どれだけ幸せなことだろう？

ずっとずっと、そう思ってた私は生きてきたんだ。

だから、私の『これ』はきっと、ただの逃避願望。

誰かに責任を擦り付けて、自分が楽になりたいという、誰にでもあるような、ただの逃避願望。

重くて苦しい場所から、この現実から、幻想のような月の場所へ逃げてしまいたいという、滑稽な妄想。

それが私、グラビティムーン。

帰省（前書き）

実家に帰りたくなるときがあります。

実家に帰らなければいけないときもあります。

帰省

ぐつぐつと、テーブルの上に置かれた鍋が煮えている。

カセットコンロの上で、土鍋が程よい熱量を具材に加え、その旨みを活性化し、さらに具材同士の味と香りが融合し、一つの芸術作品と呼んでも良いほどのできればになっていた。

鍋なんて具材を適当にぶっこんで、適当に煮込めばいいと思っている人も入るようだが、そんな人間でさえ、この鍋を食したなら、その考えを改めざるを得ないだろう。

ちなみに、この鍋は俺が作った物でもなければ、灯が作ったものでもない。

「んー　良い感じに煮えて来たねえ」

艶やかな黒髪を肩の辺りで束ねた師匠が、割烹着姿で満足げに鍋を眺める。

「前々から思ってたんだけどな、師匠。師匠はなんでこんなに料理が美味いんだろうな？　普段はがさつで、料理なんて全然、出来そうにも見えないのに」

「あははは、陽平くん。それは偏見というものだよ。おしとやかな女性が必ずしも料理が美味いというわけでも無いし、こうして、出来の悪い弟子の頭をお玉で殴るようながさつな私でもおいしい鍋が作れるんだ。つまり、はつきりと言ってしまえば、それはきつと才能という奴なのかもねえ」

「……師匠は相変わらず、厳しいよな。他人とか、世界とかに」
俺はお玉で叩かれたでこを押さえながら呟く。

灰霧渡里という俺の師匠は、現実主義であり、才能主義だ。

この世界で成功する奴には全て才能があり、成功するために費やした過程、その努力さえも、『才能』の一言で切り捨ててしまう。

師匠曰く、才能が無ければ努力も出来ないし、そもそも、努力というのは元からある才能を伸ばすための行為であり、決してゼロか

ら才能を作る行為にはならない、とか。

身も蓋も無い意見だけれど、師匠の言っていることは間違いなく現実だ。

才能があるから成功するのではなく、成功したから才能があつた。努力したから夢が叶うのではなく、才能があつたからこそ、夢が叶った。

うん、紛れも無い現実で、事実だ。

けれど、俺は納得できない。

偉大な師匠に対する、ほんのささやかな反抗心なのかもしれないが、俺はなんとなく、全てを才能で片付けるのが嫌いなのだ。

だってそうだろう？

才能で全てが決まるのなら、それはきつと、生まれたときから逆らえない『運命』みたいな奴にこの世界が支配されていることと同意なのだから。

………つと、話がずれたので軌道修正。

「しかし、師匠。二ヶ月ぶりに尋ねる可愛い弟子への手土産が『熊の肉』ってどういうことなんだ？　なんで、動物界でも一二を争う強さを誇る動物の肉を頭から丸ごと持ってきたんだよ？」

「んー、ほら、私ってば猟友会にも入っているから。時々、猪とか熊とか狩るときもあるから」

「だったら、熊の死体はさつさと業者に引き渡せよ。そうしたほうが金も入るし、こうしてさばく手間だって省けるじゃねーか」

「やれやれこの弟子は。師匠が折角、愛情を込めて手料理を作つてあげたというのに、文句ばかり」

「スーパ－の豚肉でいいじゃねーか！　普通のお肉でおいしくご飯を作ればいいじゃねーか！　なんでよりもよって、熊！？　師匠の所為で、ご近所の皆さんに奇異の目で視られたわ！」

「いいじゃないか、それくらい。ちゃんと気を遣つて、家の中が獣臭くならないように、外でさばいたんだから」

俺と師匠は鍋を挟んで、向かい合いながら言葉を交わす。

その間に、師匠の謎の技術によって臭みを完全に消した熊鍋をつきつつ、俺はほんの少し、感慨に耽っていた。

そういうや、俺が師匠の弟子になったばかりの頃も、こうやって向かい合いながら飯を食っていたっけ。

「……んで……」

「ん？」

ふと、俺は隣で灯がぶつぶつ何かを言っていることに気付く。箸と取り皿はしっかりと手元にあるものの、一向に鍋に手をつけていない。

あれ？ こいつ、熊嫌いなのか？ というか、悪魔にも好き嫌いがあつたのか。

いや、つか、普通の食卓に熊肉なんて出ねーし、躊躇うのも無理は無いか。

「おい、灯。心配すんな、師匠が作った飯は格別だぜ？ 例えピーマン嫌いな子供でも、師匠の料理に掛ければ、一瞬で好物がピーマンに変わっちまうぐらいに」

「なんで！」

俺の言葉の途中で、灯が思いつきりテーブルに両手を叩きつけた。がしゃん、と鍋が揺れ、数滴、テーブルに汁が零れる。

「なんで、【魔神】である貴方が、ここにいますか！？」

引きつった笑みを浮かべながら、灯は叫ぶように師匠へ問いかけた。

ん？ マジン？

「食事中だよ。落ち着きなさい、灯ちゃん」

灯とは対称的に、涼しげな顔で鍋をつつく師匠。

あー、ひょっとして、なんかややこしいことになってんのか？

「なあ、灯。お前、師匠知ってたのか？」

俺の質問に、灯はあはははは、と乾いた笑みを漏らしながら答える。

「知ってるも何も。元々、この魔神はこっち側の存在ですよー。」

といつても、今、ここに居る彼女はどうかやらアバターで顕現しているみたいですけどね」

「あ、アバター？」

「化身ってことですよ、陽平さん。神様とか上位の存在は、直接この世界に干渉できる時代がもう過ぎちゃったので、変わりに自分の力の何割かを持たせた分身を世界に降臨させるんです」

「そうなのか。んで、その化身っていうのが、俺の師匠というわけ？ んん？」

「なあ、師匠」

「なんだい、陽平くん」

「師匠って神様？」

「うん、実は神様だったりするね」

熊肉をほお張りながら、師匠は輝かんばかりの笑顔で答えた。

『師匠は神様』か。おそらく、灯が言っていたマジンというのは字面に直すと『魔神』と書くんだらう。

うん、それにしても、師匠がまさか神様だったとはなあ……………

「ああ、なるほど。だからあんなに強いのか」

「納得しちゃった！？」

俺が手を叩いて頷くと、灯が信じられない物を見るような目で俺を見ていた。

「言っちゃあ何ですけど、陽平さん、正気ですか！？ 何、いきなり知り合いが魔神だとか言われて納得してんですか！？」

「いや、そりゃそうだけだよ。そもそも、既に悪魔とか超能力者とか、俺自身が人造人間だし、神様ぐらい居たって別に驚かねえよ」

「驚きましようよ、そこは！ 神ですよ、神！ ゴット！」

「悪魔に言われてもなあ」

悪魔という超然とした存在なはずの灯がここまで騒ぐということ、は、よほどのことなのだらう。

だがしかし、俺は師匠と修行していた際に、嫌というほどに師匠の異常さ、理不尽さ、ありえなさを目の辺りにしているので、そん

な異常な出来事でも、案外、すんなりと受け入れられた。

つか、目の前で『ほうら、君も頑張れば飛べる様になるよ』とか普通に空中を浮遊されたり、『違う違う、気合で出すの！ ほら、こつやって！』とか、あつさりと『気』とかその類の何かを掌から出されて、地面を割ったりなど……数え切れないほどの異常な光景を目の辺りにしてきたのだから、むしろ、師匠が人間だと言われるほうが俺は信じられない。

「まあ、それはさておき、さつさと飯を食えよ、灯。鍋が冷めちゃうぜ?」

「……ありがとうございます」

うつ、さておかれたー、と嘆きながらも灯は俺がよそつてやった具材を食べ始める。

「んで、師匠。師匠はなんでまた、俺の所に来たんだよ?」

「用事が無ければ、可愛い弟子の顔を見に来ちゃいけないのかい?」

師匠はウインクをしながら、悪戯に微笑む。

睡蓮のように美しく、向日葵のように明るいその微笑みには嫌な思い出しかない。師匠がこんな笑みを浮かべるときには決まって、俺に何か災厄を告げるときなのだ。

ちなみに例を挙げると、俺が大好きな漫画家の画集に牛乳を零されたり、俺がこっそり集めているナイフや銃器のコレクションを壊されてたりしていた。

「師匠、俺、そういえば後輩たちに麻雀に誘われていたんで、そろそろ行かなくちゃいけないけど」

「もう夜八時になるよ、子供は寝る時間だ」

「俺はもう高校生だから大丈夫だ。むしろ、友達の家とかに遊ぶ歩かずして、何が青春って感じだぜ?」

「さすが陽平くん。青春を謳歌してるねえ……でも、麻雀なんて賭け事はいけないな」

「心配すんなよ、師匠。俺たちが掛けるのは、己の腕と誇りだけ

さ」

俺は内心、冷や汗を掻きながらも、何とか師匠からの質問をかわしていく。

ああ、久しぶりだから、師匠の笑顔、すげえ怖い。

「じゃ、師匠。せっかく来てくれたのに、悪いが、そろそろ時間だ、もう行かなきゃいけねー。この埋め合わせ後ですから、今日は灯と軽快なトークでも交わっていてくれよ」

「陽平さん！？ さりげなく私を生贄にしましたねっ！？」
聞こえない、聞こえない。

俺は高鳴る鼓動を抑えて、席を立とうとする。

そのとき、

「知っているかな？ 陽平くん。君はね、私に嘘をつくとき、左手の中指が若干震えているんだよ」

師匠の言葉が、視線が、強制的に俺を再び席に着かせた。

「さて、陽平くん。君は勘が良いからね、これから私が言うことを薄々予感していたから、逃げようとしていたのだろうけど、甘いね。どうせなら、逃げるのなら、私が来る前にこの家から逃げておくべきだったんだよ」

「それをやったら、師匠、すげえ怒るじゃねーかよ」

「当たり前だ」

すぱんっ、と軽快な音を立てて、俺のでこが弾かれる。

その一撃が師匠によるデコピンだと理解したときには既に、俺の体は衝撃を抑えきれずに仰向けに倒され、後頭部が床を強打した。

「師匠からしてみたらね、可愛い弟子から避けられるほど悲しいものは無いんだよ」

悲しげな表情で瞳を濡らし、目を伏せる師匠。

師匠、その可愛い弟子に強打を喰らわせるのは悲しくないのかよ？

「……………で、一体、どんな用件だよ、師匠」

俺はでこをさすりながら、体を起こす。

まったく、師匠のデコピンは暴徒制圧用のゴム弾より威力がある

から困る。これでまだ手加減をしているというのだから、本当に師匠は未恐ろしい。

「いえいえ、用件ということのほどでもないんだけどね。ちょっと知り合いから、君を実家に帰して欲しいって頼まれてさあ」

あははは、と師匠は軽く笑っているけれど、俺はその内容に衝撃を受けた。

胸がきゅんと、締め付けられ、押さえつけていた過去が体のどこから湧き出てくる。

「……師匠、親父から頼まれたのか？」

「まあね。ほら、君もそろそろ自分の過去と向かい合つべきだという師匠としての心遣いも込められているけど」

「……………」

過去と向かい合う、か。

俺はふと、後輩たちの顔と、猫子の悲しげな横顔を思い出した。

「確かに、そろそろ頃合しだねーな、師匠」

多分だけれど、ここで逃げたなら、可愛い後輩たちに示しがつかないだろうし、なにより、相棒だった猫子との日々を否定することになる。

それだけはごめんだ。

「そろそろ、俺も成長するべきだよな、師匠」

「そうだね。そろそろ君も、『御影』に戻ってもいい頃じゃないかな？」

師匠が笑みと共に俺の言葉を肯定してくれる。

なら、大丈夫だ。

師匠が背中を押してくれるなら、きっと俺はどんな困難にだって立ち向かえるはずだから。

「よし」

俺は熱い鍋をそのまま素手で掴み、一気に口元へと運ぶ。

そしてそのまま全てを咀嚼し、飲み下した。

これは人造人間の俺だから出来る芸当であって、良い子も悪い子

も、真似したら大惨事になるぜ

「んぐんぐんぐ、ぷはー、食った食った、と」

俺は鍋と一緒に、不安や恐怖、後悔という後ろ向き気持ちを飲み下した。

だから、俺はもう、前を向くしかない。

前を向くために、過去に決着をつけるしかないのだ。

「じゃあ、師匠。腹ごしらえも済ませたことだし、早速準備しましょうか」

師匠は含み笑いながら、頷く。

「相変わらず、君は面白いなあ、陽平くん。だから、私は君が好きだよ」

「そうかよ、なら、俺も敬愛してますぜ、師匠」

俺と師匠は互いに、視線を交わして笑みを浮かべ、

「な　それなら、私だって、陽平さんを愛してますよー！

ほら、陽平さんも私を愛してるって言い返してください！」

なぜか、灯が顔を真っ赤にして憤っていた。

俺が住む田舎町から電車で一時間。さらにそこからバスに乗って四十五分ほど揺られ、そこから二十分ほど山道を歩いたところに古い洋館がある。

そこが俺の実家だ。

実家、という定義が生まれ育った所という意味になるのなら、俺の実家はきつとあの研究所になるのだけど、とりあえずは、俺が『人間』として戸籍を得たのはここが初めてなので、俺はここを実家と呼ぶことにしている。

「なんていうかー、でつかいですねー」

「ふん、ただ古いだけだろ」

灯は俺の隣で、興味深々といったように俺の実家を見上げ、俺はつまらなさに鼻を鳴らした。

昔々、偏屈な金持ちが居た。

その金持ちは俗世を嫌い、人間嫌いだったため、山奥に引きこもって大きな洋館を建てて暮らすことにした。

けれど、その金持ちは人間嫌いなので、家政婦を雇うのすら嫌い、その大きな洋館を自分一人で管理していた。そしてその内、その金持ちは大きな洋館を管理するのが大変になり、過労で倒れてあつさりと死んでしまった。

その洋館は立地条件があまりにも悪いため、誰も引受人が居なかったのだが、俺の親父が『仕事』の都合が良いので買い取ったらしい。

奇しくも、その金持ちが嫌った『俗世』を操る男に、この洋館は買い取られたのだ。

そんな滑稽なストーリーを持つ我が家に、俺は帰ってきた。

「んじゃ、行くぞ」

「はい」

俺と灯は無駄にでかい銀色の門を潜り、これまた無駄に広い館の庭へと足を踏み入れる。

昨晚、俺は手早く荷物をまとめ、学校にも連絡を入れ、驚くほど早く準備を終えた。自分でも驚くほどスムーズに準備することが出来たのは、もしかしたら、心のどこからで、俺が実家に帰りたがっていたからなのかもしれない。

ちなみに、俺の帰省させた張本人である師匠はなにやら用事があるらしく、その用事が終わってから、俺の後を追って実家に来るか。うん、ぶつちやけ来てなくていいんだけどなあ、師匠。

「なあ、灯。契約上、俺から離れられないのはわかってるんだけどよ、こう、姿を隠すとかしてくれねえかな？」

「嫌ですよー。それじゃ、陽平さんのお父さんに、彼女として挨拶できないじゃないですかー」

「しなくていい。つーか、そもそも彼女じゃねーだろ、この悪魔」
「いいじゃないですかー、悪魔が彼女でも」

俺たちはいつも通り、なんてことない会話を交わしながら館へと歩いていく。

……………ここを歩くのも一年と半年ぶりぐらいか。

脳裏を過ぎるのは、初めてここを歩いた時のこと。

俺が、この館の主に買われた時のこと。

あの憎たらしい、鮮血に染まった白衣を着た所長に連れられて、立て付けの悪い扉を俺は開いた。

外側とは違い、内装は驚くほど真新しく、家具もアンティークの物ではなく、最新の家具で取り揃えられていたのが印象的だった。

赤い絨毯が敷き詰められた床を歩いていくと、とある部屋に突き当たった。

所長が開けると促す。

俺はその通りに、なんの躊躇いもなくそのドアを開けた

「ようこそ、我が息子よ」

あの時と同じように、親父は俺に声をかける。

あの時とは違い、躊躇いながらドアを開けた俺は、苦笑いでそれに応える。

印象の無い凡庸な顔というものを突き詰めたら、こうなるのではないだろうか？ そう神様が考えたのではないかと勘ぐりたくなるほど、目の前の男には特徴というものが欠落していた。年齢的には確か、今年で40を越す程度らしいのだが、見方によっては、二十代にも、五十台にも見えるスーツ姿の男。

それが、俺の親父にして、この世界を影から操る巨大な組織『フイクサー』の三大幹部が一角、御影^{みかげ}時告^{ときつぐ}だった。

御影家（前書き）

再開の時であり、再会の時です。

御影家

御影時告。

年齢不詳、二十台の青年にも見え、四十台の中年にも見える。個性というものをこっそりと削り取った容姿がゆえに、周囲の風景を薄めるほど存在感が透明だ。

『フィクサー』と呼称される巨大組織の幹部で、この男によって世界の半分が操られていると言っても過言じゃない。

あっさりと言ってしまえば、この男は、俺の親父は、世界を牛耳る悪の組織の幹部というわけだ。

んでもって、

「よく帰って来たな、陽平。さあ、まずはご飯にしようじゃないか。君の好きな物を、好きそうなグレードで取り揃えてみた。もちろん、私も腕によりをかけて料理を作らせて貰ったよ。なあに、全然、手間じゃなかったさ。ちょっと、組織の仕事が滞って総帥にマジギレされた程度だ。ふん、この程度、久しぶりの家族団らんに比べれば、羽虫程度にも気に留めんよ」

ものすごく家族思いの人だったりする。

「……っーか、親父よお。勘当していた息子が帰ってきたんだから、それなりの態度って物があるんじゃないのか？」

俺は、目の前でテーブルに次々と料理が運ばれていくのを眺めながら、ため息を吐く。

「ん、ああ、そうだな。おかえり、陽平」

「軽っ!？」

ものすげーフランクに言われたんだが。

「ああ、すまない、陽平。実はお前の生活ぶりを、私の子飼を使っつて一日ごとに報告させていたから、あまり久しぶりという気がしなくて」

「てめえから勘当したくせに、どんだけ心配なんだよ、この親父

はっ！」

「いや、だって、私の大切な息子だしなあ」

朗らかに笑う親父を見て、俺は思わず脱力してしまう。

ああ、そうだった。この親父はこういう奴だったぜ。『フィクサー』という巨大な組織の幹部なくせに、まるで普通の、いや、それ以上の親バカみたいに俺に接してきやがるんだ。

思わず、血も繋がっていないこの俺が、中途半端に人間ですらないこの俺が、『親父』と呼びたくなるほどに。

「ましてやその息子が彼女を連れて帰ってきたんだ。喜びはすれど、怒ることなど何も無い」

「……………ふん、彼女じゃねーよ」

「あれっ！？そこだけはつきりと否定ですか！？」

口元にソースを付けながら抗議してくる灯を抑え、俺は親父に尋ねる。

「なあ、親父。確かによ、あんたの性格なら久しぶりに息子に会いたいから、っていう理由で『師匠』に頼み込んで俺を呼び戻すかもしれない。けど、あんまりにもタイミングが良すぎるんだよ」

「ほう？」

親父は、目を細め、口元に微笑を作った。

その顔は父親としての御影時告ではなく、『フィクサー』の幹部としての御影時告だった。

「どうせ、あんたのことだ。俺が今、陥っている状況ぐらい、とつくに把握済みなんだろ？……………つか、この状況にも『フィクサー』はどうせ関わっているだろうし」

「さて、それはどうだろうな？」

笑う親父からは、何の情報も読み取れない。

それでも俺は対人関係に関するエキスパートであり、それに特化した人造人間だ。その俺が表情からまったく何も情報を読み取ることができない。

ふん、さすがは悪の組織の幹部様だよな。これくらいはお茶の

子さいさいってか？

「隠しても無駄だぜ？ ネームレスが出てきたってことはつまり、その背後には、あの忌々しい所長がいるってことだ。んで、その所長がいるってことはつまり、少なからず、この件には『フィクサー』が関わっている」

親父の表情は微動だにしない。

けれど、俺は構わず話を続ける。

「色々俺も、コネを使つて所長が使っていた研究所潰したから、どんな企業や組織が研究に関わっていたのかぐらい大体わかるんだぜ？ で、恐らく親父は俺がその事実を知ったことも分かっているはずだ。そして、その時に俺が呼び戻されたってことは」

「＜NSシリーズ＞」

親父の言葉に、俺は話を止めた。

「あいつはその研究体のことをそう言ってたよ。なんでも、人類が次のステージに上がるために貴重なサンプルだから、私の力で生け捕りにして欲しいと依頼してきたな」

「で、あんたはその依頼をどうしたんだ？」

親父は俺を一瞥すると、静かに含み笑って肩を揺らす。

「ふふふ、そう睨まずとも、私はしっかりと断ったさ。『フィクサー』が動いたなら、君が気づく前にサンプルを全て回収している」

「は、なめんなよ。そんなときは、俺が全力であんたの組織をぶっ潰すしていたところだ」

親父は、怖い怖い、と余裕ぶつた口調で俺をからかう。

……ちっ、暖簾に腕押しっていうのはこういうことなんだろうな。こつちがいくらすごんだとしても、親父は飄々とそれを受け流しやる。ぶっっちゃけ、親父は『師匠』の次にこの親父が苦手なんだよなあ。

「ふん、親父、そろそろ本題に入れよ」

俺の言葉に、今日初めて、親父は動揺のようなものを見せた。

「あ、うん。そのことなんだがな、陽平」

「んだよ？ 何をためらってたんだよ？ 俺を呼んだ理由が一家団
樂じゃなくて、別にあるぐらい、もうわかりきってることだし。さ
っさと用件を言いやがれ。ほら、俺の相棒がせつかく空気になって
話が終わるの待ってたんだからよ」

「うわーい、陽平さんの心遣いになぜか胸が痛むよー」

あー、はいはい。空気は言いすぎだなー、悪かったなー、と俺は
灯の頭を撫でて機嫌を取っておく。

「……………陽平、はじめに言っておく。私は、父親失格だ」

俺が灯の頭を撫でていると、親父は重々しく口を開いた。

「私があいつからの依頼を断ったのは、もちろん、サンプル対象
がお前の友人だったのもあるが、何より、あいつの不手際の所為で、
大切な娘が危機に陥っているからだ」

自分でも、目が見開き、眼光が鋭くなっていくのが分かる。

頭がバーナーであぶられたかのように熱を帯びていく。

親父は、俺の目の前で深々と頭を下げ、搾り出すような声で俺に
言う。

「頼む、陽平。美月の奴を、お前の妹を、助けてやってくれ」

苛立ち交じりの俺の拳は、べきりと音を立ててテーブルを叩き割
った。

今更かもしれないが、俺には妹がいる。

もちろん、俺は人造人間なので血は繋がっていないのだが。

妹は、俺とは別に、真正正銘、親父が母親に生ませた子供である。
残念ながら母親は、俺がここに買い取られる前に病気で死んだらし
く、顔は写真の中でしか見たときは無いが、とても妹に似ていた。
って、逆か。

さて、そんな母親似の妹なのだが、よくないことにその病弱さも

遺伝してしまつたらしく、俺の記憶にある妹の姿は、ほとんどベツドの上だった。

けれど、その性格は誰に似てしまつたのか、『病弱な令嬢』というイメージなんか粉々に粉碎するほど、『あれ』なのだ。

親父曰く、妹は、俺の性格がそのまま病弱な少女になっているだけ、とのこと。俺と妹は別にお互いが似ていると思っていないが、まあ、多少言葉遣いが似ているところがあるかもしれないが、そこまで似ているとは思っていない。まあ、血は繋がっていないのだし、似ていなくて当然かもしれないが。

だけど、俺は正直に言つと、嬉しかったんだ。

親父に、俺と妹が似ていると言われて、俺はとても嬉しかった。血というつながりが無くて、妹と兄妹だと感じられて、似ていると言われて、俺は嬉しかったんだ。

妹もぶっきらぼうに文句を言いつつそっぽを向いていたが、顔がにやついていたことを思い出すと、まんざらでは無かったのかもしれない。

だから、俺にとって妹は、御影^{みかげ} 美月^{みつき}は、かけがえの無い家族であり、大切な兄妹なのだ。

例え、血なんか繋がっていなくても、だ。

それだけは自身を持って言える。

……だが、そんな大切な妹から、自分の過去から、俺は今まで逃げ出していたんだ。

正直に言おう、気が重い。

「陽平さん、大丈夫ですかー？ なんだか、目が死んだ魚みたいになつてて、いつの陽平さんらしく無いですよー？」

「は、そりゃな。これから、今まで逃げ出してきた妹と対面するんだ、気も重くなるつてもんだぜ。それに」

俺は乱暴に頭を掻くと、深いため息と共に言葉を吐き出した。

「妹が異能力者になっっているってんなら、なおさらな」

ライターアースを除く三人の異能力者。

その最後の一人が、御影美月、つまり、俺の妹だったらしい。

本来なら、俺が住んでいる田舎町の中でしか感染しないはずなのだが、偶然、ウィルスが漏れてしまったとき、美月は俺が住んでいる田舎町に居た。そして偶然、ウィルスに感染して、異能力者になっってしまった。

『偶然』、こんなことが起きてしまった。

「いや、偶然なんかじゃねーよ」

俺が逃げ出して、妹を放っておいたから心の闇が膨れ上がって、俺を心配した妹が、俺の住んでいる田舎町に来ていたんだ。

全部、俺の責任だ。

「陽平さん。私は貴方が何を思っているのか、さっぱり見当もつきませんけど、うん、そんなに陽平さんは悪くありませんよー」

灯は俺を見上げて、悪魔らしくない、子犬のような人懐っこい笑みを作ってみせる。

その笑顔で、俺の心は大分軽くなった。

「あんがとな」

「さてさて、なんのことですかねー？」

俺は灯の頭に優しく手を置いて、ゆっくりと前を見据えた。

赤い絨毯が敷かれた道の先、一番奥の部屋。

趣向が凝らしてあるそのドアの先には、俺の妹がいる。

今まで逃げてきた過去がある。

そのドアを開けてしまえば、もう後戻りはできない。

『木島』から『御影』に戻らなければいけない。

過去と相対して、前に進まなければいけない。

「でも、逃げちゃだめだよなあ」

逃げたら、お前に会わず顔もねーよなあ、猫子。

かつての相棒の顔を思い浮かべ、俺は氣力を振り絞る。

「んじゃ、久しぶりに御影家全員集合と行くか」

ゆつくりと、震える手で、俺は、御影陽平は、そのドアをノックした。

兄妹（前書き）

殺しあっても、何があっても、兄妹です。

兄妹

ある時、私に兄ができた。

どうやら、父が研究所から買い取ってきた人造人間らしい。なんでも、仕事の関係上、人身掌握に特化した人間が欲しかったからとか。

けど、私には関係ない。

父がどんな仕事をしていというが、私にはまったく関係無いのだ。父がどんな仕事をしていというが、私を養ってくれているならそれなりに感謝はするし、慕いもしよう。けど、それだけだ。私と父という人間は、ちゃんと個人として独立しているのだから、父がなんのために何をしていというが、私という個人には関係ない。関係ないのだ。

なので、私が重要だと感じたのは、一人っ子の私に兄ができるということである。

だって、兄だ。

念願の兄だよ。

来る日も来る日も、お兄ちゃんが欲しいなあ、お兄ちゃんが欲しいなあ、と父にねだった甲斐があつたつてもんだよ。

兄になる人かあ、どんな人かはわからないけど、優しい人だったらしいな。

休みの日とかは、一緒に遊んでくれたり、どこかデパートに連れて行ってくれたりしてくれて。勉強が分からなかったときは、肩を竦めながら優しく微笑んで教えてくれて。

そして、時々ちよつと意地悪な兄。

……………うん、わかつてる。そんな兄は存在しねえ！ という意見は重々承知。

けど、ちよつと妄想するぐらいはいいじゃんか。
もう少し、もう少しだけ。

兄になる人が来るまで、もう少しだけ、幸せな妄想に浸らせて欲しい。

「押し潰せ、グラビティムーン」

ドアをノックした瞬間、急に俺の体が重くなった。いや、そんな表現では生易すぎる。

文字通り、体が鉛になったように重みを増し、足が震え、膝を着かざるを得ないほどの圧力が肩に降り注ぐ。

「が、ぐ、これは、重力か！」

俺の足元が、突如発生した超重力に耐え切れずにひび割れ、俺の体からは、骨が軋む音が聞こえてきた。内臓が重力に耐え切れず、いくつか潰れるのを感じる。

このままではいずれ脳も潰されてしまうだろう。

いくら異常な復元能力を持つ<NHシリーズ>でも、脳を潰されれば確実に死ぬ。

「ちいっ！」

とつさに偽装モードを解除。人造人間としての全力をもって、超重力に逆らい、部屋の外側へと飛びのく。

「陽平さん！」

灯が悲鳴のような声を上げて近づいてくるが、俺は片手でそれを制した。

潰れた内臓に意識を集中し、復元。血が巡り、無くなったモノが形を取り戻していく。

そして、前方から発せられる殺気の源へと、目を向ける。

「グラビティムーンによく耐えたよね、兄貴」

か細い声とは裏腹に、どこまでも冷たい声。

その声は、俺の記憶にある妹の物と違っていた。

「おいおい、いきなり兄を殺しにかかってくる妹がいるかよ？」

「それはそれは、妹を見捨てて失踪した兄貴に言われるとは思っ

てもいなかった」

冷笑と共に、皮肉を放つ妹の姿からは、あの健気で可愛らしかった　　ってほどもなかったけど、まあ、うん、可愛いといえは可愛らしかった　　妹の面影は無い。

もうすぐ高校に入るというのに、その体躯は小学生のように幼く、華奢。顔も童顔だが、それはよくできた氷細工のように繊細で、触れがたい美貌を携えている。その身を包むのは、純白のレースがついた、まるでお姫様のようなドレスだ。

ただ、その外見と相反するように、瞳は何処までも冷たい刃の光を宿している。

「美月、お前はまだ少女趣味なんだな。否定はしねーけど、そろそろ高校生だろ？　それなりの格好をしたらどうだよ？」

「帰ってきて早々、随分兄貴風吹かせるんだね。この一年、顔も出さなかったくせに」

何かを言おうとして、言葉が詰まる。

今更、中途半端な言い訳なんかほざけるわけがねえ。だけど、真実を語るには、あまりにも俺には覚悟が足りてなかったんだ。

ドアを開ける瞬間まではあんなに勇んでいたくせに、いざ、妹と顔を合わせたらこの体たらくかよ？　まったく、自分の情けなさに嫌気がさす。

「ねー、兄貴。今更さ、何しに帰ってきたの？」

「あ、ああ。それはだな　　」

「黙れ」

封殺の言葉と共に、再び巨大な鉄槌に押しつぶされるかのような圧力が降ってきた。

「　　がつ！？」

人間を超えるはずの怪力を宿しているはずの俺が、なすすべも無く膝を着き、まるで許しを請うように、美月の前で頭を垂れる。

「訊いといてなんだけど、聞きたくないよ。兄貴の言葉なんて」
頭を下げる俺の目線に合わせるように美月はしゃがみ、無感情に

言い放つ。

「逃げたくせに。全部私に押し付けて、逃げたくせに。今更、どんな言葉を吐けるんだよ？ 今更、何を言っただよ？ どうにもならないでしょ？ どうにもできないでしょ？ 一年って長いんだよ？ 人が変わるには十分すぎる時間だよ。心が潰れるには十分すぎる時間だよ」

途絶えることなく続く言葉の刃が、俺の体を切り刻んでいった。

正直、俺には超重力より、こっちのほうが身にこたえるぜ。

「兄貴が学校で楽しく現実逃避している間、私が一体どんな思いをしていたと思う？ 私がどんな重しに耐えていたと思う？ ねえ、答えてよ。楽しく学生生活を謳歌していた、木島陽平さん？」

「……ッ！ 俺は」

「だから、聞きたくないって」

重みを増す圧力。

その名の通り、月が押しつぶそうとしていると錯覚するほどだ。体中が鉛の泥に沈められ、そのまま圧殺されるイメージが俺の頭を駆け巡り、やがて、俺はそのイメージの通りに俺は潰されてしまふのだらうと推測する。

「だからさ、このまま潰されておいてよ。兄貴」

トドメとばかりに振り下ろされた右腕。

それと共に増加する圧力。

既に床はその下の大地まで露出するほどに、破壊され、俺の体も節々から血が噴出し、骨にもいくつもヒビが入っている。

俺はただ耐えるだけで、指一本動かせやしない。

だが、それでも動かなきゃいけないーだらうが。

「残念っ、だがよ、可愛い妹の頼みでも、そいつは、御免だ、ぜっ！」

俺にのしかかる月を背負うように、俺は超重力に逆らって顔を上げる。

顔には不敵な笑みを貼り付け、いかにも余裕綽々といったように

装う。

「俺はテメエじゃねーから、テメエの気持ちなんてわかんねーけどよ。それでもお前の兄貴だからな、それなりに察することもあるぜ？」

軋む体を無理やり稼働させ、ゆっくりと立ち上がっていく。

まずは体を上げ、膝を立て、腰に力を入れ、足を使って重力に逆らう。その度に体のどこかが壊れていくが、問題は無い。

このまま美月を救えないの比べれば、些事にすぎねえ！

「……さすが陽平さんです」

俺が完全に立ち上がり、目を丸くする美月を見下ろしていると、灯の賞賛の声が聞こえた。ルールの制限があるとはいえ、俺が最初に示したとおり、灯はずっと俺を見守るだけで、手を出さないでいてくれた。

俺を信頼してくれていた、と考えるのは、少し自惚れだろうか？

まあ、自惚れはともかく、少なくとも強がりにはしねーとな。

だってほら、相棒である灯と妹である美月が見てんだ。せめて、強がつて格好つけねーと、男じゃねーだろ？

「いいから、聞きやがれ、美月」

「……………うう」

俺に見下ろされているせいか、それともグラビティムーンに逆らっているせいか、美月は先ほどまでとはうって違い、怯えるように目を伏せる。

その瞳には、冷たさよりも、戸惑いが浮かんでいた。

「なあ、美月。お前の言うとおり、俺はお前にぺらぺらと言い訳を並べる資格なんざありやしねーよ。けどな、このままじゃ何も解決しねー。何も解決せず、何も進まず、ただ、逃げているだけになっちまう。俺は、それだけは嫌なんだ」

美月は上目遣いに目を上げ、眉間にしわを寄せて、俺を睨みつけた。

戸惑うような視線で、けれども冷たい視線をぶつけてきた。

「だったら、教えてよ。逃げないって言うなら、この『御影』から逃げないっていうなら、教えてよ、兄貴！ 一年前、どうして兄貴が家を出て行ったのか！ なんて、私たちから逃げたのか、教えてよ！」

俺を攻め立てる悲鳴を合図に、押しつぶされるような圧力が解除された。

その反動で、うつかり体から力が抜け、倒れそうになってしまいが、それでも四肢に力を入れて踏み留まる。

「いいぜ、答えてやる、美月。それはな」

ふらふらのままだが、ボロボロのままだが、俺はこれから長い話をする。

いや、むしろこの姿なら、あの話をするには相応しいだろう。

かつての相棒にして、情報を操る魔女 安田猫子と出会った、

あの時を語るには、ちょうどいだろう。

「あの時の俺は、お前に顔向けできないほどの『悪』だったからだ」

『悪の執行人』として、世界に反抗期をやっていた頃の、いわゆる黒歴史という恥ずかしくも誇らしい過去を語るには、ちょうどいい。

昔の話を始めよう(前書き)

さて、ここからそろそろ過去編に入ってきます。

昔の話を始めよう

何処とも知れぬ町の地下。

そこには巨大な研究施設が存在しており、ある区画では、家一軒ほどの大きさもあるスーパーコンピューターや、それに準ずる機械が群れをなし、またある区画では、ガラスで区切られた水槽に浮かべられた『人形』がいくつも並べられている。

そして、その研究施設の最下層のとある一室。背の高い本棚には、意味不明の言語で書かれた大判の本が並べられ、木目調の机と椅子が真ん中に置かれていた。この研究施設には少々浮いた一室だが、その一室は研究施設の所長にして、真つ赤な白衣を纏うマッドサイエンティスト、岸辺隔の執務室である。傍目からでは分からないオーバーテクノロジーが、うじゃうじゃと詰まっているのだ。

その執務室で、隔は『それ』を眺めて満足げに笑っていた。

「ひゃひゃひゃ、幾分、邪魔はあったけど、これで完成だねえ」
うつとりと、慈しむように隔は『それ』の頬を撫でる。

その横顔は自分の子供を愛する母のようであり、新しいおもちゃを自分で組み立てた子供のようだった。

そして、その様子を灰色髪黒スーツの女　紅花散世は無表情で眺めていた。

「所長、『それ』はまだ試験運転中です。まだ『籠』から外に出すのは危険です」

隔の背後に控えていた散世は、平淡な口調で警告をする。

「ひゃひゃ、心配は無用だ、散世ちゃん。まだ完全に覚醒させていないからね。本格稼働させるのはもちろん、色々テストしてからだよ」

「ならばなぜ、こんな無駄なことをしているのですか？」

無表情に尋ねる散世へ、隔は軽いため息を一つ。

「わかってないねー、散世ちゃん。人間って奴はさ、たとえ危険

だとしても、『達成感』を味わいたいときがあるもんさ。ふう、いくら戦闘タイプだからと言って、君もそろそろ稼動して大分経つんだから、もっと人間らしい感情を覚えなさい」

「拒否します。私はタイプ『アサシン』です、行動理由は標的の排除。不要なものをわざわざ搭載させる理由が不明です」

「あー、もう。ほんとに散世ちゃんは真面目だねえ。少しは君の後続機である陽平君を見習いなよ？」

「……………必要ありません」

少しの沈黙の後、散世は無表情に呟く。

「おやあ？　ちよつと間があつたねえ。そういえば、散世ちゃんは昔っから、なにかと陽平君のことを気に掛けていたよねー。もしかして、陽平君に好意でも持つてるのか　ぐえ」

言葉を遮るように、散世の手が、蛇のように隔の首へ巻きついた。意味不明です。理解不能です。訂正を要求します」

「わ、わかつた、わかつたから、人の首を絞めるのはやめなさい、散世ちゃん！」

さすがの隔もこれにはあせつたのか、必死にタップし、ギブアップを告げる。散世はそれでもしばらく隔の首を絞め続けていたのだが、数分後、時間と共に冷静になった散世は、あっさりと隔を解放した。

「ぶはっ、はあ、はあ。まったく、＜NHシリーズ＞の中でも、なんで君たちだけは創造主である私に逆らえるんだろうねえ？」

「恐らく、所長が逆らわれるような言動をするからかと」

「……………いや、そういうんじゃないくて、プログラムの意味でね

ー」

「…………？」

首を傾げる散世。

そんな散世を、創造主である隔はため息を吐きながら眺めていた。「ほんと、君たち『二人』は私の手を焼かしてくれる…………あの『悪の執行人』の騒ぎのときなんかもう、クレームが来まくって凄か

ったからねえ」

「はい。あの時の所長は、傍から見えても死にそうなほどでした」
「まー、予想外っちゃ、予想外だったからさー。まさか、<NHシリーズ>の中でも、一番温和に設定したはずの彼が、あんなことをするとは思わなかった」

目を細め、隔は追憶する。

ほんの数年前、世界を壊そうとした一人の少年と少女の物語を。

『悪の執行人』の物語を。

時は数年前に遡る。

僕の固体名称は『御影 陽平』だ。

人間ではない。

<NHシリーズ>No.547タイプ【エンペラー】。それが、僕の製造番号であり、役割を示す一文。

他の人間を操り、従え、皇帝となるべくして作られた存在、それが僕だ。

現に、僕は『フィクサー』と呼ばれる、世界を牛耳る巨大組織の幹部、御影時告に買われ、その息子として行動している。

はず、なのだけれど……

「あの一、美月？ ちょっと、くつつき過ぎじゃないかな？」

「えー、そんなことないよー。これくらい、兄妹なら普通だよー」

「……まあ、別にいいけど。そろそろ登校しなきゃだから、離してくるかな？」

「やだ」

「やだじゃなくて」

「学校なんて、休んで、あそぼーよー」

「ダメだよ、ほら、義務教育だから」

「義務教育なんて、クソくらえだー」

「そんなアウトローなこと言わないで」

「汚物は消毒だー」

「そんな世紀末な事は言わないで。というか、美月の価値観ではモヒカンイコールアウトローなのかい？」

まるで氷で作られた人形のように、繊細で、美しい容姿をした少女が僕にじゃれついて来る。その少女　御影美月は僕の義理の妹だ。

美月は僕とは違い、きちんと時告とその母の間に生まれた子供らしい。生まれつき体が弱く、余り外に出られない所為か、友達も少ないようだ。

そのため、どうやら他者とのスキンシップに飢えているらしく、よく兄である僕に引っ付いてくる。

「あつはっは、美月と陽平は相変わらず、仲がいいなあ」

そんな様子を眺め、時告……もとい、父さんは朗らかに微笑んでいた。

うーん、父さんつてば、初めて会った時は、明らかに『組織の大幹部』みたいなダークっぽい雰囲気を出していたのに……一年経った今ではすっかり、アットホームな父親に変貌しているから驚きだ。最初の頃は、僕に『早く使える様になれ』とか、『人を駒として扱え。それが上手に生きるコツだ』とか、『人権は確かにある。なぜなら、人権を売る商売があるからだ』とか、明らかに悪っぽい台詞を言っていたのに、今では『家族より大切な物なんかねえ！』とか、『残業はしない！　家に直帰！　それがジャステイス！』とか、完全に家族思いの父親にジョブチェンジ。週三回、家に帰ると手料理を振舞うようになっていました。

いやはや、どうしてこうなったんだろうね？　ま、僕としては楽でいいんだけど。

あ、ちなみにね、僕たちが住んでいるのは、とある田舎町の戸建ての日本家屋。なんかこう、日曜日の夕方にやっているアニメに出てきそうな家ね。なんか、僕が入学する記念に、馬鹿でかい洋館から一時的に引っ越したんだ。

父さん曰く、

「あの家じゃ、いちいち学校に通うのが面倒だろう？ それに、まだ中学生であるお前を一人暮らしさせるわけにはいけない………それに、お前が居ないと美月と私が寂しいじゃないか」

うん、父さんがそれでいいなら、いいけどさ。仕事の時は、ちゃんとダークネスってね？ 闇っぽい雰囲気出してね？

というか、そろそろ僕に命令をして欲しいんだけどなあ。

一応、最初の命令通り家族としては振舞っているけど、僕は人間人間。造られた兵器だ。やはり、周りの人間とは、隔絶が生まれるのは、しかたな

「おっはよー、ございまーっす！ おらー、陽平！ ガッコー行くぞ、ガッコー！」

「陽平くーん、一緒に行こうよー」

「あ、おはようございます、陽平のお父さん。先日はどうも。お料理、凄く美味しかったです」

「うひゃー、朝から生美月様だー！ やっぱり、お前の妹はすごい可愛いよなあ、陽平！ 妹さんをオレにください！」

僕ん家の玄関から、ぞろぞろと友人ズが入ってくる。憂鬱なはずの月曜日なのに、まったく、元気な奴らだよなあ……あー、うん。ほら、僕ってばタイプ【エンペラー】だし、皇帝だし？ 周りから好かれるスキルが合って当然というか？ ほら、皇帝らしく、尊敬されているというか？

「おいおい、またレミの奴が美月様に告ったぞ」

「またかよ、自重しやがれ、レズ」

「はっはっは、貴様ら、せめて格調高く百合と呼べえい！」

「うるさい、叫ばないで、バカ。後、私はお兄ちゃんと結婚する

から、貴方の嫁にはなりません」

「ふ、ふられたあ！？　しかも、禁断の兄妹愛！？　くそう、オレも混ぜてください！」

「ダメだ、こいつ」

「早く何とかしないと」

そ、そんなけー。

「ほらほら、何、ぼーっとしてんだよ、陽平！」

「早く行かなきゃ、遅刻すんだろ！」

「朝のデュエルに」

「カードゲーム好きだなあ、君たち！？」

「けらけら、笑いながら僕を引っ張ってくる、友達ズ。正確には、美吉と春樹。」

うん、尊敬されていません。超、馴れ馴れしくて、超、友達です。

「まったくお前らつてば……………今日の僕は、一味違っぜ？」

「おおっ、鮮血の決闘者がやる気だ！」

「いつの間にか、カードを構えているっ！？　く、そのカードは、まさか、伝説の……………」

んでもって、すげー楽しいです。

こんな風にね、バカやって、笑って、友達と遊ぶのが、すげえ楽しい。今まで、研究所でしか生きてこなかったから、こんなに楽しいのは初めてだった。

任務とか、命令とか、人造人間とか、どうでもいいくらいに楽しい。

兵器？　存在理由？　はっ、ないない、今更、そんな考え、これっぽっちも持っていないせん。元々、所長のクソババアが無理やり植え付けた価値観だし？　そんなの、友情パワーで解除したし？　ぶっちゃけ、あの研究所とは縁切っただけあるしー。研究所に居た、他の個体とはたまに連絡取り合うけど、それは個人的な友情関係で、別に『フィクサー』とか組織がらみの関係じゃないしねー。

と、いうことで、僕は気兼ねなく中学生生活を楽しむことにしたの

である。

<NH>シリーズのタイプ【エンペラー】じゃなくて、御影家の長男、御影陽平として。

「しゃー、お前らー、今日もはじゃぐぜー！ 僕に続けー！」
『おー！』

「美月は自分の学校へ行けー」

「えー」

「えー、じゃ無くて」

「んじゃあ、行って来ますのキス」

「みんなあー！ 僕に続けえー！ ゴーアヘッド！ ゴーアヘッ
ドだ！」

『サー、イエッサー！』

何かを期待して目を瞑る美月を置き去りに、僕は友達を引き連れて走る。

笑顔で、走る。

「ははっ、ばっかみてー」

さあて、今日も今日とて、青春しますか。

陽平の様子を眺める影が一つ。

「楽しそうだね、陽平」

影の主は薄く笑い、独り呟く。

「でも、気をつけたほうが良い。この世界には、赤城時春が居ないんだから」

この世界には存在しないはずの名前を、呟く。

無自覚な皇帝（前書き）

無自覚な者ほど、やっかいな者はなかなか居ません。

無自覚な皇帝

時々だけれど、僕は自分の性能が嫌になるときがある。

例えば、万能無敵な後輩を目の辺りにしたときとか。

世界を塗り替えられるくらいの才能を持った化物を目にしたときとか。

僕は、人造人間だ。

だから、性能以上の結果は多分、出せない。そういうように設計されている。例えば、【アサシン】タイプだと、暗殺に必要なありとあらゆる才能が詰め込まれ、それに見合った肉体で作り上げられている。その力は絶大で、恐らく、僕の知っている【アサシン】タイプのあいつなら、きっと大国の大統領だって鼻歌混じりに暗殺してみせるだろう。

だというのに……………

「なー、陽平。帰りにゲーセン寄ろうぜー、ゲーセン！ 都心の方に新しい奴が出たんだってさ！」

「当然、行くよな？ つーか、行こうぜ！ むしろ連れてくぞ、皆！」

「ひゃっはー！」

「了解だー！」

「あいあいキャプテンー！」

【エンペラー】の特性を持つ僕は、なぜか同級生にものすごい親しげに話しかけられていた。

時間は放課後。

今日も今日とて、気だるく騒がしい授業が終わった後、クラスの連中は僕を取り囲もうように集合したのだった。そして、現在に至る。

うん、仲良くしてもらうのはいいんだけどさ、いいんだけどねー。

こう、僕のイメージではさあ、【エンペラー】の特性を持つ僕に対して、何処かしら畏怖を持ちながらも、一定の距離感を持った友好関係になるはずだったんだよ。少なくとも、所長から受けた説明では、僕のカリスマで皆をそんな感じに従わせるはずだったんだよ。なのに、現実はいかなるものである。

僕のカリスマに従っているというよりは、むしろクラスの人気者扱い。朝の登校では、多数の友達が一斉に僕の周りを囲んで僕を迎えに来て、昼休みは、クラスメイトはおろか、他の学年からも友達が遊びにくるし。放課後では、お菓子に群がるありのよう、僕の周りに友達が集まる。うん、我ながら好かれすぎだろ、僕。

「個人的には、もっとこう、カリスマ生徒会長みたいなのが理想なんだけどなあ」

「ん？ 陽平、生徒会長がどうしたの？」

「いや、別にいい」

僕は美吉と春樹、そしてレミの三人と放課後の廊下を歩いていた。さすがに、あの人数を引き連れてそろそろ歩くのは色々無理なので、皆には後で埋め合わせをするということにして、僕は特に仲の良い三人と一緒に帰ることにした。

もちろん、寄り道はしますよ？ だって、年頃の男の子ですから。

「そーいやさー、陽平。陽平はこの高校受けたっけ？」

「ん？ 普通に地元の高校受けるけど、いきなりどうしたのさ、美吉？」

僕が尋ねると、美吉だけでなく、他の二人も曖昧に笑って肩を竦めた。

「や、俺らも陽平と一緒に高校を受けようと思ってよー」

「このトリオが解消するのも寂しいですね」

「どうせなら、高校もオレらでつるみてーじゃん」

僕は三人の答えを聞くと、ため息を一つ。

「このばっかちーん」

「いたっ！」

「むう」

「みやつ!？」

そして、三人の頭を軽く叩いた。

なにをするのさー、と抗議してくる三人に、僕は厳しい口調で語りかける。

「いいかい? 三人とも。僕を好きになっってくるのはとっても嬉しい。けどさ、そのために自分をおろそかにするのは、とてもいけないことだよ」

あきやま

秋山 美吉 みよし

爽やかな笑顔がステキなスポーツ少年である。長身で、がたいもよく、後輩の面倒見もいいバスケ部の主将なのだ。バスケの腕は全国クラスで、こんな小さな田舎で燦って良いような人間じゃない。

「美吉、君は前に僕に話してくれたじゃないか。地元を離れて独り暮らしになるけど、どうしても叶えたい夢があるから、遠くの高校へ行くこう思っているって」

「……よく、一年前のバカ話なんか覚えてんなあ」

「当たり前だろ、友達のことなんだから」

美吉はくしゃりと顔を歪めて、へたくそな笑顔を作る。まったく、いつもの爽やかスマイルはどうしたのさ?

「春樹は確か、物理学者になりたいんだっただよな?」

あいざわ

相沢 春樹 はるき

銀縁眼鏡をきらりと光らせる、細身の美少年。春樹の頭脳はとも中学生レベルで収まるものじゃなく、大学レベルの数式を難なく解き明かし、日常的に科学雑誌に載っている論文を楽しげに読んでいる。加えて、春樹自身も、いくつも論文を発表しており、新鮮な切り口で物理法則の新しい観点を見出すその才能は、紛れも無い本物。

「アメリカの大学から推薦状が届いてたよね? あっちでは年齢に関係なく、好きな物理がやれるってはいでいたじゃないか。いつもクールな君が、あんなにはしゃいでいるところを初めて見たよ」

「……そう、でしたね」

春樹は苦笑し、目を細める。

「レミだってさ、目指してんだろ？ 役者」

桜木 さくらぎ レミ。すらりとした手足に、出るところはしっかりと出ているモデル体型。軽く脱色した茶髪と、すっきりとした鼻筋と、力強い瞳。美少女、と言われて違和感の無い女子は少ないが、レミは紛れもない美少女だ。そして、演劇部に所属する未来の役者でもある。しっかりと自分の中でキャラクターを作り込み、そしてまるでそのキャラクターに憑かれたかのように演じる姿は、とても中学生とは思えない。

「芸能系の高校、目指しているって言ってたじゃんか。まったく、僕と一緒に君の親を説得してあげたのに、今更、躊躇うなよな」

「あははは、そうだったよな」

いつもは無駄に元気なのに、今日だけは乾いた笑いを漏らすレミ。……わかってる。三人とも、僕と一緒に居たから、言ってくれたんだってことぐらい、わかっている。けどさ、僕はこの三人に立ち止まって欲しくない。

友達だから、前を向いていて歩いて欲しいんだ。

「三人ともさ、高校がバラバラだったとしても、僕らは友達だよ。ベタけどさ、離れていても絆はちゃんと繋がっている、って奴ね」だから、と言葉を繋いで、僕は言う。

「今はとりあえず、バカみたいに遊ぼうぜ。今は今しかないんだからさ、せいぜい楽しんでやろうよ」

「うぐ……」

「……」

「あははは、ひっく」

あーもう、三人とも、泣かないでってばー。後、そのまま抱きつくのやめんしゃい。鼻水が制服に付くから。

……まったく、しょうがないなあ。

僕は仕方が無いので、抱きついて来る三人の頭を撫でて、気を落ち

着かせようとする。

「おやおやつ？ 青春ドラマの真っ最中だったかなっ！？」
そんな時だった。

場違いなまでに明るい声が、廊下に響いたのは。

その声に反応して、三人はびっくりと肩を震わせる。

「そうだよ、猫子。視聴率20%越えは確実なドラマさ。だから、茶々を入れないでくれるとありがたいよ」

「にやはははっ、そりゃー悪かったね！ ごめんごめんっ！」

僕らの前に現れたのは、陽気な声を響かせる少女。スレンダーな体型に、天然色の綺麗な茶髪。肩にかかる程度のショートヘアーだけれど、充分、女性らしい可愛らしさを持つ容姿。動物で例えるのなら、その名の通り、猫以外に思いつかない。

安田猫子という少女は、レミとは違うタイプであるが、間違いない美少女。そして、僕の同級生でもあり この学園の『魔女』だ。

「それで、僕に何の用かな？ できることなら、君とは余り係わり合いになりたくないんだけどなあ」

「にやははっ、そんなつれないことを言わないで欲しいねっ！ 自分で言うものなんだけど、こんな美少女とお友達になれるなんて、めったにないんだぜ？」

「残念だけど、美少女はレミで間に合っているよ」
陽気に笑う猫子。

その少女の姿は、まるでこの世の穢れを知らない無垢な子供のようだ。

だが、僕は知っている。

この猫子という少女はむしろ、そういった『悪』に属する存在なのだと。

「そっかー、うらやましいなあ、レミちゃん」

「ひっ……」

猫子がにこやかな視線を向けただけで、レミは凍りついたように

動かなくなる。恐らく、恐怖で動けないのだろう。無理もない。一介の中学生がまともに対峙するには、猫子という存在は余りにも暗すぎる。

「はいはい、僕の友達を脅すのはやめてね、猫子」

僕は猫子の視線を遮るように、レミを背後に庇い、そして後の二人も同じように背中へ張り付かせた。

「ひつどいなあ、陽平。ちょっと『お話』しようとしただけじゃないか」

「その『お話』が問題なんだけどねー。君ってば、暴力じゃなくて情報とか、権力とか、見えない物で相手を攻撃するから性質が悪いし」

「にやはははっ、君の問答無用さに比べたら可愛いものだと思うけどね？」

猫子の言葉に、僕は首を傾げた。

ん？ いまいちよく意味がわからないけど……まあ、とりあえずは、

「とにかくさ、僕の友達に手を出さないでくれ。僕に用件があるなら、他に構わず僕だけを見ていれば良いだろ？」

「にやははっ、痺れる台詞だにやー」

陽気に笑う姿からは想像もできないけれど、この猫子は、僕が来るまでこの学校を恐怖で支配していたカリスマである。学校中のありとあらゆる情報を掌で転がし、自らの支配下に生徒はおるか、教師すらも置く。

……うん、僕より猫子の方が皇帝っぽいね。

「まー、今日、私はちよっと高校の話を耳にしたから、声をかけてみただけだよ。私も陽平と同じ学校に進むから、来年もよろしくってね」

へらりとした笑みでそう言うと、猫子は翻して廊下を歩いていく。背中越しに、片手をひらひらと振り、底知れない余裕をまとって。

正直、僕には安田猫子の正体を測り知ることが出来ない。人造人

間という、常識外の存在でさえ、彼女の根底にある『闇』に比べたら、見劣りするだろうね。

けど、ここで黙っているのもシヤクというもの。

僕は猫子の背中に向かつて、堂々と言い放つ。

「同じ高校なら好都合って奴さ、猫子。高校では、ずっと君の側にいて、君が悪さしないように見張っていてあげるよ」

「にやつ!？」

僕の言葉に反応し、猫子は悲鳴のような声を上げて、足を止める。よくわからないが、少しは啖呵を切った甲斐が合ったらしい。

猫子はしばらく僕に背を向けたままプルプル震えると、ゆっくりと振り返って、一言。

「バカ」

そう言い残すと、猫子は素早く身を翻して走り去っていく。

顔真つ赤だったけど、一体、僕の何がバカなんだろう？

「陽平はやっぱりさすがだぜ」

「あの魔女にもフラグを立てるとは」

「女殺しだよな」。私も含めて」

僕が首を傾げていると、背中 で な に や ら 三 人 が 頷 き 合 っ て い る。ま、よくわからないけれど、皆が無事なら、それでいいか。

とある街の地下に存在する、研究所。その執務室に、血染めの白衣を着た金髪の少女と、彼女にかしずいている灰色髪の少女がいる。金髪の方は十代後半ほどの外見で、灰色の方はそれよりも少し幼く、十代半ばといった所。

「タイプ【エンペラー】 御影陽平の観察結果を報告します」

灰色髪の少女 紅花散世は無機質な瞳で、『所長』 岸田隔

を見上げる。

「現在、彼の通う中学校、及び近隣住民、その全てと友好関係。その制圧率98%を超えました。制圧範囲はなおも拡大を続け、『

御影陽平』という名が郊外から都心まで知られています。彼と知人レベルの人間の中で、彼に害意を抱く者は極僅か。加えて、害意のレベルも、『関わるのが面倒』というありえない低さを誇っています。この現状を、所長が推測していたデータと比べると……180%を上回る結果です」

「……んー、なんというか、相変わらず私の予想を裏切ってくれねえ、彼は」

散世の報告を聞くと、隔はにやりと唇を三日月に歪めた。

「ひゃつ、ひゃつ、ひゃつ。実地稼動から一年で、まさかここまでの成果を出してくれるとは！ さすがは『エンペラー』と分類されただけはあるねえ」

<NHシリーズ>。

それは、岸田隔が製作している人造人間のことを指す。

最新の科学技術と現存する魔術知識を混合させ、新たな人類を生み出すというコンセプトで作られた彼らは、それぞれのタイプに応じた性能を発揮する。

【アサシン】であるなら、暗殺技術に特化した性能を。

【エンペラー】であるなら、人心掌握に特化した性能を。

現在はまだ、本格的に稼動している者は数百体程度しか存在しないが、彼らには人間同様の生殖機能があり、一般的な人間と、子を為すことが可能である。

製作者である隔の最終的な目標は、<NHシリーズ>が多くの人間と交配し、多くの子を為し、その遺伝子を世界に広めることだ。

正確に言えば、遺伝子を広めることによって、人類がより良いものへと進化させる、という壮大なのか滑稽なのか分からないものだが。

「加えて言えば、彼の周りに集まる人材は優秀な者が多い。世界すら塗りつぶす画家の卵に、万能の天才。さらに、優秀なアスリートの卵に天才物理学者、そして鬼才の演者。くつくつく、たった数例でこれだよ？ こんなのが彼の周りにはうじゃうじゃいる。これがどういう意味か、わかるかい、散世ちゃん？」

「キャラが濃すぎてうざい」

「うわあ、さらって切り捨てちゃったよ、この子。うん、勿論不正解だからね？」

「所長がうざい」

「直接的な罵倒っ！？ あー、もう、散世ちゃんってば任務以外のことには、ほんと、無関心だよなー。正解はね、国を、いや、世界を回しうる人材が彼の周りに集まっていて、彼と友好関係を気づいている、ということだよ」

指導者に求められるのは、実際のところ、個人的な能力ではない。どれだけ指導者が正しかろうと、賢かろうと、優秀であろうと、人が付いてこなければ何の意味も無いのだ。

必要なのは、他者をまとめ、他者から好かれるカリスマ。後は、ある程度尊敬されるだけの人格があれば良い。それだけ在れば、一流の指導者として文句は無いだろう。

だが、陽平はそれに加えて、圧倒的な人脈が存在する。世界を回しうる人材たちが回りに存在し、それら全てを友人となり、協力し合える関係。恐らく、現在のレベルでも、陽平がその気になれば、彼が住む田舎町を掌握することも……いや、既に掌握しているといっても過言ではない。

「まさに皇帝だね。これで本人にまったく自覚が無いんだから恐ろしいよ。これで、彼が本気になったら、どうなるのか」

自分が造った『作品』の、思いもよらない成果に歓喜を抑えられずに笑みを深める隔だったが、ふと、素の表情に戻って呟く。

「でもね、陽平くん。皇帝というのは、いつも他者から狙われる立場の存在でもあるんだよ。無自覚な君は、それに気づいてないだろうけどさ」

それは、狂気の科学者には似合わない、そう、まるで我が子を心配する親のような口調だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3072l/>

ライターアースと笑おう

2011年11月27日21時48分発行